魔法少女は■されたい

kurage1022

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

■されたい魔法少女が頑張る話。

あるいは原作知識持ち転生オリ主の頑張りを外側から眺める話。

※Ｒ―１５相当のお色気シーン、過激なワード、残酷な描写があります。

目次

01 精霊さんは相談を受ける 1
02 魔法少女は行動する 17
03 彼が原作に至るまで 28
04 魔法少女は悪の組織と戦う 47
05 彼が現在に至るまで 58
06 精霊さんは軟着陸させたい 78
07 精霊さんは話を聞く_1 87
08 精霊さんは話を聞く_2 101
09 精霊さんは話を聞く_3 108
10 精霊さんは話を聞く_4 119
11 精霊さんは話を聞く_5 129
12 魔法少女は休日を過ごす 137
13 精霊さんは意見を求める 146

01　精霊さんは相談を受ける

「ねえリリィ。あなたに相談したいことがあるのだけど、ちょっといいかしら？」
「何ですかアカネ。急に改まって」
夜。マンションの一室。
リビングルームとして使われている部屋にて、契約者の呼びかけに応じて私は身体を実体化させ、彼女と向かい合う席に着いた。
契約者の少女――天峰アカネは、いつになく思い詰めた様子で口を開く。
「その……相談の前に確認なんだけど、今からわたしが話すことは絶対に誰にも口外しないで欲しいの」
「秘密の相談ですか」
「ええ。わたしとリリィだけの秘密を守るって約束してくれる？」
「もちろんですよ。決して秘密を漏らさないことを誓います」
「ありがとう。……それと、その、こっちはできればでお願いしたいことなんだけど、わたしがこれから少し変なことを言っても、あまりびっくりしたり引かないでくれると嬉しいわ」
「ずいぶんともったいぶるのですね。安心してください、私は精霊リリウム。ちょっとやそっとのことで動じたりしません」
「うん。本当にお願いだからね？」
そう言うとアカネは自分の胸に手を当て、何度か深呼吸をした。
口を開いては閉じる、躊躇う仕草を見ながらも急かすようなことはせず辛抱強く待つ。やがて、ようやく覚悟が決まったのか緊張した様子の彼女ははっきりとそれを口に出した。
「わたしがユウ君にレイプしてもらうにはどうすれば良いかしら」
「……は？」
聞こえた内容が理解できず、ぽかんと口を開けたまま硬直してしまった。
「……す、すみません。良く聞こえなかったのでもう一度言ってくれませんか」

「もう、何度も言うのは恥ずかしいからちゃんと聞いてよね？」
羞恥に頬を赤く染めながら、彼女は再び口を開く。
「わたしがユウ君に強姦してもらうにはどうすれば良いかしら」
「……」
聞き間違いであってほしいという儚い願いはあっさり砕け散った。
私の契約者であり、正義のヒロイン『ルミナスレッド』として活躍している目の前の少女はレイプ願望を告白しているのだ。そして、その願望を叶える方法について私の知恵を求めている……！
「……ふぅ。えーと、その、もう少し詳しい経緯を話してくれませんか？状況を正確に理解できないと間違った方法を提案してしまうかもしれないので」
「そ、そうね。ちょっと唐突すぎたわよね」
ちょっとどころではない、と突っ込みを入れたくなるのをぐっと堪えて視線で続きを促す。何がどうしてこうなったのか、ここは落ち着いて情報を聞き出すべきだろう。
「まずは……ユウ君について。リリィは多分気付いていると思うけど、わたしはユウ君のことが好き。恋人になりたいし、いちゃいちゃしたいし、え、えっちなことも……したいと思う」
「まあ、あれだけべたべたひっついているのを見れば流石に分かりますよ」
水瀬ユウ。
アカネと同じ学校に通うクラスメイトで、私たちと緊密な協力関係を結んでいる『魔法使い』の男だ。
彼は学生でありながらこの土地を守る使命を持ち、街を侵略する悪の組織と密かに戦っていた。
私とアカネが契約して『ルミナスレッド』になった翌日には正体が天峰アカネであることを特定して接触してきており、戦闘能力は高いが元が一般人であるが故に隙の多いアカネと、戦闘能力はさほどでもないが博識で補佐に長けたユウのコンビで数々の苦難を乗り越えてきている。
「優しいし、真面目だし、わたしのことを守ってくれるし、褒めてくれ

るし、心配してくれるし……」
「ふむふむ」
「背が高いし、実は結構身体もがっちりしてるし、爽やか系のイケメンだし……」
「ほうほう」
「朝はコーヒーを淹れてから優しく起こしてくれるし、ごはん作ってくれるし、痴漢に遭わないように一緒に登校してくれるし、戦いの後にバイト代くれるし、マッサージしてくれるし……」
「はあ」
「わたしの中で、ユウ君ともっと一緒に居たいって気持ちが溢れているの。男の人にこんな気持ちを抱くのは初めてだけど、これがきっと恋だと思う」
「私は無性にコーヒーが飲みたくなってきました」
　砂糖を吐きそうになるほど甘い惚気話だが、騙されてはならない。この少女は先程とんでもない願望を告白した輩なのだ。
「リリィはどう思う？その……ユウ君について」
「アカネと同い年であることが信じられないほど優秀な魔法使いですね。私はこれまで多くの契約者と戦いを乗り越えてきましたが、あれほどの力量を持つ協力者と組んだのは初めてです」
　基本的に私の契約者は正体を隠して戦うので、協力者を得ること自体が稀ではあるものの、それを差し引いても彼の能力は突出していると評せる水準にある。
「……それだけ？」
「それだけとは？」
「たまにユウ君と魔法理論についてお話ししてるじゃない。わたしには内容はさっぱり分からないけど、その時のリリィがすごく生き生きとして楽しそうで早口なのは分かるわ」
「早口は余計です！それに、あれは使命のために必要な真面目な話であって楽しいなどという感情は……」
「なんかアヤシイ。リリィがそう言うなら信じるけど」
「……分かればよいのです。今はあなたの相談の時間なのですから、

本題に戻ってください」
　アカネは少し話足りない様子だったものの、気を取り直して経緯の説明を再開した。
「それで次に、無理矢理されたいって思った理由について。きっかけは、ちょっと前にあった催眠怪人との戦いよ。怪人を倒してから『転移』の魔法で家に帰ってきて、変身を解いた時にあったこと。リリィも見てたわよね？」
「ええ。一見正常な状態に見えたアカネが、実は催眠怪人が死の間際に放った催眠術の影響を受けていて、家に帰った後に不審な行動をしようとした件ですね。あの時は、異常に気付いたユウがアカネを取り押さえて、強引に催眠解除の施術を行っていましたが……」
　私がかつての状況を振り返ると、アカネは何故か顔を赤くし、膝をもじもじとすり合わせた。
　いや、そんな、まさか……？
「当然だけど、あの時のわたしには催眠術にかかっている自覚なんて全然無くて。家に帰ってから普段通りにしていたら、急にユウ君が怖い顔して襲い掛かって来たように見えたの。いつも優しくて、絶対にわたしには乱暴なことしないって信じてたユウ君に力ずくで組み伏せられて、頭の中が真っ白になりながら必死で抵抗しても、彼のたくましい腕はびくともしなくて……」
　目を閉じ、どこか陶酔した雰囲気のまま彼女の話は続く。
「催眠が解けてから事情は分かったし、ユウ君の謝罪もきちんと受け入れたけど、あの体験はすごく衝撃的で、すごく……興奮しちゃったの」
「興奮しちゃったんですか……」
　当時の内心を吐露するアカネの顔はすでに耳まで赤く染まっている。
　まさかあのトラブルが原因で彼女の心境にそこまでの変化があったとは。いや、この場合は変化よりも開花と言うべきか。
「あの後、なんであんなにドキドキしたのかどうしても気になって、色々調べたりちょっと過激なそっち系の本を読んだりしてたら、自分

の性癖についてたくさんの発見があって……。『あの時の続き』ができたらどれだけ素敵なんだろうって思うようになったの」
「そうですか……」
なるほど、経緯は理解できた。
恋愛感情を抱いている相手と刺激的な接触をしたせいで、無自覚だった性癖に目覚め倒錯的な願望を抱くようになったと。
ふむ……。
「……いやいやいや！なんでそうなるんですか！普通でいいじゃないですか普通で！」
「リリィ。わたしね、正義のヒロインとして戦うようになってから何事も無い平穏な日常がどれだけ尊いものなのかが分かったの。今日と変わらない明日は来ないかもしれない。だからこそ、一日一日を大切にして後悔しないように生きていこうって」
「思い切りが良いのはあなたの美点ですが、そういう妙な方向に進むのにはもっと躊躇してください！」
「やっぱりダメかな？」
「そんなの――」
当たり前でしょう、と続けようとしてふとアカネの様子に気づく。
先程まで赤くなっていた顔色は平常に戻り、悲し気な表情でこちらの様子を窺っている。
この相談が始まってからずっと感じていた違和感の正体をようやく理解した。
そういえば、アカネが私に個人的な悩みを相談してくるのはこれが初めてではないか――？
私の契約者になってからのアカネは、毎日のように敵と戦っている。
暴力とは無縁の日々を過ごしていた少女に、ある日突然戦士としての使命が与えられたのだ。苦しいことも、恐ろしいことも、投げ出したいと思うこともあっただろう。それでも、アカネは弱音一つ吐くことなく街の平和を守っている。
きっと、今回の件も私が強く否定すれば諦めるだろう。優等生とし

ての振る舞いが染みついた彼女は、何事もなかったかのように『わがまま』を？み込んでしまうに違いない。
それは……どうなのだろうか。
倒錯した願望を抱き、一人で考えてもどうしようもなくなり、勇気を振り絞って相談したにも関わらず冷たくあしらわれてしまう。本当にその未来を選択するべきなのか？
（……いや、でも、やっぱりここは止めてあげた方がアカネのためかも……？　ううん……どうすれば……あああ……何で私はこんなことに悩んでいるんだろう……）
ぐるぐると答えの出ない問いを弄んでいる間もアカネはじっと私の返答を待っている。
その様子は前と変わらず悲し気で……あれ？すこしだけ嬉しそうな雰囲気になっているような。
（……!!このチョロ女、さては自分のために真剣に悩んでくれる人が居るだけで嬉しくなっちゃってやがりますね。人が必死に考えているというのに！だったら――）
この問題はどちらが絶対に正しいということはないのだろう。ならば先程のアカネの発言に肖り、後悔しないように自分の気持ちに素直になってみようか。

「……いくらアカネの頼みでも、ユウを性犯罪者に貶めるような計画には協力したくありません」
私がそう言うと、アカネはしゅんとした表情で顔を俯かせた。
あまり驚いている様子はない。私がこう答えるのも想定の内なのだろう。
「そ、そうよね。こんなありえない願望、よく考えなくたって気持ち悪いわよね。ごめんなさい。わたしが間違っていたから忘れて――」
「ですが！……私は、アカネがこれまで人々の平穏のため頑張ってきたことを知っています。あなたが正義感の強い性格でも、正義のヒロインとして危険に身を晒すのは生半可な覚悟で出来ることではないでしょう。なので、その献身に報いるためにも今回だけ特別に力を貸

してあげます」
「リリィ……ありがとう」
「こんなヘンテコな相談に乗ってくれる私に存分に感謝してくださいよ？まったく……」
　多少おかしな性癖を持っていても、彼女が当たり前に幸せになる権利を持つ一人の少女であることに変わりはない。こんな無茶な頼みは本来聞くべきではないが、今だけは彼女の味方でありたい気分なのだ。
「とはいえ、この相談内容にはさすがに即答できません。明日の今ぐらいの時間までには考えをまとめておくので、それで良いですか？」
「ええ。よろしくね」
「それと、何か他の相談や質問事項があれば今のうちに出していただけますか。情報が小出しになると二度手間なので」
「えーと……これは相談というかお願いなんだけど……ちょっと待ってて」
　そう言うとアカネは私室にある鍵付きの収納を開き、中にある本の山を両手で抱えて運んできた。
　一冊一冊のページ数が少ないあの薄い本は紛れもなく――
「エロ本ですね」
「うん。部屋の収納がいっぱいになっちゃったからリリィの異界の収納に入れたいんだけど、問題ないかしら」
「……いいですよ」
「そ、そんなに嫌なら無理しなくても大丈夫よ？」
「私に二言はありません」
　毒を食らわば皿までという覚悟を決めた私に死角はない。ないったらない。
　私の書庫にハードなエロ本が収められる程度……気にしなければどうということは……。
「なんかごめん……。その、リリィも読みたかったら読んで良いからね？」
「ほとんど男性向けの作品ではないですか。あなたの趣味は一体どう

なっているのです」
「あれ？リリィってそういう違いが分かるの？」
「あ〝っ」
　しまった。墓穴を掘った。
「……ふふっ。今日はリリィのいろんな表情を見ることができて嬉しいわ。この相談をするかどうかずっと悩んでたけど、今はしてよかったと思ってる」
「私も、今日はアカネの知らない表情をたくさん知ってしまいましたよ……」
　まさか、こんなことのために思い悩む日が来るとは想像もしていなかった。
　しかし、やるなら徹底的にが私のモットーだ。精霊リリウムの誇りにかけて、完璧な作戦を立案してみせる……！

★☆★☆★

　翌日の夜。
　私は身体を実体化させ、キッチンの収納からスプーンを一つ手に取ってから昨日と同じ席に着いた。
「どうしたのリリィ。そんな、スプーンを持ったまま固まって」
「……」
　私は、手に持ったスプーンをえいやっと机の上に放り投げた。
　テーブルクロスを敷いた木製のテーブルに軽い金属が当たり、リビングルームに耳障りな音が響き渡る。
「ちょっと……。お行儀が悪いわよ」
「アカネ。私は頑張りました。理解が難しい未経験の領域でも、様々なパターンを検討して必死に知恵を絞りました。でも……やっぱり無理じゃないですかね……」
「ええ……？」
　私が例の件について話そうとしていると察したアカネは、席について聞く姿勢を作った。

彼女の困惑した表情から察するに、どうやら私はなかなか酷い顔色になっているようだ。しかし、約束したからには考えた内容をきちんと伝えなければ。
「では、昨日の相談から整理した内容をお伝えします。本件の課題は大別して2種類。『手段』と『動機』があります。比較的解決が容易である『手段』の方から説明しますね」
「うん」
「まず大前提ですがアカネ、あなたは『変身』ができますよね？」
「？もちろんできるけど」
「1秒もかからず『変身』できるあなたをどうやって組み伏せて犯すというのですか。変身中のアカネを抑え込むのは高位の魔物でも困難です。ユウが身体強化の魔法を全力で使ったと仮定しても、アカネが膝蹴りするだけで一瞬で彼は壁の染みになりますよ」
「そ、それは……ほら、わたしが弱っている所を狙うとか」
「確かに、アカネの魔力が枯渇寸前であればある程度は力比べができるでしょうが、そういう状況にならないように、ユウが出撃ペースを調整したりマジックポーションを使用したりしているでしょう」
「うっ」
「その上、あなたは一瞬でも隙があれば『転移』の魔法で逃走できますからね。仮に魔力が空で『転移』が使えない状態だったとしても、魔力消費を肩代わりさせられる魔石と、『転移』の魔法が封入されたスクロールと、使い捨てで『転移封鎖』を突破できる魔道具を所持しているのを忘れたとは言わせません」
「ううっ」
これらの道具類は、各分野の専門家とコネクションを持つ者が高額な金銭を支払ってようやく入手できる品々で、アカネの無事を祈ってユウが調達してきた物だ。
なんで私がそれを攻略する方法を考えているんだろう……。
「『変身』の発動を阻害する方向のアプローチならあるいは、といったところですが、その場合大掛かりな準備が必要ですし、『転移』のスクロールは防げません。一応確認しますが、寝込みを襲うのは無しです

よね？」
「そうね。寝ている間にっていうのは風情が無いと思うわ」
「さいですか」
　女性を凌辱する際の風情について語り合うなんて初めての経験だ。出会ったばかりの頃の凛々しい彼女はどこへ行ってしまったのだろう。
　……いや、思い返してみると最初の頃から色ボケの片鱗は見え隠れしていたような。
「……暴力で解決するのが難しいのは分かったわ。だったら、弱みを握られて脅迫されるのはどうかしら」
「アカネ的にはそっちはアリなんですね」
　預かったエロ本は一応念のため目を通したが、確かに脅迫モノも含まれていた。
「脅迫のネタは何かありますか？」
「変身ヒロインなら定番の”正体をバラされたくなかったら”がある じゃない」
　定番……。いや、何も言うまい。
「アカネが正体バレしたら連鎖的にユウも破滅するので、ソレは弱みとして使えませんよ」
「えー。エロ同人なら最強の殺し文句なのに」
「仮にそんな脅しをされたとしても、あなたには相手の記憶が飛ぶまでボコボコにするという解決方法があるでしょう。他には無いですか？」
「他に……。ううん、ちょっと思いつかないわね」
「まあ、それはそうでしょうね」
　アカネは正義のヒロインとして活動している以外は品行方正な学生なのだ。貞操を好き放題にできるほどの弱みなどそうそう無いだろう。
「……ふぅ。では、そんな感じでアカネを強姦するのが如何に困難であるかは理解できたと思います。少なくともちょっとした気の迷いでどうにかできるレベルのものではなく、断固たる意志と計画性が無

ければ実現不可能でしょう。そこで次に出てくるのがもう一つの課題である『動機』です」
　一度深呼吸をして、ぐっと気合を入れなおした。どれだけ困難な目標であろうと、諦めなければ道は開けると信じるしかない。
「アカネ。水瀬ユウという人物は、女性に乱暴して無理矢理手籠めにするような男だと思いますか？」
「いいえ。ユウ君はわたしがちょっと無防備にしていてもジロジロ見てきたりしないし。いつだって彼は紳士的だわ」
「ですよね。……詰んでいませんか？」
「そ、そんなことないでしょ。わたしぐらいの年頃の男子は女子とヤることしか考えてないってカエデも言ってたし」
「私の見立てでは、悪の組織の連中を殺ることしか考えてないように思います」
　私がこれまで見て来たユウは、アカネの勝利の為にあらゆる努力を惜しまず行っている。正義のヒロインとして戦いながらエロ本を買い漁っている誰かさんとは違うのだ。
「だいたい、願望自体が矛盾しているんですよ。優しくて紳士的な人に無理矢理されたいって……そういうことをしないから優しい人なのだと思うのですが」
「正論はやめて。おかしいのは分かってるから」
　アカネは、一度考え込むような素振りを見せた後口を開いた。
「こう考えてみて。いつも冷静で頼りがいがあって、顔も知らない誰かの為に戦うことができる心優しい人が、我を失うぐらい強く求めてきたらリリィはどう思う？」
「どうって……」
　あの、鉄の理性と温かい心を持ち、私とお話ししてくれて、私と同じ目線で世界を見てくれる魔法使いの男が？
　急に抱き着いてきて、私が困惑の声を上げても離してくれなくて、お互いの心臓の音が聞こえるぐらいぎちぎちに身体が密着したとしたら。
　そんなの、裏切られた気分になって失望するに決まって――

「そそらない？」
「……っ!?　へ、変な事を吹き込まないでくださいっ」
「ふーん？」
　ちょっとだけ、ほんの少しだけ、私の心の中の何かが揺れたような気がしたが、私はそんな変態ではない。理解者を求める気持ちは分からなくもないが、そちらの道に引きずり込むのはやめてほしい。
「……強引に求められるというのから連想したのですが、無理矢理ではなく、正面からユウに恋人になってほしいと言われたらどうするのですか？」
「それは、その、場の雰囲気にもよるけど……。『何勘違いしてるの？キモいんだけど』とか言ってこっぴどく断ったら逆切れして襲ってくれないかしら」
「……」
「うっ……。そんな目で見られると流石に傷つくわ」
　おっと、私としたことが大事な契約者にゴミを見るような目を向けてしまったようだ。
「実際どうなんです？本当にその対応をするというなら、私もちょっと考え直さなければならないことがあるのですが」
「そんなの、なってみないと分からないわよ。多分、テンパってそのまま受け入れちゃうような気がするけど」
　告白を受け入れる場面を思い浮かべたアカネは、照れた表情で頬を赤く染めた。
　そうやって普通に恋する乙女をしていれば、文句のつけようがない美少女なのに……。
「でも、やっぱり普通じゃ物足りない……。抵抗できないように拘束されて、どんなことにも逆らえないように躾けられたい……」
「はいはい、分かっていますよ」
　昨日の相談では深刻に空耳を疑ったものだが、私も性癖を表に出したアカネに慣れてきたようだ。こうして難題を解決するため議論を交わすというのも、議題がアレなことを考慮しなければ悪くない。
「では、紳士であるユウを狼にするための策を考えましょう。まずは

現状認識からです。あなたとユウの関係はどれぐらい進展していますか？」
「とても大切にされているわ。それと、戦いの時はお互いを信頼し合う相棒って感じがする」
「それは分かっています。そちらではなく、男女の仲についてです。ユウがあなたを恋愛あるいは性欲の対象として見ている素振りはありますか？」
「……」
　アカネは目を逸らした。
「その、ユウ君って結構ガードが堅くて。嬉しい時は嬉しい気持ちを素直に出してくれるんだけど、それ以外の感情はあまり見せてくれないのよ。でも、きっと内心ではわたしのこと狙っていると思うの」
「そう思うなら私の目を見て話してください。つまり、一切そのような素振りを見たことが無いということですね？」
「はい……。リリィってこういう時ズバズバ来るわね」
「性分ですから」
　アカネの把握している範囲では恋愛感情を匂わせたことが無いと。
　私から見た二人の関係もそのようなものだ。異性である以前に親愛がある、家族のような仲の良さ。
　この関係が続く限り、アカネの願望が成就することはない。
「アカネの側からユウに対してアプローチをかけてはいるのですか？」
「リリィが見てない所で特別何かしてるわけじゃないけど、毎日あれだけ無防備に甘えるのは十分アプローチにならないかしら」
「あぁ、あれはそういう意図があったのですね」
「……そうよ。あんな姿を見せるのはユウ君だけなんだから」
　恥ずかし気な表情をする彼女を見ながら、いつもの様子を思い返す。
　アカネは普段からきっちりした服装を好み、制服のセーラー服を着る際はいつも黒タイツを着用している。
　髪型は、腰までの長さの栗色の髪を一本の三つ編みにまとめてい

て、おしゃれよりは真面目さの印象が強い。
ツリ目が映える美人系の顔立ちで、素行の悪い学生からは少々近寄りがたい印象を持たれているようだが、困っている人を見ると放っておけない性格からしっかり者の優等生として親しまれている。
そして、平均よりやや高い身長、同年代ではトップクラスのバスト、きゅっと引き締まった腰、丸みを帯びた大きな尻と、性的に魅力的な要素を完璧に揃えた肉体を持っている。
なるほど、確かにこんな少女が甘えてくれれば大抵の男は心を奪われるだろう。
だがしかし。
いつも誰かに頼られる彼女は、決して甘え上手ではないのだ。
「……マッサージ中に寝落ちするのも狙ってやっているのですか？」
「聞いてリリィ。あれはきっとユウ君が眠りの魔法を使っているのよ」
「ユウがマッサージ中に使用する魔法は、基本的にバイタルチェックと瘴気浄化の二種類だけです。アカネは知らないでしょうが、睡眠魔法で強制的に眠らされた人の寝顔はどうしても苦しそうなものになります。あんな、日向ぼっこする柴犬みたいな寝顔にはなりません」
「柴犬!?」
愕然とするアカネ。
「せっかくスキンシップする機会があるのですから、くすぐったそうな声の一つも出せば良いでしょうに。始まってすぐにリラックスして寝る姿勢になるのはあまりにも色気がありませんよ」
「それは……。理屈は分かるけど、無理だと思う」
「何故です」
「ユウ君のマッサージってすごいのよ？　敵との戦いで疲れた身体と荒んだ心を優しく解きほぐしてくれて、今日もまた、無事に家に帰ってこれたんだなあって心の底から安心することができるの。そのまま心地よさに浸っていると、身体の奥に溜まったモヤモヤしたものがいつの間にか消えていて……その後は寝ちゃうから覚えてないけど、あれに抗える気がしないのよ」

「アカネがすっかり骨抜きになっていることは理解しました」
元々は瘴気浄化の必要に迫られて行っていた行為にそこまで夢中になるとは。
疲労回復マッサージで相手をリラックスさせられるユウがすごいのか、アカネがそういう行為にハマりやすい性質だったのか。分からないが、現状があまりよろしくない状況なのは間違いない。
「とにかく、そんな体たらくではユウに女性として意識させるなど夢のまた夢です。どうにかしてこの女とヤりたいと思わせなければならないのでしょう？」
「ええ。男の子をその気にさせるのってどうすればいいのかしら……」
彼女の発言に、思わず怪訝な目つきをしてしまう。それだけ恵まれた肉体を持ちながら、一体何を悩むというのか。
「背後から抱き着いて、その立派な胸をぐいっと押し付けるというのはどうです。その体勢のまま、耳元で思わせぶりな言葉を囁いてやれば誘いとしては十分でしょう」
「……。わたしってそういうキャラじゃないし、それをやって怪訝な顔で『何してんの』とか言われたら立ち直れなくなりそう」
確かに、アカネがあまりにも突拍子もない行動をすると色気よりも不自然さが強く出てしまうかもしれない。
「しかし、アカネがやっても不自然でない行動に限るとできる事が非常に少なくなりますよ。ここは無理をしてでも攻める場面では？」
「変なことしてユウ君に失望されるのだけは絶対に嫌。ユウ君の前では真面目で清楚なわたしのままで居たいの。それに、わたしがえっちしたがってるのがバレたらレイプじゃなくなっちゃうじゃない」
「ああ、それも制約の一つでしたね」
性的にアピールして行為に持ち込みたいのに、相手に意図を知られてはならないという。限りなく実現困難な目標に、更に制約条件が増えていく。
「ふむ……。ここまで選択肢が少なくなると、かえって迷わなくて済みますね」

取れる手段が少ないならば、少ないなりのやり方はある。
「まずやるべきは、変に思われない範囲で女として意識させることです。おしゃれに気を遣うのでも良いですし、手料理を振舞うのも良いでしょう。ユウの好みをさりげなく聞き出して、そこを狙えばより効果的です。アカネを自分のモノにしたい、独占したいと思わせるためにも価値をアピールするのです」
「それは……。うん、そうね。でも……」
「はい、これだけでは弱いです。そこで、もう一つの策を講じます。名付けて、ラッキースケベ作戦！」
「ちょっとリリィ、テンションおかしくなってない？」
「誰のせいだと思っているんですか！」
うがー、と怒りの感情を見せると流石に彼女も申し訳なさそうに縮こまった。そのまま話を続ける。
「性的なアピールをしたい、でもえっちな女の子だと思われるのは嫌。ならば、事故を装ってドキドキ体験を演出するしかないでしょう！この作戦で柴犬を卒業するのです！」
「また柴犬って言った!?　それに、わざと失敗したフリをしてもすぐに気づかれるんじゃ……」
「大丈夫です！アカネがしっかりしているようで実は結構抜けている所があるのはユウもよく知っています！」
「ええっ!?」
こうして、今後の行動方針が決まったのだった。

０２＿魔法少女は行動する

朝の６時２９分。わたしは自室のベッドに横になりながら部屋の外の様子を伺っていた。

さっきまでキッチンでお湯を沸かしてコーヒーを淹れる音が聞こえていたからそろそろ来るはず。

「おはよう、天峰さん。コーヒー入ってるよ」

時計の針が３０分を示すと同時に控えめなノック音が響き、部屋の外から優しいモーニングコールの声が聞こえた。

いつもなら「おはよう」と返事を返す場面でも、今日は作戦のために聞こえなかったフリをする。少しすると部屋の外から人の気配が離れていくのを感じた。

そして、そのまま待つこと５分。６時３５分になった時に先程より大きめのノック音が聞こえ、再度部屋の外から声をかけられる。

「おはよう、天峰さん。コーヒー冷めるよー」

しかしこれも無視する。

ユウ君は女子のプライバシーにきちんと配慮できる人だから、普段はわたしの部屋に入ってこない。それでも、こうして朝起きないフリを続けていれば部屋に入るしかない状況に持ち込める。

２度目のノックからおよそ１分後、ガチャリとドアを開ける音が聞こえた。

「おはよう、昨日夜更かしでもしたのか……って」

ドア越しではない直接の声と同時に、息を？むような気配を感じた。どうやら作戦は上手く行ったようだ。

オペレーション・ラッキースケベの発動が決定された後、じゃあ具体的にどうすればいいのかリリィと相談して考えられたプランがこの寝起きドッキリ作戦だ。

……前から思ってたけど、リリィって言葉のセンスが古い気がする。

やることは簡単。パジャマのボタンを大胆に開き、胸の先端付近が

ギリギリ見えないぐらいまで露出した状態で寝たふりをするだけ。タオルケットは腰のあたりにかかっているから、胸の谷間を隠すものは何もない。
　このまま寝たふりを続けていれば、わたしを起こすために多少の身体接触も必要になり、清楚キャラを守ったままセクシーさをアピールできる。効果は少ないがリスクも少ない、初回には丁度いいプランらしい。
（でも、これって結構えっちなんじゃ……）
　目を閉じているから彼がどんな表情をしているかは分からないけど、ブラジャーを付けていない、薄手のパジャマ一枚を限界まではだけた状態を見られている。
　もしかしたら、学校のスケベな男子のように食い入るような目つきでこちらを見ているのかも。
　そう思うと不思議と身体の芯が熱くなり、寝たふりをしている最中だというのに顔が赤くなりそうになる。
　そのまま一人で悶えていると、顔のあたりにコーヒーの香りがする風を感じた。
「起きろー」
　コーヒーの入ったマグカップをベッドの近くまで持ってきて、湯気を手で扇いでいる!?
　くっ……なんて恐ろしい攻撃なの。
　……お腹空いてきた。今日の朝ごはん何かなあ。
　リラックス効果のある風を受けながら、それでも寝たふりを続けていると風が止んだ。
「これでも起きないか」
　卑劣な手段が通じないことが分かったようね。さあ、正々堂々どこからでもかかってきなさい！
「耳元で目覚まし時計を大音量で鳴らすのと、足の裏くすぐるの。どっちが良いかな？」
「起きるからどっちもやめて！」
　作戦を放棄してがばりと身体を起こした。くすぐりは、くすぐりは

ダメ……。
「……朝ごはんはフレンチトーストだよ」
わたしが身体を起こすと同時に、何故か驚いた表情でくるりと背を向けたユウ君は、背中を向けたままそう告げるとそそくさと立ち去って行った。
なにかおかしい。いつものユウ君であれば人と話す時はきちんと相手の顔を見るはず。おまけに、さっきから胸元に開放感があるような……？
ギリギリの所で隠せているはずの胸を見る。
そこでは、身体を起こした時に露出した二つの突起が「おはようございます」と礼儀正しく挨拶をしていた。
「ほあああああああああああああああああああああ!!!!????」

★☆★☆★

『作戦に無いアドリブを咄嗟に思いついて実行するとは、アカネもなかなかやりますね』
「コーヒーおいしい」
『でも「ほあああ」は良くないですよ。あそこは「きゃあ」か「いやあ」と言うべきでした。そうすれば花丸の１２０点をあげられたのに』
「フレンチトーストおいしい」
『……あの、元気出して下さい』
耳からではなく、頭の中に直接リリィの声が響く。
わたしとリリィの間には契約による魂の繋がりがあって、それを使えばこうやって二人だけの内緒話ができる。
『リリィには分からないわよ。気になる男子にうっかり乳首見せちゃった女子の気持ちなんて』
『それを理解できる女性は多くないと思います』
『うっさい銀髪ロングツインテ青金オッドアイ白ワンピロリ』
『やつあたりはやめて下さい』
砂糖とミルクを大量に入れたカフェオレをちびちび飲んでいる相

棒を睨みつける。
　いつもと変わらない、あどけないながらもツンと澄ました表情。苛立ちをぶつけるように、フレンチトーストをフォークで串刺しにして口に運んだ。
『アカネの清楚キャラを傷つけない形でユウを動揺させられたのですから、作戦は成功したのでは？』
『確かにそうだけど、そうだけど……！』
　ここで切るつもりの無い手札を使ってしまった。言葉にすればそれだけでも、乙女として大切な何かを失った気がする。
『というか、この作戦って本当に意味があるのかしら？』
『さあ、それはなんとも言えないです』
『意味が無いなら乳首出し損じゃない！』
『一撃で趨勢を決する秘策でないことは始める前から分かっていたでしょう。これから少しずつ城を攻めるのですから、焦ってはいけませんよ』
　この計画はどこまで行ってもユウ君次第で、わたしは受け身で様子を見るしかない。
　分かっているつもりでいたのに、あまりにも手ごたえが無いものだから自信が無くなってきた。
『では、先程の件について私からユウに聞いてみますね』
『……お願い』
　こういう場面だと、リリィが協力者になってくれて本当に良かったと思う。

「ユウ。先程アカネを起こしに行ったときにアカネの悲鳴が聞こえましたが、何かあったのですか？」
　事情を完全に把握しているリリィが、いつものすまし顔でユウ君に質問をする。
　気まずそうな雰囲気でフレンチトーストを食べていた彼は、わたしの表情をチラッと見た後その質問に答えた。
「あ、あー、いやその。……何を言ってもアウトな気がするから黙秘権

を行使します」
「なんですかその言い方は。余計気になるじゃないですか」
「どうしても知りたいなら天峰さんに聞いて。僕の口からは何も言えない」
「そうですか。……まあいいです」
そうして二人の会話は終わった。
短いやり取りでも、さっきの出来事がそれなりに重く受け止められたことは分かる。
『効いてる？』
『多分』
そういうことになった。

★☆★☆★

学園で午前の授業を受け、お昼休みの時間。
普段であれば購買で適当な昼食を買って食べるけど、今日は『計画』のため購買に寄ってから屋上に来た。
この学園の屋上は一応は生徒に解放されているものの、いつも風が強いからあまり人気が無い。だからこそ、ちょっとした内緒話をする時なんかに使われている。
屋上への扉を開けると、メッセージアプリで会う約束を取り付けた相手がわたしを待っていた。
「ちーっす。アカネがあたしを呼ぶなんて珍しいじゃない」
坂本カエデ。
黒いサイドテールをぴょこんと跳ねさせる彼女は、わたしにとって幼稚園の頃からの幼馴染みで、物心つく前からお母さんが居なくてお父さんも家を空けることが多かったわたしと姉妹のように育った大親友だ。
「来てくれてありがとう。今日は『情報屋』としてのあなたに聞きたいことがあるの」
「ほーん？」

カエデはニヤリとした表情で怪しく瞳を輝かせた。
そう、この女は小学生の頃将来の夢に『情報屋』と書いて担任の先生を困らせたことがある筋金入りの噂好きで、彼女の持つノートには学園に所属する生徒と教員全員の詳細なプロフィールが記されているなんてバカげた話もあるぐらいだ。
わたしはそれが尾ひれのついた噂であると知っているけど、彼女の情報収集能力が本物なのは間違いない。
「実は、学園にちょっと気になる男の人が居て、その人の好みのタイプが知りたいんだけど……」
わたしがそう話すと、何故か彼女はしかめっ面をして口を開いた。
「アカネさあ……国広先生は確かにかっこいいと思うけど、あの人既婚者だよ？不倫は良くないって」
「ちょっと、わたしはまだ誰の話か言ってないんだけど？」
「え、違うの？じゃあデイビッド先生とか？あの人は確かに独身だけど、木幡先生と付き合ってるって噂があるのよね」
「だから、なんでまた先生なのよ。カエデの中でわたしのイメージはどうなっているの？」
「イケメンパパのせいで男性観拗らせて、同年代が子供にしか見えなくなった哀れな女」
こいつ……！でも、人生のほとんどの期間を一緒に過ごしてきたぐらい付き合いが長いせいで否定しきれないのが辛い……！
「年上が好みなんじゃなくて、落ち着いて頼りになる人がタイプなの。それでその、気になる相手っていうのは……クラスメイトの水瀬君なんだけど」
「ほう、水瀬って……あの水瀬？サボり魔でいつも本を読んでるあいつ」
「うちのクラスに水瀬っていう苗字の人は一人しか居ないわ」
「りょうかーい」
彼の名前を伝えると、カエデは鞄の中から一冊のノートを取り出して水瀬君の情報が記されていると思しきページを開き、彼のプロフィールを公開した。

水瀬ユウ。
広品学園２―１在籍。所属する部活、委員会活動は無し。
学業成績は上の下あたり。
身長は１８０ｃｍほどで鍛えられた身体つきだが、何によって鍛えられたものなのかは不明。
性格は温和で誰にでも分け隔てなく接するタイプだが、人付き合いが悪くクラス内では孤立している部類に入る。
昼食時は購買の試作新商品をまずそうな顔をして食べている様子がたびたび目撃されている。新商品が無い時はカロリーブロックと野菜ジュースで済ませている模様。好きな食べ物は不明。
休み時間はハードカバーの小説を読んで過ごしている。小説のジャンル等は不明。
家族構成、住所等は不明。
他県からの進学のため、中学以前の経歴は不明。
特記事項。
遅刻、中抜け、早退の頻度が極めて高いが教員からは何故か注意されない。また、サボりの常習者ではあるが出席率自体は高く、何かやむを得ない事情で離席していると推察できる。最近はほとんど離席しなくなった。理由は不明。
不明の項目が多すぎる。あたしのクラスメイトでありながらミステリアスキャラなんて許すまじ。
友達でもない相手の情報をここまで詳細にプロファイリングするなんて、流石はカエデ……と思ったけど、何かツッコミどころがあるような。
「ミステリアスキャラがどうのって……何よそのメモ」
「うちのクラスじゃ水瀬以外のプロフィールはそこそこ満足できるところまで埋まったんだけど、水瀬の情報がどうにも埋まらなくてさあ。アカネが情報提供してくれるならあんたの好きなビターチョコレートを買ってあげてもいいわよ」
「わたしが水瀬君の情報を聞いている所なんだけど……。というか、結局水瀬君の女性のタイプも好きな食べ物も趣味も分からないって

こと？」
「残念だけどそういうことねー。さしずめ広品学園２―１のラスボスにしてあたしの宿敵ってところかな」
　勝手に宿敵扱いされてる……。カエデに目を付けられるなんて彼も災難ね。
　内心でユウ君に同情していると、彼女は何かを勘違いしたのかアホ毛を跳ね上げて怒り出した。
「むっ！さてはあたしのことを『役に立たない情報屋だな』なんて思ったわね！」
「ちょっと思った」
「むむっ！それは許しがたい！というわけで、水瀬ユウに関する極秘情報を公開するわ！良い情報だと思ったら今度購買の焼肉弁当を奢りなさい！」
「それでいいけど、普通の情報が穴抜けだらけなのに極秘情報はあるの？」
「あるんだなーこれが」
　彼女はそう言うと先程のノートとは別の小さな手帳を取り出した。
「極秘情報その一！放課後、落ち込んだ様子のマキマキが水瀬を連れて生徒指導室に入っていく様子が何度か目撃されているわ。中で何をしているかは分からないけど、しばらくした後に元気になったマキマキが出てくるから多分励ましてるんじゃないかな」
　何やってるのマキ先生……。
　おどおどしていて自信なさげな様子が目立つ若い担任の先生を思い浮かべる。あの人、授業は分かりやすくて生徒思いなのも伝わってくるんだけど、クラスのみんなには舐められているのよね。
「この『生徒指導室ホストクラブ事件』の評価はどう？」
「面白いけど、水瀬君の情報じゃなくてマキ先生の情報じゃない。０．５焼肉弁当」
「くっ、これでもダメか……」
　大げさな仕草でダメージを受けたような動きをするカエデ。
　こういう場面の彼女は情報屋ごっこを楽しむのが目的であって、弁

当を奢ってもらえるかどうかには執着していない。だから、情報の評価に手心を加える必要は無い。付き合いが長いからそれくらいは分かる。
「ぐぬぬ……。ならば、極秘情報その二！あたしたちが入学してすぐの頃に体育と保健と生徒指導の先生が変わったけど、実はその３人は生徒に手を出す淫行教師で異動先は刑務所だった！そいつらの告発に水瀬が関与していたって話よ」
　急にスケールが大きくなった。というかツッコミどころが多すぎる。
「本当にそんなことがあったのならとんでもない不祥事だから大きなニュースになってるでしょ。どこの情報よ」
「噂話だから裏は取れてないわ」
「あなたねえ……。人に教える情報なら確認ぐらいしなさいよ。０焼肉弁当」
「ダメかー。いや、噂は噂で結構需要があるのよ？」
　０点をつけられてもあっけらかんと笑ってみせるカエデ。彼女はいつだって明るくマイペースで人の話を聞かない暴走列車だ。真面目ちゃんと呼ばれているわたしの親友だと言うと驚く人は多いけど、昔から彼女とは不思議と馬が合う。
「極秘情報その三は無いのよねー。うーん、あとはここ最近の街中での目撃情報ぐらいしか――」
「詳しく」
　わたしと一緒に居ない時のユウ君が何をしているのかは是非とも知りたい。
「おっ、食いついたわね。といっても大した情報じゃないんだけどさ。夕方から夜にかけての時間帯に、市街地とか繁華街とか裏通りとかでばったり出くわしたって人が居るのよね」
「へえー」
　いつも早めの時間帯に夕食を取った後、どこかに出かけているのは知ってたけど、街に出かけて何をしているんだろう。
「その目撃者っていうのは、実を言うとあたしなんだけど」

「え？」
「最近、全身タイツが制服の反社会組織『リベレーター』とか、悪の組織と人知れず戦う変身ヒロインが出没するとか、夜の街を歩いていたらＵＭＡを目撃したとか、白い仮面を付けた黒づくめの怪人が出るとか変な噂が多いじゃない？」
　彼女の話は続く。
「そういう噂の目撃情報を辿っていると、気づいたら結構遅い時間になってることがあるんだけど、そういう時は何故か水瀬のやつと偶然会うのよねー。会うたびに『もう遅い時間だから家に帰った方が良い』って言われるのは何なのかしら」
「それ、は……」
　わたしのことがもう噂になってるんだ……じゃなくて、カエデのことが心配だ。『リベレーター』は本物の悪の組織だし、最近の街は夜の闇に紛れて魔物が徘徊する危険地帯になっている。
「ちょっと、カエデも一応女の子なんだからあんまり遅い時間に外出するのは危ないわよ？」
「一応ってあんたね……。まあ、あたしも念のため防犯グッズは持ち歩いているし、治安が悪い地域には近づかないようにしてるからへーきだって」
「あなたは昔から情報収集に夢中になると勝手に私有地に入ったりするじゃない。あんまりにも目に余るようならおばさんに言いつけるわよ」
「やーめーてー」
　自他共に認める変人であるカエデも、お母さんに雷を落とされるのは怖いらしい。わたしにもお母さんが居たらあんなふうに怒られたのかな。
　ともあれ、今できるのはこれぐらい。彼女を説得しようにも、悪の組織や魔物のことは教えられないから説得力が足りない。
「それよりも！今の情報の査定価格はおいくらでしょーか」
「……０．５焼肉弁当。明日のお昼は奢るわ」
「やったぜ」

★☆★☆★

「……一回ぐらい、怖い目に遭ってもらうべきなんだろうか」

０３　彼が原作に至るまで

転生したら魔法使いだった。

正確に言うと、神秘が秘匿されている方の現代ファンタジー系の世界観でそこそこの名家の魔法使い家系の長男として転生した。

神様のミスがどうのこうのとかのやりとりをしていない僕がなんで転生とかしちゃってるのか疑問に思いながら、魔法勉強するのおもしれーと適当に生きていたら、より重大な事実に気付いてしまった。

あの、妹をあやしながら適当にテレビを点けた時に流れたニュースで。

『広品市で起きた爆発事故の追悼式に多くの人が集まり、遺族など参列者から献花台に花が手向けられ――』

ふーん、広品市かー。前世では聞いたことの無い地名だけど、前世とは微妙に違う世界みたいだしそういう違いはあるよね。

広品、広品……なんか聞き覚えがあるような……あっ、そういえば『魔法少女ルミナスレッド』の舞台がそんな地名だったような。

あの作品の世界観は現代ファンタジー系だったし、魔物関連の被害を爆発事故として隠蔽したって描写もあったなー。あっはっは、すごい偶然もあるもんだなー。

現実逃避はやめよう。この世界はエロ同人の世界だ。

過去に起きた事件や魔法関係の関連資料を必死に調べても、結局はあの作品との符合が増えるだけだった。

魔法少女ルミナスレッド。税込通常価格１９８０円。ジャンルは女主人公モノのＲＰＧで、ヒロピンや段階エロが秀逸な素晴らしい作品だ。

正義のヒロインが戦いの中でえっちな目に遭ってだんだんエロくなる様子には息子が大変お世話になりました。

この世界がエロ同人世界だった場合何が問題なのかというと、この作品、バッドエンドの種類が非常に豊富にある上、バッドエンド後に悪の組織が世界征服に成功する描写があるのだ。

悪の組織『リベレーター』の最終目標は全人類を奴隷にした人間牧場なので、もし実現したらマイマザーとマイシスターは魔物の苗床に、マイファーザーと僕は良くて奴隷か種馬、悪ければジンジャーマンクッキーのようにバリバリと食われてしまうだろう。

戦う変身ヒロインが負けただけで世界が滅ぶなんて、まるでエロ同人みたいだあ。

この世界があの作品の展開通りに進むと仮定して、主人公ちゃんが悪の組織を撃破するハッピーエンドに到達できる可能性はどれぐらいあるんだろうか。

元々エロがメインの作品だから主人公が強い理由についての描写があまり無いし、修行パートも無いし、ラスボスの弱点を突くキーアイテムを探すような展開も無い。魔法少女が素のスペックで悪い奴らをなぎ倒すだけの展開に終始する。

そのため、原作知識のアドバンテージがほとんど無い。これが推理小説の世界なら、プロローグが始まる前にひっそりと黒幕を始末するような介入もできただろうに。

いずれにしろ、何もしなくても正義のヒロイン様が世界を救ってくれるだろうと楽観視して世界が滅んだら後悔してもしきれない。

家族や自分の身を守るため、今後は主人公ちゃんの援護をする方法や、主人公ちゃん以外のラスボスを撃破できそうな戦力を探していこう。

★☆★☆★

小学生時代はひたすら魔法の研鑽に努めた。水瀬の家は『水』の属性を持つ治療魔法使いの家系で、特に魂に干渉する魔法に長けているという。

初めの頃は手から出る光を当てると傷口が塞がるような魔法をイメージしていたけど、ここはエロ同人世界。治療魔法使いというのはエロ同人みたいな目に遭った女性を治療する方がメインの職業らしい。

性教育もまだの小学生に寄生触手の摘出方法やふたなり化の治療方法を教えるなんて、マイファーザーは倫理観がバグってませんかね。

一族の秘伝魔法である魂の浄化についても勉強した。魂というのは人が生きていくうえで重要な臓器らしい。その分類でいいのか魔法使い。

肉体が損傷すれば魂にも損傷が刻まれるし、魂が傷つけば肉体も不調になるという。幻肢痛の原因の一部がコレ？現代医学じゃ分からないわけだ。

魂の状態を変えることで肉体に干渉できるなら、もしかすると……。今度の小遣いでハツカネズミを買ってきて実験してみようか。

★☆★☆★

中学生になり、ある程度身体が育ってきた頃、通称『教会』と呼ばれる魔法使いの組織に入った。

『教会』は人類に敵対的な魔物を密かに狩る国際的な組織で、主に寄付金で運営されているらしい。原作にこんな組織出てこなかったんですが。

中学生が入れてもらえるか心配だったものの、絶望的な人手不足と某時空管理局並のブラック体質により、見習いとしての参加が許された。そんなことしてるからいつまで経っても人手不足なんだぞ。

ここで今後の活動資金と、強者への伝手、戦いの経験を得ていこう。

★☆★☆★

とりあえず先輩に付いていって適宜回復魔法で支援すればいいらしい。あとは流れでなんとかすると。ＯＪＴですね分かります。

先輩が僕の事を「くすりばこ」と呼ぶのに苦情を申し立てた。名前を憶えて欲しかったら生き延びろと言われる。『教会』マジでブラックだな。

しばらくして回復担当として役に立つことが分かると、容赦なく仕事の呼び出しがかかるようになった。中学生をこき使うんじゃない。ほとんど不登校状態だぞ。

確かに、今更中学校に通うよりは『教会』の仕事してた方が将来の役に立つけど（転生者並感）。

というか、人員の入れ替わりが激しすぎるような……。え？あの人魔物に食われたって？そう……。

★☆★☆★

いつものように先輩に連れまわされていると、『教会』の施設の廊下で淀んだ目をしたシスターさんとすれ違った。明らかに精神を病んでいる。

先輩曰く、ああいうのは先が長くないから近づかない方がいいらしい。そこで休ませてあげようとならないあたり『教会』はほんとさあ……。

確かに『教会』は辞めることへのペナルティとか無いし、志願入隊率１００％だから自己責任ではあるけども。

★☆★☆★

案の定、例のシスターさんは任務中にミスを犯してエロ同人みたいな目に遭ったらしい。救助された彼女は『教会』の息がかかった医療施設のベッドに縛り付けられて、聞くに堪えない奇声を上げている。

こういう時に救助できる可能性が残るあたり、この業界の女性は有利だと思う。生きたまま発狂するような目に遭うより死んだ方がマシという話は別として。

前線で回復アイテム扱いされる仕事ではなく、彼女の肉体的な治療と、可能であれば正気に戻す仕事を任された。精神が復調しなかった場合は適当に記憶を改竄して前線に戻すらしい。鬼か。

記憶改竄は脳への負担が大きいからできればカウンセリングで治

療したいな、と思いながらベッドに近づくと、僕と言う男を認識した彼女はセックスセックスと喚きだした。
一応は人間の言葉を発せる状態なのか。さて、精神医学は専門外の僕にどれだけのことができるだろうか。
持ちうる限りの治療魔法を使って彼女の肉体を癒した。とはいえ、魔物の媚毒は一度浸透すると抜くのに時間がかかる。しばらくは継続して治療を続ける。
問題は精神の方だ。肉体的には健康に近い状態に戻っても、彼女は相変わらず喚き続けている。そんなに叫ぶと喉が痛むぞ、と思ったけどエロ同人みたいな目に遭った時点で散々叫んだだろうから今更だった。
今の彼女は人の言葉を聞こうとする意思が欠片も無い。こういう状態の人間に言葉を尽くすだけ無駄なのは前世の経験で理解している。仕方ないので拘束された彼女の手を握ってみた。その体勢のまま、狂気の宿った彼女の目をじっと見つめる。
握手は広義のセックスだと思う。だから、今はこれで満足してくれないだろうか。

★☆★☆★

3日ほどにらめっこを続け、根負けした彼女が隙を見せた瞬間に怒涛の励ましの言葉とお説教を叩き込んだ。潰れる前に辞表を出すのは社会人の基本スキルだぞ。僕はやったことないけど。
『教会』の精神外科医の診断は正しく、やはり彼女は狂ったフリをしていた。いやまあ狂人のマネをして記憶改竄処置を受けようとする時点で十分に狂っているんだけども。
会話ができる状態になってもシスターさんの目には狂気の光が残っている。それ戻らないの？
なんやかんやあって拘束を外しても問題無いぐらい復調したシスターさんと、レクリエーションの一環として組み手をする。彼女の自尊心を回復させるためわざと負けようとしたら、病み上がりのくせに

クソ強くて素でボコボコにされた。『教会』のシスターこわい。
すっかり元気になった彼女は、ひどい目に遭ったのだからこんな危険な仕事は辞めるんじゃないかと思ったけど、結局『教会』の仕事は続けるという。なんでも、モチベーションが下がっていた原因である悩み事が解決したらしい。本人が納得しているならよし。

★☆★☆★

以前から研究していた、魂の治療を肉体に反映する魔法がようやく安定して行使できるようになった。
限度はあるものの、通常の治療魔法では手に負えない部位欠損や肉体の変質を治療できる。
これを『復元』魔法と名付けよう。ありがとうハツカネズミさん。ありがとう名も知らぬ死刑囚さん。

★☆★☆★

進学のため準備を進める。やはり、主人公ちゃんと同じ学園に入学すると何かと都合が良いか。
調べてみると結構偏差値が高い。広品学園なんてバカみたいな名前してるくせに名門とかふざけているのか。
とりあえず、中学の内申書の偽造はするべきだろう。父さん母さんこんな不良息子でごめんなさい。全部悪の組織って奴らが悪いんです。
中学卒業を機に『教会』の仕事を受ける頻度を減らすと伝えた。理由は、中学と違って高校は義務教育じゃないから出席日数が足りないと留年するため。
それを聞いた先輩が腹を抱えて笑いだしたので一発ぶん殴ってやろうとした。普通に躱された。ちくしょう。

★☆★☆★

実家から広品市にある単身者向けのマンションに引っ越した。主人公ちゃんの家まで徒歩5分の好立地だ。
広品学園に入学し、主人公ちゃんの存在を確認した。とりあえず主人公ちゃんが居ない世界とか、主人公ちゃんが魔力を持っていない世界とかじゃないことを知れてよかった。
今は接触をせず、マークだけしておく。
学園入学祝いに、先輩から気配隠しの護符、シスターさんから魔法発動体として使用できる短剣を貰った。僕の戦闘スタイルは暗殺者系だからどちらもありがたい。先輩の贈り物からはお前はこそこそしながら回復魔法連打してればいいんだよみたいな圧を感じるけど。
『教会』でしばらく仕事をして分かったのは、この世界は魔法使いの数が少なく、戦える技能を持った魔法使いとなるともっと少ないということだ。
ラスボスの打倒どころではない。そのへんの瘴気だまりに自然発生する魔物の処理にすら手間取っている。
ルミナスレッドの代わりとなる戦力は、未だ見つかっていない。

★☆★☆★

広品学園に入学した理由の一つである淫行教師の排除を実行する。この学園には作中随一の種付けおじさんである鬼畜体育教師が居るのだ。
以前から生徒に手を出していたという描写が作中にあったから、原作開始前のこの時期でも多分犯罪者になっているだろう。
ベッドシーンに入ってしまえば正義の変身ヒロインすら問答無用で屈服させる無敵の種付けおじさんが相手でも、魔法を使えば犯罪の証拠を押さえるのは難しくない。
……体育教師の犯罪の証拠を探していたはずなのに、何故か生徒指導主任と養護教諭の淫行の証拠も見つかった。
名門とは一体……。これがエロ同人世界の学園の標準だったりす

るのか。オナホ養成学校しか無い世界なんて嫌すぎる。
普通に告発するとたくさんの人に迷惑がかかりそうだったので、魔法使いの組織に接触して依頼を行う。
『神無月』と呼ばれるその組織は、土地の浄化による魔物の発生予防と、情報工作を用いた神秘の秘匿を主な役割として持つ。運営資金は税金。つまり国営組織だ。原作にこんな組織出てこなかったんですが（二回目）。
税金をちょろまかして運営している都合で懐が寂しく、構成員のほとんどは表の職業を持ちながら副業的に参加しているらしい。世知辛い。
『神無月』の構成員だという、やたら目つきが鋭い婦警さんに証拠を渡し、後はよろしくお願いした。
その後、警察と学園の間で密かに交渉が行われ、淫行教師達は静かに刑務所へドナドナされていった。
加害者が居るということは被害者も存在するのだが、そちらは僕にはどうすることもできない。彼女達には強く生きて欲しい。

★☆★☆★

『教会』の仕事を減らすと言ったのに相変わらず頻繁に呼び出しがかかる。最近触媒や座標指定補助無しで『転移』の魔法を行使できるようになったから、学業と両立できてしまうあたりタチが悪い。活動資金はいくらでも欲しいので受けられる仕事は受ける。
広品市は原作の舞台であり戦場となる場所なので、以前から構想していた広域魔法監視網の構築を始めた。
頼みたいことがあるので、この土地に住む魔法使いに挨拶をする。マッサージ店の店主を務める彼は、シナリオには絡まないものの名前付きの原作キャラだ。
それなりの金額を提示して、あなたの技術を教えて欲しいと伝える。店主は理由を言わないと教えられないと答えたので、彼女ができた時にアヘアヘさせたいからですと本気の顔で言うとイイ笑顔で握

手してくれた。エロマッサージはロマン。
これからは師匠と呼ばせてください。

★☆★☆★

世話になっている魔法業界の情報屋さんに耳より情報を届けられた。なんでも、とある錬金術師の家系の長女が借金を抱えて実家から勘当され、借金取りに風呂に沈められそうになっているらしい。
魔法関係者が闇金に捕まるのは率直に申し上げて草生える。そんな状況に追い詰められても誰も助けてくれないのは草枯れる。
確かに、その経歴からして能力や人間性に疑問符が付くけど、僕が『教会』で稼いだ資金を使えば借金を肩代わりして身柄を引き取れる。
前から錬金術師の協力者が欲しいと思っていたし、ここは掘り出し物を期待して連絡を入れてみようか。

★☆★☆★

ぼさぼさの髪、隈だらけの目、ボクっ娘。

★☆★☆★

錬金術師としての仕事をするには設備が必要と言うので、ボクっ娘の言う通りに物件から内装まで調達する。活動資金に羽が付いて飛んでいく。『復元』を使えるようになってから治療依頼の単価が上がったから、また稼げばいいといえばそうなのだけど。
ピカピカの設備に無邪気に喜ぶボクっ娘に、その設備の代金は君の借金に上積みしていると容赦なく告げた。利子は取らないからキリキリ働いて返して欲しい。
ボクっ娘が借金を抱えた経緯は、高級素材をふんだんに使った無駄に多機能な製品を作って、まったく売れずに在庫を抱えてしまったためらしい。

最初の頃は家族が代わりに借金を返してくれたものの、何度も同じことを繰り返して愛想を尽かされたと。完全に自業自得で欠片も同情できない。

とりあえず、呆れるほど商売のセンスが無いアホには勝手に物を作らないように厳命した。

何かを作らせないとただのヒモ女になるので、まずは能力を見るために単機能のバステ耐性アクセサリを設計させる。尊大な物言いをするボクっ娘は予想以上に手際よく資料を作成し提出してくれた。

性能諸元に不審な所はない……と思ったらわけがわからないぐらい原価が高い。性能を１％上げるために値段が１０倍以上する素材を使うのはいかんでしょ。そういう高級志向はオーダーメイド品の領域だ。

知識と技術があって人間性に問題があるタイプの人材なら、扱い方次第でなんとかなるか。

★☆★☆★

売れる製品を作るため、需要のある組み合わせのバステ耐性アクセサリを考案する。先輩が任務中に死にかけていた様子を思い出しながら、単独行動時にかかると行動不能になって詰む類のバステだけをリストアップした。

あの人、僕が後ろで援護していなかったらとっくにくたばってるよな。いや違うか、僕が後ろに居るからあんな無茶な突撃を繰り返すのか。カジュアルに命を預けられると感覚が麻痺してくる。

作って欲しい物の概要を伝えるとボクっ娘にめちゃくちゃに渋られる。とにかく全部乗せが作りたいらしい。それやって中途半端な性能になって失敗したのをもう忘れたのか。

次はいける気がするという寝言をほざくアホをなんとかなだめすかし、機能を絞ることに合意させた。そうしたら今度は制限の中で最高の品を作りたいと言い出し、むやみやたらに高級素材を使ったハイエンドモデルを提案してきた。そういうのを欲しがるのは未知の大

深度異界を探索するようなごく一部の層だけであって、普通の戦闘系魔法使いなら仮想敵に合わせた必要十分な性能さえあれば良いと説得する。

素人が専門家に口出しするなとキレられた。実際に現場で装備品に命を預けるのはその素人だと反論する。借金の事を持ち出して強引に押し通そうと思う気持ちを抑え、今回我慢したら全部乗せを一つ作っても良いという交換条件を出す。ボクっ娘は渋々条件を受け入れた。

そんなに全部乗せが好きなのか……。元々主人公ちゃん用に全部乗せを一つ確保しておこうと思っていたので、一つまでなら問題無い。

素材を仕入れ、試作品を作成していく。複数の耐性をそれぞれの耐性強度を調整しながら一つの装備品にまとめるのはかなり難しい作業のはずだが、ボクっ娘は涼しい顔で手を動かしている。全部乗せよりは簡単らしい。こいつ変な所で有能だな。

出来上がった試作品を対象に各種試験を行い、性能諸元と希望価格を付けて宣伝を行った。需要が読めないから今回は受注生産で行く。

★☆★☆★

ギリギリの所で生き延びた経験を持つベテランを中心にぽつぽつと注文が入った。先輩とシスターさんにも買って貰えた。素直に嬉しい。

でも、先輩はなんで同時に複数付けても意味が無い装備をこんなにたくさん欲しがるんだ。『転移』のスクロールと一緒に新人に貸し出す？この業界はお人好しから先に死んでいくと口を酸っぱくして言っていたのはどこの誰でしたっけ？

発注が入ったからすぐに製造を始めろとボクっ娘に伝える。彼女はしばらくの間呆然と立ち尽くした後、震える声で天才錬金術師であるボクに感謝しろなどと言い出した。ここで機嫌を損ねても困るので、適当な感謝の言葉と合わせてこの調子で働いて借金を返してくれ

ることを期待していると言う。何故かギャン泣きしだした。泣いてないでさっさと作れ。

この一件からボクっ娘が素直に言うことを聞くようになったので、回復薬やブランクスクロール等の消耗品の生産を任せる。大手でも老舗でもないうちはこの手の商売では勝ち目がないが、僕がブランクスクロールに魔法を書き込む作業を担当すれば、供給不足の分野に参入するぐらいはできる。

素直になったといっても、相変わらず高級志向のボクっ娘が勝手に高級素材を使った消耗品を作ろうとするのをやめさせる。自信満々で謎製品の設計書を提出してくるのを理詰めで却下する。調整すれば売り物になりそうな案がたまに来るので、全力で軌道修正して製品化する。

こいつはいちいち細かく指示してやらないとまともに仕事ができないのか。協力者ができて楽になったはずなのに、むしろ仕事が増えている。

★☆★☆★

やる事が多すぎて時間が足りない。解決方法が無いかボクっ娘に相談する。

飲むと3日間寝ずに働ける代わりに、効果が切れると反動で2日ぐらい寝込む魔法のクスリが作れるらしい。

回復魔法で反動を誤魔化せないか実験してみる。ぶっ倒れて1日寝込んだ。一応軽減はできているけど1日行動不能になるのは許容できない。もっと調整が必要だ。

寝込んだ時に、頼んでもいないのにボクっ娘に看病された。こいつこのキャラで料理上手なのかよ。

調整の末、1日3時間睡眠でも8時間睡眠並のパフォーマンスで活動できるようになった。協力してくれたボクっ娘を褒め称える。しかし、いつも尊大な態度で調子に乗った発言をする彼女は、今回はあまり嬉しそうではなかった。

人の心はそんな無茶が続けられるようにできていない？知ったことか。

★☆★☆★

広域魔法監視網の構築が終わり、稼働を開始した。市内各所に設置した魔法陣から微弱な探知魔法を発し、統合処理することで魂・魔力・瘴気反応の座標を検知できる。イメージとしてはアクティブソナーに近い。動力源はメインが霊脈でサブが魔石。

これがあれば敵の動向を把握できるし、シナリオ内の探索フェイズもほぼスキップ可能になる。主人公ちゃんが生身で探索している時にスタンガンで気絶させられて、そのまま薬漬けバッドエンドに直行するような世界だ。治安の悪さを舐めてはいけない。

この監視網を『カサンドラ』と命名する。破滅の未来を予言しながら何も変えられなかった悲劇の王女。今の状況にぴったりの名前ではないか。

ルミナスレッドの代わりとなる戦力は、未だ、見つかっていない。

★☆★☆★

二年生に進級した。そろそろ原作の開始時期が近い。このまま何も起きなければいいのにという願いは叶わず、『カサンドラ』により強大な瘴気反応が複数検知される。

動き出したか、ドクター。

人型で、人語を話し、強大な瘴気を持つ魔物。怪人と名乗るその存在は、それぞれの持つ特殊能力を用いてこの街の裏社会を急速に支配していった。

たった一体で『教会』の精鋭部隊を蹂躙しうる化け物が、闇に紛れて組織的に活動している。悪夢のようなその光景を克明に記録し、報告書をまとめた。

『教会』と『神無月』の上層部に報告書を提出し、この事態を収集可

能な戦力を出せるか質問する。
『教会』からは、招集可能な全ての戦力を結集しても勝ち目が薄いため、静観しながら機を伺うしかないと返答が来た。
『神無月』からは、特級戦力の『神降ろし』が現在空席なので、次代の巫女が戦えるようになるまでの一年間をなんとか持たせろと返答が来た。
完全に予想通りの内容に、面白くもないのに乾いた笑いがこみ上げてくる。そうだよな、そうでなければ原作の展開にならないよな。

★☆★☆★

戦力の捜索を打ち切り、主人公ちゃんの援護のために事前にできることを進めていく。
既存の秩序を破壊し、新たなる秩序を打ち立てるという理念を掲げた『リベレーター』なる組織が新規隊員を募集している。社会に絶望した若者を中心に志願者が集まっているらしい。
全身タイツとガスマスクを着用した『リベレーター』戦闘員を一人拉致し、その戦闘能力を調査する。装備を付けた状態の能力を調べた後、装備を剥ぎ取って解析を行う。中の人はいらないので適当に記憶封印処置を施し放流した。
調査内容をまとめて各組織の上層部に提出する。原作では誰がいつ頃にこの仕事をやったんだろう。
裏社会に潜伏した怪人の動向を監視する。違法薬物の売買や、過激な性的サービスを提供する店の運営など、実に人間らしい方法で資金を稼ぎ勢力を拡大している。
奴らの目的は世界征服である。そのため、人間社会の完全崩壊は望んでいない。奴らは人間を資源と見なしている。そのため、無闇な殺生は行わない。これらの前提から、原作で描写されていない時期の様子として不自然ではないと考えられる。
怪人達はそれぞれ好みの場所に異界を作って拠点にしている。軽く覗いてみたものの、まともに探索しようとしたら命がいくつあって

も足りないような大深度異界だ。ただ、深度の深い異界というのは希少素材の宝庫でもあるので、身を隠しながらお土産を少し拾って撤収する。

★☆★☆★

広品市が危険地帯になったことが先輩とシスターさんにバレて詰め寄られる。この二人は人類屈指の実力者なので、『教会』上層部からの話を聞ける立場にある。

先輩は、家の近くが魔境になるなんてついてないなと笑い、住む所が無くて困るならウチに来るかと言ってきた。

その提案を断り、当分の間は忙しくて『教会』の仕事ができないから、僕の代わりの「くすりばこ」を探すように伝える。

先輩は一瞬だけ恐ろしい形相をした後、そうか、とだけ言った。

シスターさんは、危険なことをするのはやめてほしいと懇願してきた。危険なのは『教会』の仕事ではいつものことでしょうと茶化す。

やめてくれないなら私も連れて行って欲しいと言われる。

脳筋が一人増えても役に立たないので、シスターさんには『教会』の仕事をしていてほしいという内容をオブラートに包んで伝える。

シスターさんはこの世の終わりのような表情をした。リアクションが大げさすぎる。

★☆★☆★

実家から電話がかかってきた。馬鹿な事してないで帰ってこい？何故バレた。

聞いてみると先輩がチクったらしい。妙におとなしいと思ったら裏でそんなことをしていたとは。

母さんの心配の言葉を適当に聞き流して、へーきへーき、大丈夫だってと主張する。

全く信用されない。何故だ。

妹は、父さんと母さんに心配をかけるバカおにいなんか死んじゃえ、と罵って来た。
こらそこ、勝手に僕の死亡フラグを立てるんじゃあない。
父さんは、一度も聞いたことがない厳しい声で、帰ってこい、家長としての命令だと言った。
僕が『教会』の仕事をしたいと言い出した時も寛大に受け入れてくれた父がこんな態度を取っている。心が揺れる。
それでも、ここで逃げても事態は何一つ好転しない。無理そうだったら逃げるよ、と我ながら空々しい嘘をついて通話を切った。

★☆★☆★

怪人の拠点で拾ってきた希少素材を上機嫌で調べるボクっ娘。こいつは家族も友達も伝手も持っていないから、超危険生物が近所に引っ越してきたことを知らない。かわいそうなので教えてあげる。
速攻で逃げようと提案してきた。君の転居を許可すると返す。ボクっ娘は違うそうじゃないとキレて、お前も一緒に来るんだよとダダをこねだした。ハタチ越えた女がダダっ子になっても見苦しいだけだぞ。
こちらに逃げる気がないと理解したボクっ娘は、勝算はあるのかと聞いてきた。今は無いと答える。
ボクっ娘はバーカバーカと低レベルな罵倒をした後、希少素材の解析を再開した。引っ越しはしないのかと聞く。彼女は、荷物をまとめるのが面倒だから今のままでいいと答えた。

★☆★☆★

『カサンドラ』により警察と『リベレーター』戦闘員の小競り合いが検知された。
戦闘員は通常の魔物と同じように、魔力が付与されていない物理攻撃をほぼ無効化する性質を持つので、仮に対物ライフルの弾が脳天に

直撃したとしてもダメージは一切入らない。警察側が一方的にやられている。
戦闘員が相手なら、負けても殺されたり食われたりするリスクは少ない。現時点ではなるべく怪人を刺激したくないので、救援はせずに放置する。
魔力反応を持つ何者かが乱入した。は？急いで最寄りの『カサンドラ』ノードに『転移』し、現場に向かう。
乱入者は『神無月』所属の婦警さんだった。そういえばあなたも広品市に住んでいる人でしたね。
彼女はマジカル☆パンチで数名の戦闘員をノックアウトした後、囲まれてボコられて捕まったようだ。弱い。いや、『神無月』は構成員のほとんどが非戦闘員だと聞くからこれでも強い方なのか。
このままでは婦警さんは戦闘員達にお持ち帰りされてエロ同人みたいな目に遭ってしまう。仕方ないので救援に入る。
婦警さんが捕まっているあたりにスタングレネードを放り込み、戦闘員どもが音と光で怯んだ隙に彼女を抱えて逃走した。奴らは物理無効でも視覚と聴覚は普通にあるからこの手に限る。
ぐったりしている婦警さんを抱えてボクっ娘宅へ『転移』する。あいつの家は、錬金術のためにどうしても煙突が欲しいという要望を聞いた結果そこそこ大きな物件になり部屋が余っている。
客室兼医務室としている部屋で婦警さんに回復魔法をかけていると、ボクっ娘がなんだなんだと寄って来た。おまえは自分の仕事に戻れ。
元気になった婦警さんに何故戦おうとしたのか理由を聞く。同僚がやられているのを見て頭に血が上った？あのさあ……。
また同じような事があっても次は助けないぞと強く言い含めて『転移』のスクロールを押し付ける。次いで、警察官の立場にあるなら直接戦う以外に被害を減らす方法はたくさんあるだろうと諭す。
反発されるかと思ったが、婦警さんはその手があったかと素直に感心していた。脳筋め……。
原作に主人公ちゃん以外の魔法使いがほぼ登場しなかった理由を

なんとなく理解した。
賢明な人はすぐに逃げ出して、善良で勇敢で愚かな人は全滅した後だったのだろう。救いが無い。

★☆★☆★

先輩に『透明化』『音消し』『魔力隠蔽』『影潜み』『霊体化』等の魔法が使える、潜入のプロの知り合いが居ないか聞いてみた。
そんな変態はお前しか知らんと言われる。知ってた。だから、自分をそういう方向に育てるしかなかったんだ。
必死に努力しただけのガキが業界トップクラスになれるなんて、低レベルすぎて恥ずかしくないのかと思うも、目の前にいる人が曇りそうだったので口には出さない。
話の流れとこちらの様子から僕の内心を察した先輩が曇った。こんな時に察しが良くても誰も得しないんですが。
覚悟を決める。
怪人の拠点である異界に潜入する。わーい、希少素材がいっぱい手に入るぞー。
異界にある呪術の痕跡を集めていく。怪人はそれぞれ固有の呪術を持っていて、どれもこれも当たると負け確定するようなえげつない効果なので、なんとかして対策を用意したい。
探知能力の高い魔物に見つかりそうになった。まずい、瘴気濃度が高すぎてここでは『転移』が使えない。バレたら死ぬ。
こんなこともあろうかと、『リベレーター』戦闘員のスーツを解析して作った魔物に擬態する魔法を使う。ぷるぷる、ぼく悪い魔物じゃないよ。
……なんとか見つからずに済んだ。『擬態』は本能で生きているタイプの魔物には有効だが、怪人や知能の高い魔物は誤魔化せない。再び通常の隠密状態に戻る。
こんな危なっかしい潜入を怪人全員分やらないといけないなんて、一体何の罰ゲームなんだ。

★☆★☆★

異界探検ツアーのお土産をボクっ娘に渡す。図鑑でしか見たことのない希少素材の山に目をキラキラと輝かせるボクっ娘。

続けて怪人の呪術を解析したデータを渡す。ついさっきまで上機嫌だったのに、読み進めていくうちにどんどん顔色が悪くなるボクっ娘。忙しないなこいつ。

予算はいくらかかってもいいからこの呪術の耐性を持つ装備を作れと指示する。高級品大好きなボクっ娘はきっと喜ぶはず。

彼女は急に無表情になり、何故オマエがこんなことをしているんだと聞いてきた。

――――。

何でだろうね？他にやってくれる人が居なかったからかな。

★☆★☆★

『カサンドラ』により奇妙な反応が検知された。これは……精霊か。

災害級の魔物が発生し、世界の危機を察知した精霊が現れる。この世界の歴史上で何度も観測されている現象だ。

『教会』と『神無月』が静観を選んだ理由には、精霊の出現を期待したという部分も含まれている。

精霊は主人公ちゃんの居る場所に一直線で向かい、彼女につきまといだした。きっと今頃は精霊さんの営業トークが炸裂しているのだろう。

つまり、原作が始まったのだ。

主人公ちゃん。精霊さん。

お願いだ。僕にできることなら何でもするから、どうかあの黒い星を墜としてくれ。

０４＿魔法少女は悪の組織と戦う

放課後、わたしの家のリビングでリリィとユウ君と顔を合わせながら、今日のヒロイン活動の作戦会議を行う。

会議と言ってもユウ君が立案する作戦の説明を聞いて不明点を確認する程度のもので、わたしはほとんど聞いているだけでいい。

「今日のミッションは『リベレーター』が拠点にしている廃ビルの攻略だ。場所は裏通り。作戦目標は敵戦力の撃破と、可能であれば怪人を誘い出してこれも撃破すること。推定敵戦力は戦闘員８０名、中位の魔物２０体、低位の魔物３０体。それと……捕らえられている女性が３名居る。これの救出も行う」

「それって……」

「まあ、いつも通りだね」

つまり、監禁され凌辱されている女性が３名も居るということだ。紙に印刷したビルの見取り図を指差しながら、彼の説明は続く。

「まず僕が先行して女性達の救出を行う。救出が終わったらリリウムさん経由で連絡を入れるから、天峰さんは１階から突入して敵を順次殲滅していってくれ。この廃ビルにある罠は警報装置だけだから足元は気にしなくていい。逃げようとする戦闘員が居たら僕の方で対応する」

続けて、作戦続行の判断基準について説明される。

「呪術の対策が用意できている『紋章』か『魅了』の怪人が単体で増援として来た場合は優先撃破対象とする。それ以外の怪人が来たり、怪人が２体以上同時に来た場合は作戦を放棄して即時撤退するように。状況の把握はリリウムさんが『カサンドラ』を使って行ってくれ」

「任されました」

ふんす、と胸を張って指示に従うリリィ。戦っている最中に周囲に気を配るのは難しいので、留守番をしている彼女が管制官のような役割を担当している。

「不明点は無いかな？」

「ええ、大丈夫よ」

「……よし、靴を履いて出撃準備だ」
『変身』とその解除は基本的に家でするけど、外で解除せざるを得なくなった場合に備えて念のため靴を履く。
ユウ君は靴を履いた後、クチバシのついた白い仮面を顔に付ける。すると、黒いもやのような物が彼の全身にまとわりついて、黒い布地に変化した。
巷で噂の『白い仮面を付けた黒づくめの怪人』の完成だ。
「いつも思うけど、その格好してるユウ君って完全に不審者よね。怪人よりも怪人らしいというか……」
「アハハ、僕モ天峰サンミタイニ、上等ナ認識阻害ガ使エタラ良カッタンダケド」
明らかに加工されていると分かる、ボイスチェンジャーを使ったような声で話すユウ君。『変身』が使えない彼が悪の組織に身元を特定されないようにするには、これぐらいは必要らしい。
続けてわたしも『変身』を行う。一瞬だけ身体が光り、それだけでわたしの着替えは完了した。
三つ編みでまとめていた髪は独りでに解かれてロングストレートに。髪の色は燃えるような赤い色に変化する。
着ていたセーラー服はどこかに消えて、白いサイハイブーツとロンググローブ、そして若干ハイレグ気味で肩も脇もがっつり露出している白い袖無しレオタードに変わっていた。
……ユウ君には何も言われないけど、結構恥ずかしい服装だと思う。おへその形がはっきり分かるぐらい薄くてピチピチな布地だし。水に濡れると透けるし。リリィに文句を言っても、変身コスチュームのデザインは変えられないって言うのよね。
「警察ニ連絡ヲ入レテ……ット。今回ノ転移座標ハビル前ダカラ、一応人目ニツカナイヨウニ気ヲ付ケテ。ジャア行ッテクル。……『転移』」
そうして、ユウ君の姿が消えてから暫し待つ。しばらくして、『カサンドラ』で廃ビルの様子を観測していたリリィが顔を上げた。
「ユウから救出完了の連絡が来ました。突入してください」

「分かったわ。……『転移』！」

★☆★☆★

視界に映る景色が、一瞬で屋外のものに切り替わる。対象の廃ビルを確認した後、正面玄関の扉をぶち破って内部に突入した。

「ひっ……ヤツが来たぞ！総員戦闘はい――ぐべええっ」

さっそく戦闘員を一名見つけたので、行動不能になる程度に手加減してぶん殴る。戦闘員は殴られた勢いのまま壁に叩きつけられて、ピクピクと痙攣するだけの黒い塊になった。

その勢いのまま1階に居る戦闘員や魔物を掃討していると、リリィから連絡が入った。

『敵が2階の階段付近に集まって動きを止めています。どうやら待ち伏せをしているようですね』

『そう、それなら……』

分かっているならやりようはある。

虚空に手を伸ばし、掌の中に武器を実体化させた。灼熱したルビーのロングソード。わたしの魔力で作り出された、わたしだけの魔法剣。

一旦ビルの外に出てから2階の窓に向けて跳躍。素早く剣を振るい、窓枠ごと窓を切り開いて2階へ突入した。

怪しげな薬品が入った瓶、投網のようなもの、目潰し用の砂などを投げる構えの戦闘員達の背後を取る。慌ててこちらに向き直る動きをしだしたが、遅い。密集した敵集団に向けて『ファイアストーム』を放つ。

「「ぐあああああっ！」」

「ちくしょう、何でそっちから来るんだよ！」

「怯むな！敵は一人だ、囲んで袋叩きにしてやれ！」

「うおおおおおっ！」

こちらの背後を取ろうとする動きを見せたが、無駄だ。火力と速度に圧倒的に優れるわたしを止められる相手は、この拠点には一体も居

ない。
散発的に襲い掛かってくる戦闘員を蹴散らし、密集する動きを見せたら『ファイアストーム』で吹き飛ばす。触手やスライムのような魔物は接近を避けて『フレアジャベリン』で串刺しにしてやり、素早い動きをする体長３ｍほどの狼型の魔物を一刀両断に切り捨てる。
敵を殲滅し、２階を制圧した。
『２階の敵の排除は終わったわ。相手の様子はどう？』
『２階に増援に向かう敵影が多数。戦闘員から数名の逃亡者が出ていますが、ユウに制圧されています。怪人が来る兆候はありません』
『了解。このまま上階に上がりながら敵を殲滅していくわ』

★☆★☆★

結局、怪人が増援として現れることは無くそのまま制圧が完了した。この後は警察が来て、行動不能になった戦闘員達を回収する手筈になっている。
わたしがこの場に残っていると、駆けつけた警察官に不審人物として職務質問をされてしまうので、すぐに『転移』で帰宅してシャワーで汗を流した。
リビングに戻ると、ユウ君が折り畳み式のマッサージ台を準備してわたしを待っていた。
「お疲れ。怪人は釣れなかったけど、敵の数を減らすことはできた。天峰さんのおかげで街の平和に一歩近づいたよ。本当にありがとう」
「どういたしましてっ」
いつものやり取りを終え、わたしがマッサージ台に横になると彼が苦笑するような気配を感じた。シャワーから上がった時に、フィットネスクラブで使うようなスポーツブラとショートパンツに着替えたのでこちらの準備は万端だ。リリィがジト目で見ているけど知らんぷりをする。
「今日は怪我してないよね？どこか痛めた所とかはないかな」
「ん……大丈夫よ。怪人も出なかったし、あれぐらいはもう楽勝なん

だから」
走り回って酷使した脚と、武器を振るって疲労した手から上半身にかけて。負荷がかかった部位を重点的に、優しくマッサージされていく。
初めの頃は、日常生活で使わない筋肉を使ったせいで身体が悲鳴を上げていたけど、何度も出撃しているうちに慣れてきた。ちょっとずつ筋肉もついてきた気がする。もしかしたら、乙女的には結構ピンチなのかも？
戦う魔法使いは、どうしても魔物の持つ瘴気に触れてしまう。瘴気が身体に蓄積すると、心身ともに悪い影響が出て来る。身体に溜まった瘴気は放置しても自然に減るが、戦う頻度が高い場合は『浄化』をした方が良い。身体に触れて『浄化』の魔法を使うだけでも９割ほどは取り除けるけど、念入りにマッサージすれば１０割取れる。わたしは瘴気を溜め込んだことが無いから分からないけど、リリィが必要だって言ってたからそうなんだろう。
でも、そういうよくわからない理屈よりも、わたしにとってもっと重要なことがあった。
ユウ君の手を通して、彼の体温とわたしを思いやる心を感じていると、戦いの最中にあった嫌な事を忘れられる。ただそれだけの理由で、わたしはこの行為に依存していた。

★☆★☆★

「まったく、男の前でこんな無防備な寝顔を晒して、年頃の娘がはしたない……」
「リリウムさんがそういう言い方をすると、なんだか天峰さんのお母さんみたいだね」
「あなたの方こそ、安らかなアカネの寝顔を見ながら嬉しそうにしている様子はまるで父親のようですよ」
「天峰さんとは同い年なんだけどな。喜ぶべきか、悲しむべきか」
「大人っぽい男性はモテるらしいです」

「モテても別に何かの役に立つわけじゃないからなあ……。いや、こういう考え方は良くないか」
「……？何か気にかかることでもあったのですか？」
「何でもないよ」
「そうですか」
「……」
「……」
「天峰さんが穏やかに眠ってくれるだけで、僕は幸せな気分になれるよ」
「家族でも恋人でもない相手に抱く感情としては不適切ではありませんか？」
「あはは。でも、彼女が元気で居てくれるなら、これ以上嬉しいことは無い。リリウムさんもそう思うでしょ？」
「……ええ、私もそう思います」

★☆★☆★

「今日の晩御飯は、白米とピーマンの肉詰め、ニラと卵の味噌汁、ほうれん草のおひたしです」
「わーい」
　ユウ君と協力関係を結んだ後、お父さんが単身赴任中でわたしが一人暮らしの状態だと知った彼は、自分も一人暮らしだから一緒に食事を取らないかと提案してきた。
　わたしは料理があんまり得意じゃないから、こうして彼が手料理を振る舞ってくれるのはすごく助かっている。好物のピーマンの肉詰めを作ろうとしても、わたしがやると半生か黒焦げになるのよね……。
『6時のニュースです。東京都広品市××区にある廃ビルで本日16時頃、ビルを不法占拠していた”リベレーター”と名乗る反社会集団が不審な少女に襲われる事件が発生しました』
「あっ」

テレビから耳を塞ぎたくなるニュースが流れて来た。美味しそうなご飯が目の前にあるのに、胃がキュッとなって気分が悪くなる。
『警察の取り調べによると、彼らを襲った人物は白いレオタードを着た赤い髪の少女で、警察は他の”リベレーター”襲撃事件との関連を調べています。ビル内に捕らわれていた数名の女性も解放されており、少女の目的は市民の救出だったのではないかと――』
我慢できなくなってテレビのチャンネルを変えた。
「もうやだぁ……。わたし正義のヒロインやめたい……」
「まあ、戦闘員には姿を見られているから、事情聴取をする警察には伝わる。警察に伝われば報道関係者にも流れちゃうんだよね」
「うう……。せめてあの格好してる所は見られたくない。わたしもユウ君とお揃いの黒づくめが良い」
「無理ですね。アカネの変身衣装とユウのあの装備は競合するので、同時に使用する事はできません」
「そんなぁ……」
戦闘中は気にしている余裕が無いけど、プールでもないのに水着みたいな格好で歩き回るのはやっぱり恥ずかしい。
「変身中のアカネには強力な認識阻害能力があるので、姿を見られただけであなたと関連付けられることはまずあり得ませんよ」
「そうじゃないの、気分の問題なの。あああ……」
「ほら、ご飯食べて元気出してよ。ピーマンの肉詰めにかけるのはソースとケチャップのどっちが良い？」
「ケチャップ……」

★☆★☆★

夜、自室で明日の準備をしながら、今日あったことを振り返る。
朝はリリィと一緒に考えた作戦を実行した。予想外のトラブルはあったけど、一応成功した。成功したことにした。
昼はカエデにユウ君について聞いてみた。新しい情報は全然得られなかった。ユウ君は結構すごい魔法使いらしいから、カエデじゃ太

刀打ちできないのも当然なのかな。
放課後は正義のヒロインとして戦い、『リベレーター』の拠点を制圧した。
「……」
『リベレーター』との戦いの最中にあったことを詳細に思い出していく。
1階で出会い頭に戦闘員を殴り飛ばした。人を殴る独特の感触があった。慣れた。
2階に上がって戦闘員の集団に『ファイアストーム』をおみまいした。人が火傷に苦しむ悲鳴が沢山響き渡った。慣れた。
武器を持った大勢の大人が怒号を上げながら襲い掛かって来た。慣れた。
襲い掛かってきた戦闘員を蹴り飛ばした。人の骨が折れる感触が足に伝わって来た。慣れた。
触手やスライムのような魔物を『フレアジャベリン』で串刺しにしてやった。気味の悪い断末魔の叫びと共に、生き物が燃える臭いが漂ってきた。慣れた。
見上げるような大きさの狼型の魔物を一刀両断にした。骨と肉を斬る感触がした。慣れた。
真っ二つになった魔物の断面から内臓がドバドバと零れ落ちて来た。慣れた。
零れ落ちる内臓に混じって、人間の手のようなものが見えた。悲鳴を押し殺した。
「……っ」
ユウ君にマッサージをしてもらって、一度は記憶の奥底に封じ込めたものを鮮明に思い出してしまった。
大丈夫。これまでだってたくさん辛いことはあったけど、慣れれば何も感じなくなる。今回の経験も変わらない。魔物は人を食べるのだから、こういうことは普通に起きる。頑張って慣れればいい。わたしが我慢すれば全て解決する。
でも、そうやって感情を押し殺していると、どうしようもなく湧き

上がってくる思いがあった。
どうして、わたしが戦っているのだろう。どうして、わたしが戦わなければならないのだろう。
今、この街では悪の組織『リベレーター』が暗躍していて、このまま放っておくとたくさんの人が犠牲になってしまうらしい。ユウ君は人々を守るために戦っていて、自分では力不足だからわたしの力を貸して欲しいとお願いしてきた。
戸惑うわたしに彼は、悪の組織と戦うか、大切な人を全員連れてどこか遠い所へ引っ越すかを選ぶように迫ってきた。
広品市はわたしの生まれ故郷で、他の地域に逃げるなんて考えたこともなかったし、知り合い全員に対し「悪の組織が暴れているから引っ越しなさい」と言って説得するなんて到底できっこない。
それに、人を傷つける悪い奴らが居て、自分にそれをやっつける力があるなら、そこで逃げてしまうのは卑怯だと思った。
だから、わたしは戦う事を選んだのだ。
それでも、辛いことがあるたびに疑念は膨らんでいった。
どうして、学生のユウ君だけが戦っているのだろう。リリィに聞いても人間の都合は分からないと言われたし、ユウ君は他の魔法使いは他の地域で戦っていると言うだけだった。
疑念を抱きながら戦っていると、だんだんと心が分かれていくのを感じた。良い子で居ようとするわたしが、辛い事はやりたくないと言うわたしを無理矢理引きずり回している。
結局のところ、わたしは見ず知らずの誰かの為に戦えるほど正義感の強い人間ではなかったのだ。だから、自分勝手でわがままなわたしが納得できるだけの、戦う理由が欲しかった。
ユウ君が、わたしを犯して、屈服させて、逆らえないようにして。『戦え』と命令してくれれば。そうすれば何も考えなくていいのに。
それか、ユウ君がわたしを愛してくれて、わたしもユウ君のことを愛して、愛を理由に戦えれば。愛というのは人を狂わせるらしい。世の中には愛の為に命を懸ける物語が溢れている。愛が何なのか、わたしにはよく分からない。

「……はぁ」
頭の中で感情がぐちゃぐちゃになっている。このままでは眠れない。ただ、辛いことがあるたびにこうなっていたわたしは、これを解決できる秘密の方法を知っていた。

★☆★☆★

家の中にある転移魔法陣を使ってユウ君の家に来た。協力関係を結んでご飯を一緒に食べるようになってから、行き来を便利にするためにそれぞれの家のリビングに設置してある。
ユウ君のベッドがある部屋に入った。棚や引き出しの中の物に触らなければ自由に入って良いと言っていたので、一応不法侵入ではない。
本棚と薬棚があり、ＰＣデスクがあり、ディスプレイ２枚のデスクトップＰＣがあり、ベッドがある。衣類は壁の収納の中だ。残念なことにベッドの下にエロ本は無かった。
ユウ君は夜の時間帯は大抵どこかに出かけていて、遅くまで帰ってこない。なんでも、回復魔法をうまく使うと短い睡眠時間でも平気で居られるらしい。ちょっとズルい。
でも、彼がこの時間帯に外出してくれるから、わたしがこうして好き勝手できる。
ユウ君のベッドにごろんと寝転がってみた。彼の匂いを感じて安心する。それと同時に、いけないことをしているという自覚で背筋がゾクゾクしてきた。
そのままタオルケットを被ってみる。良い子で居ようとするわたしが心の中で苦悶の叫びを上げて、頭の奥がじんわりと痺れるような快感を覚えた。
最初はほんの気まぐれだった。何の意図も無く、なんとなくベッドに横になってみただけ。しかし、その一回で理解してしまった。こういう行為をすると、我が物顔でわたしの心の主導権を握っている良い子ちゃんのわたしを痛めつけることができる。

良い子ちゃんのわたしの力が弱くなると、普段抑圧されている自分勝手なわたしが少しだけ解放されて、呼吸をするのが楽になった。
これを知ってからは、息苦しくなるたびに彼の部屋にこっそり入って心のバランスを取って来た。
いつもはこのあたりで満足して部屋に戻るのだけど……。
「ちょっと、だけ……」
今日の辛いことはダメージが大きかったから、という言い訳の元、更なる暴挙を試してみることにした。
今朝の刺激的な体験を思い出しながら、部屋着のTシャツの裾をまくりあげる。
ゆっくりと腕を上げていると、良い子ちゃんのわたしが必死に制止するのを感じた。無視して腕を上げていく。二つの突起が「こんばんは」と挨拶をした。良い子ちゃんのわたしは苦しみにのたうち回っている。楽しい。
その体勢のまま、少し冷静に状況を俯瞰してみた。自分の部屋ではない場所でこんなことをしている。ユウ君が急に帰ってきたら見つかってしまうかもしれない。そう思うと、何も考えられなくなって頭の奥がグラグラしてきた。
この感覚を忘れない内に、素早く自室に戻る。

……ふぅ。明日も戦いがある。お風呂入って寝よっと。

０５＿彼が現在に至るまで

主人公ちゃんと精霊さんの接触を確認した。ここからが本番だ。
原作の流れなら、契約すれば自衛のための力が手に入るし、いつでも解約できるからという精霊さんのセールストークに押し切られて、とりあえずで『変身』のお試しをしているはず。
そして、なんだこの恥ずかしい変身コスチュームはと困惑している彼女に、精霊さんが街の平和を守るために戦ってくれないかと言って、一般市民のわたし一人でそんなことができるわけ無い、と主人公ちゃんが拒否する。
戦う事を拒否された精霊さんは、無理強いはしない、いずれ状況を理解するだろう、と不吉な事を言う。ここまでは変わらないだろう。

★☆★☆★

原作開始の翌日、教室にある主人公ちゃんの机に精霊さんと話がしたいという短い内容の手紙を仕込む。連絡先を添えていたのでメッセージアプリに返信が来た。『放課後、屋上』。この時点では精霊さんの依代のブローチを持ち歩いているのか。
授業中に主人公ちゃんの視線をビシビシと感じる。多分精霊さんも見ているんだろうなーと思いながらスルー。
放課後、すぐに屋上に向かって魔法で人払いの処置をして待っていると、しばらくして警戒心バリバリの主人公ちゃんが来て、警戒心バリバリの精霊さんも実体化した。気持ちは分かる。
改めて彼女たちの姿をまじまじと見る。
主人公ちゃん、君ってエロ同人の女主人公みたいなスケベな身体つきしてるね（称賛）（罵倒）（宣戦布告）。
精霊さん、ワンピースの裾が短すぎるのは誰かに指摘されなかったのか。立っている状態ならギリギリパンツが見えないけど、かがんだり椅子に座ったりしたらすぐ丸見えになるぞ（エロ同人世界への無粋なツッコミ）。

……原作に立ち絵があるキャラ二人が揃ったせいで、変なテンションになってつい思考が逸れた。
悪の組織と戦っている魔法使いの水瀬ですと自己紹介する。精霊さんも硬い表情で自己紹介してくれた。
主人公ちゃんが魔法使いなら証拠を見せて欲しいと言ってきた。彼女の視界の範囲内で『転移』してみせる。信じてくれた。
精霊さんはどうやって私の所在を特定したのかと聞いてきた。『カサンドラ』のアクセスキーを教える。なんだこれはと確認した彼女は、内容を理解するとぽかんと口を開けて固まってしまった。かわいい。
戦争でもする気かって?そうだよ。今は戦時中で、僕は戦争指導者だ。
本題に入る。精霊さんに、何故主人公ちゃんを契約者に選んだのか聞いた。彼女が優れた資質を持っていたからと答えられた。他の資質を持つ者に乗り換える気は無いのかと聞く。他の候補者は見つかっていないと言われる。知ってた。
主人公ちゃん、意味不明なぐらいの魔力量だからな……。軽く見ただけでも血統書付きの人間である僕の１０倍以上あるって、一体どういう理屈なんだか。
自分の代わりは居ないと聞かされた主人公ちゃんに、一緒に戦ってくれないかとお願いする。困ったような表情をするも即座にお断りはされなかった。
その流れのまま、この街の現状を説明する。怪人という危険な連中が闇に蠢いていて、僕も必死に戦っているけど僕一人では止められそうにない。だから、一緒に戦うか、さもなくば逃げる事を選ぶようにと言った。
もっと困り顔になる主人公ちゃん。理不尽な二択を迫られればそうもなるだろう。さらに攻めていく。
精霊と契約した人間は強力な力を持っているから、君の助力があればたくさんの人が助けられるんだけどなーと煽る。学園ではお人好しの優等生キャラで通っている彼女に罪悪感を覚えさせる。

続けて、協力してくれるならバイト代出すんだけどなーと話す。精霊さんには提示できない俗世の利益に目の色を変える主人公ちゃん。君が自分の学費を払うために喫茶店でバイトをしていることはすでに調べがついている。

最後に、僕も一緒に戦うし、主人公ちゃんがピンチになったら絶対に助けに入るからと言う。これも精霊さんには提示できない要素だ。

先っちょだけ、先っちょだけでいいからと言う僕の勧誘に、彼女は先っちょだけなら……と消極的な了承を返してくれた。

ちょろいもんだぜ。そんなんだから探索フェイズで怪しい勧誘に引っかかって洗脳バッドエンドに入ったりするんだ。

これで、主人公ちゃんは原作よりも一ヶ月ほど早い時期に悪の組織と戦い始めることになる。

敵側の動きの変化については原作の描写が少なくあまり当てにならないので、今後も監視に努める。

★☆★☆★

主人公ちゃんと一緒に『リベレーター』の小規模拠点を攻める。留守番してる精霊さんには『カサンドラ』を使って後方支援をするようにお願いした。精霊さんって原作では特殊な戦闘シーン以外何も援護してくれないんだよな。

戦闘用の僕の服装について主人公ちゃんに突っ込まれる。ペストマスクは神秘と医療のバランスが良いから瘴気耐性を付けやすいのだ。不審者なのは仕方ない。

先導してお手本を見せながら共闘する。戦闘員や低位の魔物ぐらいなら最悪僕一人でもなんとかなる。主人公ちゃんは持ち前の責任感からおっかなびっくり戦い始めた。

若干腰が引けているものの、それでも景気よく戦闘員をぶっ飛ばし、えぐい出力の魔法剣と攻撃魔法で魔物を惨殺している。成績優秀、運動神経抜群、思い切りが良く、度胸もある。この辺の設定はちゃんと生きているようだ。

うっかり流れ弾が当たったら即死しかねないなーと考えながら敵の制圧を完了した。これが特級戦力か。ゲーム的に言えばレベル1の状態だが、もうすでに怪人を上回る力を持っている。

捕らわれていた女性の姿をあえて見せた。気分が良くなるおクスリを飲まされエロ同人みたいなことをされていた女性を見て、悪の組織に憤る主人公ちゃん。あまり表沙汰にはなっていないものの、今のこの街ではこれが日常茶飯事だと理解してもらえただろうか。

婦警さんに連絡を入れ、拠点制圧後の後始末をお願いする。彼女には”コスプレ女と黒づくめの不審者が『リベレーター』の拠点を攻撃したらしい”と伝えた。

今はまだ、主人公ちゃんと共闘関係にあることを教えるわけにはいかない。

★☆★☆★

数回の共闘を経てそろそろ一歩踏み出してもいい頃合だと思ったので、疲れてない？マッサージとかどうかなと提案してみる。あっさり了承された。戦いで身体がバキバキらしい。運動部でもない女子があんなハードな運動したらそりゃあそうなる。

場所は主人公ちゃんの家でいいかなと聞くとこれも了承される。父親不在で一人暮らし状態なのに無警戒すぎる気もしたが、そういえば精霊さんが居るから一人ではなかった。『変身』が使える彼女に僕が腕力では敵わないというのも理由の一つだろうか。

折り畳み式のマッサージ台を持って主人公ちゃん家にお邪魔する。四次元ポケットっぽい魔法があり『転移』もある、魔法使いが物資運搬においてはかなり融通が効く世界で助かった。

何かマッサージ用に使えそうな服に着替えて欲しいと言ったら体操着を着て来た。ごく当たり前のようにブルマを履いているのを見ると、この世界がエロ同人世界であることを改めて認識してしまう。

マッサージ台に寝転んだ主人公ちゃんに、師匠直伝のエロマッサージ（エロ抜き）を披露する。お客さん、肩凝ってますねー。あ〜あ〜

～と気持ちよさそうな声を上げる主人公ちゃん。楽しい。
思う存分揉み解していると、なんと彼女は寝息を立て始めた。ええ……そんなに疲れてたのか。寝てしまった主人公ちゃんを見て訝しげな視線を向けて来る精霊さん。僕は無実だ。
マッサージが終わっても主人公ちゃんは眠ったままだったので、タオルケットをかけてそのまま寝かせてあげる。
精霊さんに、主人公ちゃんは最近どう？元気してる？と聞いてみた。彼女は物憂げな表情で、使命感と責任感で踏ん張っているものの、体力的にも精神的にも疲弊していると答えた。
そのまましばらく精霊さんと情報交換をしていると、主人公ちゃんが目を覚ました。よし、寝ぼけている今がチャンスだ。
一人暮らしって大変じゃない？僕が料理するから一緒にご飯食べない？うん。一緒にご飯食べるとなると移動が手間だから、この部屋に『転移』の基点置いて良い？うん。
あまりのチョロさに心配になってきた。まあ、彼女は詐欺のようなやり取りで結んだ口約束でも律儀に守ろうとしてしまう損な性格なので、一度了承したことを反故にはしないだろう。

★☆★☆★

『強制』の怪人を撃破した。お約束通りの負け惜しみを言い残して爆発する怪人。
この怪人は怪人の中でも比較的真面目に働くやつなので、瘴気の薄い拠点に釣りだす作戦がうまくはまってくれた。基本的に怪人同士は仲が悪いが、こいつだけは職務を優先し協同して動く可能性があったので、早期に排除できたのは嬉しい。
初めての強敵との戦いを終え、肩で息をする主人公ちゃん。怪我をいくつか負っていたので回復魔法で治す。彼女は僕の方に何か言いたげな視線を向けて来た。しかし、彼女がその場で何かを言うことはなかった。
家に帰って思う存分主人公ちゃんをモミモミする。ああ～女の

子を甘やかすの楽しい。
もっと妹を甘やかしたいだけの人生だった。小さい頃はあんなに懐いていたのに、僕が中学サボる不良お兄ちゃんになったせいで嫌われちゃったんだよな。悲しい。悪の組織許せねえ……。
マッサージを受ける主人公ちゃんは、ほんの一瞬だけ何か言いたげな視線を向けて来たが、やはり、何も言わなかった。

★☆★☆★

『教会』と『神無月』に、野良の『精霊憑き』が怪人を一体撃破した。彼女との連絡手段は入手できたが、強力な認識阻害能力があり警戒心も強いため依然として正体は不明、と虚偽報告をした。
この報告で、「どうしようもないから放置しよう」から「ほっといても解決しそうだから放置しよう」に変わったりしているんだろうか。
役に立たないのは分かっているから、せめて邪魔だけはしないでほしい。
『教会』から、解決の目途が立ったならもう十分だろう、さっさと避難しろと催促が来た。
冗談じゃない。たとえ怪人を全滅させたとしても、事態の半分も解決しないのが分からないのか。
……分からないよなそりゃ。原作知識が無ければ、あの規模の戦力が再生怪人として何度でも復活するなんて想像できるわけがない。

★☆★☆★

ボクっ娘に正体不明の『精霊憑き』と協力関係を結んだと伝えた。
あの呪術耐性装備を渡したのかと聞かれる。うん、主人公ちゃんにあげたよ。
続けて代金はいくら取ったのかと聞かれる。主人公ちゃんにあれの代金を払える経済力があるわけないだろ。ゼロ円スマイルです。
お金はもっと大事にしろと説教された。信じられない、まさかこん

な日が来るなんて……。娘の成長を喜ぶ父親のような気分になり、涙が出そうになってきた。
馬鹿にされていることを敏感に察したボクっ娘はぷんぷん怒り出した。ボクは真面目に怒っているんだって?僕だって真面目だよ。
金で世界が救えるのなら、銀行強盗でも何でもして稼いでくるのになあ。

★☆★☆★

『毒』の怪人を撃破した。取り巻きが戦闘員中心で高位の魔物が少なかったことと、拠点の瘴気濃度が低めでいざという時の『転移』が行いやすいため狙い目だと判断しての選定だ。
戦闘自体は順調だったものの、拠点攻略の途中で施設内に満ちた催淫ガスを吸ったり媚薬沼を歩いたりで主人公ちゃんの体調に影響が出ている。帰投後すぐに『解毒』したが、神経が元に戻るには少し時間がかかるだろう。
また、無双ゲームのごとく魔物をバッサバッサと切り捨てている主人公ちゃんは、戦闘の度に大量の瘴気を浴びている。瘴気を浴びた人間は理性が弱まり性欲が強くなるというエロ同人みたいな設定があるので、僕がすぐに『浄化』していても多少の影響は受けているはず。
主人公ちゃんは自分で発散できているだろうか。少し心配だが、これはさすがにセクハラってレベルじゃないので聞けるわけがない。
この瘴気の設定のせいで、ただでさえ治安の悪いエロ同人世界がさらに世紀末になっている。今の広品市は街全体が瘴気に侵されつつあり、ヒロピンシチュ定番のクズ市民がそこらじゅうに居るのだ。お巡りさーん。お巡りさんも瘴気に頭をやられている。ヤバイ。
対策として婦警さんに師匠のマッサージ店を紹介してある。せめて警察の皆さんぐらいはまともで居てほしい。むさくるしい男達を相手に嫌そうな顔で『浄化』し続けている師匠を想像し、少しだけ笑った。

★☆★☆★

主人公ちゃんの物言いたげな視線が日に日に強くなっている。
分かっている。彼女は「君はもう戦わなくていい」と言って欲しいのだろう。
原作の彼女はこうではなかった。僕が『魔法少女ルミナスレッド』の重要なイベントを起きないようにしたからこうなってしまった。それも分かっている。
原作の序盤の流れを思い出す。
戦う事を拒否した主人公ちゃんは、その後一ヶ月ほどは何事も無く平穏な日々を送る。しかし、ある日突然彼女の親友が行方不明になってしまう。
主人公ちゃんは精霊さんの助けを借りて親友ちゃんの所在を突き止め、悪の組織の手によってエロ同人みたいな目に遭っていた彼女を救出する。
救出された親友ちゃんは、命は助かったものの心に深い傷を負い、かつての明るい表情が見る影もない暗い性格になってしまう。
その様子を見た主人公ちゃんは、親友ちゃんを傷つけた悪の組織への『怒り』、自分が戦う事を拒否しなければ彼女は無事で居られたかもしれないという『後悔』、自分が戦わないことで見殺しにした「どこかのだれか」は知らない誰かの大切な人だったのかもしれないという『罪悪感』を抱く。
こうして彼女は正義のヒロインとしての自覚と覚悟を得て、悪事を働く連中を根絶やしにし、自分の手で平和を取り戻すのだと決意する。
覚悟完了した主人公ちゃんは、触手型の魔物とふれあい体験コーナーしたり、戦闘員にサンドイッチされたりしても動じない鋼のメンタルを持つ。
作中の敗北エロシーンでも、主人公ちゃんを屈服させようとする怪人が彼女の意志の強さに驚く場面が多くある。普通の女の子の１００倍ぐらいは耐久力ありそう。決意の力ってすごい。

……まあ、そのつよつよメンタルの主人公ちゃんが完全に逆らえなくなるまで念入りに心を折られる、そういうバッドエンドが十数種類あるのが『魔法少女ルミナスレッド』なんだけど。

現在の主人公ちゃんのことを考える。彼女は『怒り』も『後悔』も『罪悪感』も持っていない。僕がそうした。

主人公ちゃんには戦わなかったことを後悔してほしくなかったから、すぐに戦わせた。

親友ちゃんをエロ同人みたいな目に遭わせないために、彼女が危険な場所に行こうとするたびに『転移』で先回りして、進行不能エリアを通達するＮＰＣのごとく追い返し続けている。

この選択に後悔は無い。僕が何もしなかったとしても原作通りの展開になる確証は無いし、ルミナスレッドの参戦が一ヶ月も遅れれば街の被害がどれだけ増えるか想像もつかない。

それになによりも、あの底抜けに明るい親友ちゃんを、上手く行くかもわからない謀略の犠牲に差し出すなど考えたくも無い。

でも、今のよわよわな主人公ちゃんを見ていると、やっぱり親友ちゃんには覚醒素材ちゃんになってもらうべきだったんじゃないかと――

クラスメイトを覚醒素材呼ばわりするとは大したサイコパスぶりだな？親しく接しているわけではなくとも、彼女と会話したことぐらいあるだろう。人類の未来を考えすぎて倫理観がおかしくなった？違うな、お前は昔からそうだった。無自覚に人を傷つけることをやらかしては、相手が傷付いた様子を見てようやく己の行いを認識していた。そんな自分が嫌で、人間心理について学び、普通の人間のように振舞えるよう努力していた。今のお前は余裕が無くなって化けの皮が？がれてきているだけだ。この冷血漢め。主人公ちゃんに優しくしようとするのも、周囲の期待に応えようとして破綻したかつての自分と同一視しているからだ。シスターさんやボクっ娘に無理に手を差し伸べようとしたのだって、「この人は原作の世界ではどうなっていたんだろう」などという薄気味悪い動機で――

脳内ジョーカーさんがはしゃぎだしたので、脳内バットマンさんに

鎮圧していただいた。あの嘘字幕シリーズ、あのシーンだけ切り取っているせいでバットマンが完全にただの暴力的な不審者になっていて笑えるんだよな。

とにかく、もうすでに賽は投げられたんだ。今できる最善を模索しながら進むしかない。

★☆★☆★

僕のせいで普通の女の子メンタルのまま戦う事になってしまった主人公ちゃん。原作情報を振り返りながら、彼女のモチベーションを向上させる方法が無いか検討する。

まずは周囲から見た彼女の人格について。

真面目で礼儀正しく、誰にでも優しく接することができる。人を傷つける輩には、毅然として抗議を行えるだけの気の強さと正義感も持ち合わせている。まさしく理想の優等生だ。

親しい間柄の者に対して時折甘えるような態度をとるが、それでも強気真面目優等生のキャラを逸脱することはない。

問題はここからだ。彼女は彼女自身が自覚していない要素を大量に抱えている。

抑圧的な性格の自分を嫌っていて、そんな自分を変えたい、壊したいという思いから変身願望と破滅願望がある。また、それらの願望に由来して露出で興奮する性癖があり、自分を否定することで昏い悦びを得る倒錯したマゾヒストでもある。

育った環境故か愛に飢えていて、承認欲求が強い。性欲はすさまじく強い。精力絶倫のセックスモンスターである鬼畜体育教師がタイマンを挑んで、長期戦の末ギリギリ勝利できるぐらいの性欲と言えば凄さが伝わるだろうか。勝利ってなんだよ。

さらに、特に開発されていないはずの初期状態でも3クリック分のテキストでビクンビクンしちゃうような敏感体質で、苦しょっぱくてドロドロしていて生臭い液体への抵抗が薄い奇妙な味覚を持つ。

……本当に普通の女の子なのか？悪の組織に攫われて改造手術を

受けた過去とか無いよな。
体質的な要素はともかく、このような人格が形成された経緯についてはある程度の推測ができる。
彼女は仲睦まじい夫婦の間に生まれ、溢れんばかりの愛情を注がれて育つはずだった。しかし、彼女の母親は彼女を産んでからすぐに行方不明になってしまった。
何の前触れもなく妻を失った彼女の父親は、それでも懸命に彼女を育てようとした。……彼女が物心ついて初めて見たのは、最愛の人を諦めきれずに悲嘆に暮れる男だった。
せめて死別であったのなら、気持ちの整理が付けられたのかもしれない。だが、そうはならなかった。
彼女は父親のことを自分に愛情を注いでくれる存在だと認識しつつも、心のどこかで頼ってはならない、自分が支えなければならない相手だと思ってしまった。
お父さんに心配をかけたくない。お父さんにもっと褒めてほしい。そうした想いが誰もが認める『良い子ちゃん』の彼女を作り上げた。その裏側で、鬱屈した感情を溜めながら。
彼女の父親の育て方が悪かったとは思わない。今や彼女は名門広品学園でも成績上位の優等生で、クラスのみんなからも慕われている。彼女の歪みを理解し、受け入れてくれるパートナーと出会えれば、きっと幸せな人生を歩めただろう。
こんな、不幸の星の元に生まれさえしなければ。
まあ、これらの要素は自覚させなければいい。初期状態の彼女はやや潔癖な所があり、自慰行為もろくにしたことがないという描写があった。無自覚のままにしておけば、心の中に地雷原を抱えただけの真面目で清楚な女の子だ。
恋愛対象を見つけて性的な物事に肯定的な感情を持ったり、何かきっかけになる出来事でもなければ、そういうコンテンツには触れようとはしないはず。多分。むっつりスケベ設定もあったからちょっと自信が無い。
別に、何かの拍子に自己分析してしまったとしても問題は無い……

か？彼女は世間体を気にし過ぎる性格だ。過度のストレスに晒されたりしなければ妙な行動はとらないだろう。
主人公ちゃんは僕のことをどう思っているのかな。多少の好意は持たれているだろうけど、僕は彼女のストレス源でもある。好意と憎悪を同時に持っていても不思議ではない。
原作には主人公ちゃんが恋愛感情を抱く相手は一人も登場しなかった。彼女の行動をシミュレートするには情報が足りない。
好意といえば、主人公ちゃんと精霊さんが原作よりも仲が良い気がする。原作ではお互いのことを信頼しながらも、一線を引いたビジネスライクな関係だった。
覚悟を決めた主人公ちゃんが、周囲に甘えることができない精神性になっていたためだ。普通の女の子な主人公ちゃんだからこそ仲が進展したと考えられる。
彼女のようなタイプの人間が、素直に甘えられる相手を見つけたらどうなるんだろう。愛を試すために無茶な要求を出したりするとか？これも原作に情報が無いから計算しきれない部分だ。
手っ取り早く覚悟を決めさせたいなら、君が負けたら後が無いということを教えれば……。
……ダメだ。世界なんて物を背負った人間がどんな思いをするのかは僕が一番よく知っているだろう。
街のヒロインだけでもいっぱいいっぱいになっている主人公ちゃんに、これ以上の負担はかけられない。

★☆★☆★

『催眠』の怪人を撃破した。自慢の催眠術が効かないのがよほど悔しかったのか、他の怪人であれば普通の攻撃を行うタイミングでも呪術の発動を優先していた。
撃破後に家に戻ったら、主人公ちゃんが何故か服を脱ぎだした。まずい、どこかのタイミングで耐性を抜かれたのか。この世界は同じ系統の術を連続で当て続けると徐々に耐性が減衰する仕様なのだ。慌

てて彼女を取り押さえて『催眠解除』をかける。
正気に戻る主人公ちゃん。治療のためとはいえ、下着姿の彼女をソファに押し倒すという暴挙をしでかしてしまった。速やかに土下座を行う。
許してもらえた。まあ、彼女が真面目に謝罪する人を無下にする性格ではないことは知っている。
ところで、押し倒されている時に「待って」とか「心の準備が」とか言ってたけど、一体どんな催眠を掛けられていたんですかね。
聞いてみたが、主人公ちゃんは顔を赤くしてそっぽを向き、口をもごもごとさせるだけだった。言いたくないなら無理には聞かないよ。

★☆★☆★

今後の戦略と、僕が排除しきれなかった負け筋について考える。
戦略といっても複雑なことは一切無い。僕が先行偵察して優位な状況で戦えるように準備し、主人公ちゃんが戦う。
そうやって怪人全員と、再生怪人全員と、ドクターと、ラスボスをぶち殺せばこちらの勝利だ。
怪人どもはどいつもこいつも完全に勝利を確信して慢心しているので、同僚が次々に死んでも大して気にしない。まあ、ラスボスを倒すまでは残機無限で、ラスボスが絶望的に強いので慢心する気持ちは分からないでもない。
精霊さんには契約者が殺した魔物の魂を喰らって力を増すという能力がある。最速でドクターを殺しに行くよりも、怪人戦を間に挟んだ方がラスボス戦の勝率が上がるだろう。
負け筋はまず、主人公ちゃんが普通に敵に負けてしまうこと。
『魔法少女ルミナスレッド』の敗北エロシーンは仏の顔システムを採用していて、二回までなら散々犯されるだけでバッドエンドにはならない。仏の顔も二度まで。あれ？なんか違うような。
バッドエンドにならない理由は色々ある。精霊さんによる『召喚』で救助されるとか、隙を突いて自力で脱出するとか、弄ぶためにわざ

と解放されるとか。
しかし、同じ敵に三回敗北するとそれらの脱出手段を全て封じられて詰む。正義のヒロインを退職した主人公ちゃんは、奴隷、ペット、家畜、苗床、備品、動力源、フィギュアといった様々な職業に転職することになる。
ドクター戦とラスボス戦は例外的に敗北一回でバッドエンドになる。ドクター戦で負けると強制変身解除からの『変身』封印で自殺エンドか悪堕ちエンドのどちらかに入り、ラスボス戦で負けると敗北エロシーン無しでナレ死する。
まあ、今のよわよわメンタルな主人公ちゃんならどの敵でも一回負けただけで折れるだろうし、あまり細かい事は気にしなくていい。何かあったら僕が死ぬ気で助けに入るだけだ。
……彼女を助けるために僕が死んだら、その後の彼女はどういう反応をするのかな。
もう一つの負け筋は、変身ヒロインにとって致命的な弱点である身バレだ。
今の僕たちが優位に戦えているのは、ルミナスレッドが正体不明、所在不明、目的不明の不可視の死神だからだ。
正体不明の正義のヒロインであり続ける限り、敵に拠点を攻撃されるリスクが無い。そのため、僕たちは常に攻める側で居られる。
所在がバレて防衛戦をすることになったら、物量ですり潰されてあっけなく終わる。ルミナスレッドがどれだけ強くても、所詮は一人の人間に過ぎない。
対策として、しばらくの間は生活できるセーフハウスをいくつか用意してある。ただ、そういう避難場所に逃げなければならない状況になった時点で主人公ちゃんのメンタルはボロボロになるので、最低限の詰み防止でしかない。
身バレした状態でラスボスを撃破して世界を救っても、主人公ちゃんに平穏な生活が戻ることは無いだろう。こればかりは僕にはどうしようもない。
また、身バレするリスクを最低限に抑えるため、協力者であるボ

クっ娘や婦警さんにも彼女のことは秘密にしている。信用していないわけではないけど、この世界は人間から情報を引き出す手段が豊富にありすぎる。

★☆★☆★

主人公ちゃんの性格を分析するため、僕が発生の可能性を潰したエロイベントを振り返る。

原作の主人公ちゃんは正義に殉じる鉄の女だから、発生するエロイベントは全て凌辱系……と思いきや、そうではない。

エロ同人ＲＰＧ定番のお金に困って身体を売るシチュエーションがちゃんとある。強制イベントではないから回避はできるが。

金欠に陥る主な原因は、探索フェイズで裏社会の情報屋に金を払うのと、経口避妊薬にかかるお金だ。このエロ同人世界は何故かコンビニで経口避妊薬が買える。

正義のヒロインとして活動しながらお金稼ぎもしなければならなくなった彼女は、手っ取り早く稼げる手段を選ぶ。すなわち、売春である。

すさまじいストレスを感じながらも、これも正義のため……と身体を売る主人公ちゃん。無自覚な性癖が色々噛み合ってわりとすぐに順応する。ええ……。

彼女は回数を重ねていくうちに売春にドハマりし、身体を対価にしてお金を稼ぐことに依存していく。当初の目的はどうした。

ここから更に別のエロイベントに派生する。売春を行っていることが学園の生徒にバレて、退学になりたくなかったら……分かっているね？される。

その気になれば塵も残さず消せる相手の脅迫に屈する主人公ちゃん。こういう場面で相手を害する発想が出ないあたり、本当に善良な人間すぎるんだよなあ。

初めの頃は一対一のシチュが主だが、すぐにエスカレートして乱交になる。水泳部の男子全員が参加してくるってこの世界の治安はど

うなっているんだ。男子更衣室はヤリ部屋ではないぞ。
単純に犯されるというだけではなく、自分を犯す人間に顔見知りが混ざっているという事実に打ちのめされる主人公ちゃん。彼女は平穏な日常を取り戻すために戦っているというのに。
脅迫イベントを進めていると、水泳部顧問の鬼畜体育教師がエントリーする。彼は神聖な学び舎でなんてことをしているんだと正論を言いながら、主人公ちゃんを体育倉庫に連れ出す。
もちろんヤるためである。彼が他の竿役と一味違うのは、道具や薬や集団戦や呪術といった卑劣な手段を使わずに、己の身体一つで勝負を挑む所だ。
本気で堕としにかかる鬼畜体育教師にあひんあひん言わされる主人公ちゃん。彼はちゃんとゴムを使ってくれるので、避妊薬代はかからない。優しい。
これらのイベントを進めていくと、彼女はやがて、男に身体を求められることに愛情のようなものを見出し始める。輪姦を逆ハーレムと解釈するのはちょっと倒錯しすぎじゃない？
もっと進むと完全にセックス依存症になる。〝何もしていないのが苦痛で、こうしている時だけが安らげる時間だった〟とモノローグに出て来た時は、おお、もう……、と天を仰いだ記憶がある。
まあ、その状態でもラスボスは倒せるんですが。ラスボスはエロ攻撃を使ってこないので不利になることもない。セックス依存症の変身ヒロインに負けるなんて、邪神として恥ずかしくないの？
売春以外にも主人公ちゃん主導のエロイベントはある。この子は何故か、かなり早い段階から夜の市民公園を薄着でウロウロできるようになる。
ゲーム的にはシーンを回収できるだけのコマンドだが、彼女が自らそういうことをする理由を考えると、やはりストレス解消が目的だろう。
たった一人で悪の組織と戦い、身体を売って生活費を稼ぎ、学園では優等生として振舞う裏で同級生や教師に犯されるのだ。覚悟完了している主人公ちゃんでもストレスを感じないわけがない。

初めの頃はスリルを楽しむ程度で満足するが、徐々にエスカレートしていき、最終的に全裸徘徊するようになる。お巡りさーん。お巡りさんに捕まって犯されるイベントもある。そんな……。
ストレスを溜め込んだ主人公ちゃんが妙な事をしていないか、僕の方でも監視はしている。幸い、現時点でそのような兆候は無い。
……彼女は夜の時間帯に僕の部屋に入って何をしているんだろう。過激な一人遊びに興じていたとしても驚かないぞ。
その他に、師匠のマッサージ店を見つけて『浄化』してもらうイベントがある。彼にスペシャルなマッサージを注文すると超絶テクでアヘアヘさせてもらえる。
師匠は合意が無ければ手を出さないので和姦枠。まあ、あの人は大勢の女性と関係を持つ愛の伝道師なので、どう頑張っても恋人枠にはならないのだが。

総評する。
なんというか……愛情に飢えているのに、愛情がどういう物なのか理解していない節がある。
愛と似ている物を愛と誤認し、それを得ても飢えが満たされないことに気付かぬまま、際限なくそれに依存してしまっている。
お金も性欲も、それそのものは愛ではないんですよ。パパとママに教わらなかったのかな？
……彼女は夫婦愛というものを見ずに育ったからなあ。両親がプロレスごっこをしている所にうっかり出くわしたことも無い。男女関係について偏った知識しか持っていない可能性はある。
それと、無自覚な破滅願望というのはやはり厄介だ。
作中でも無意識に危険な行動を行い、何故自分がそのような行動をしてしまったのかと後から困惑するシーンが結構ある。
治安の悪い地域を『変身』しないまま歩き回り、生身では対処できない要素によってバッドエンド直送されるのも、これが原因かもしれない。
無意識の部分で自分自身を憎悪していて、発作的に破滅しようとす

るとか正直勘弁してほしい。
こんな不安定な女の子に戦う覚悟を決めさせなければならないなんて……本当に僕にできるのか？

★☆★☆★

珍しく主人公ちゃんが寝坊したと思ったら、少年誌に出て来そうなえっちイベントに遭遇してしまった。
いい悲鳴だ。原作にはボイスが無かったんだよな。彼女の声は、ハキハキしていてよく通る素敵な声だと思う。
なんか主人公ちゃんと精霊さんが内緒話してたっぽいのが気になるけど……。まあ、彼女達の仲が良いならそれはとても喜ばしいことだ。

今日も今日とて親友ちゃんを追い返す。数えるのも面倒なぐらい彼女の身を守った気がするけど、このアホサイドテールは未だ治安のヤバさに気づいていない。
もういい加減面倒になってきたから、一回ぐらいエロ同人みたいな目（未遂）に遭ってもらうべきかもしれない。
……いや、それで加減を誤ったら大惨事になる。やっぱりなし。くそ、情報屋なら自力で危険な情報ぐらい掴めよ。

夜の街を駆ける。
明日の出撃分の下準備は済んだので、今はフリーの時間だ。こういう時は、街を守る正義のヒーローごっこをしている。
『カサンドラ』により、街の暗がりに潜む魔物を探して無心に殺し続ける。人間の生活圏付近に出没する魔物はほとんど低位の魔物なので、僕程度の戦力でもサクサク処理できる。
酒に酔って赤ら顔をしたサラリーマンに魔物を殺す所を見られた。彼は腰を抜かして驚いている。
こんばんは。これに懲りたら明日からはもっと早い時間に帰宅す

るようにしようね。
ギャルっぽい風貌の女性が触手の魔物に犯されそうになっていた。すぐ助けに入る。
こんばんは。今のこの街は治安がひどいことになっているから、できれば引っ越した方がいいよ。
魔物に食われそうになっている人の反応に急行する。しかしすでに手遅れで、不良っぽい風貌の彼は死んでいた。
こんばんは。間に合わなくてごめん。来世があったらもうちょっとマシな世界に行けると良いね。
助けが間に合うことも、間に合わないこともある。『カサンドラ』は、今宵も誰かの滅びを予言し続ける。
こんな、波打ち際で砂のお城を作り続けるような行為に何か意味があるんだろうか。もっと、根本的な対応が必要なのに。
……そういえば、シスターさんはこんな感じで心を膿ませていったんだっけ。
自暴自棄になっていた彼女に対し、僕は何と言って励ましたのだったか。忘れてしまった。何かとても無責任なことを言ったような気がする。
戦う理由か。僕が戦っているのは、未来の情報を得て頭がおかしくなったからだ。主人公ちゃんの参考にはならないだろう。
精霊さんも同じく参考にならない。彼女はそういう使命を持つ存在だから、自分で戦う道を選んだわけではない。
でも、僕の知り合いのあの優しい人たちなら。強制ではなく、自らの意思で戦う道を選んだ人なら。迷える少女を導く方法を知っているかもしれない。
夜空を見上げ、主人公ちゃんに対して抱く一番強い想いを振り返る。
”こんなことになると知っていたら、わたしは契約なんてしなかったのに”、”どこか、遠い所へ行きたい”。そう言い残して、崖から身を投げた彼女を覚えている。

”わたしは一人で戦っていた。わたしだけが頑張っていた”、”わたしを責める資格がある人間は、この世に一人も存在しない”。そう呪詛を吐いて、闇への誘いを受け入れてしまう彼女を覚えている。

この物語を終わらせて、君を主人公なんかじゃない、普通の女の子に戻してあげたいんだ。

０６＿精霊さんは軟着陸させたい

『ねえリリィ。今の方針でどれだけ頑張っても意味が無い気がしてきたんだけど』
『そんなことないですよ。少しずつ進展しているはずです』
『ううん。そうなのかな……？』
　夕食の前の時間。ユウが料理している様子をぼんやりと眺めていたアカネが、例の件について相談してきた。
『電車でバランスを崩したフリして抱き着いても、普通に心配されるだけだったわ。気合入れて髪とお肌の調子を整えても、少し嬉しそうな反応されただけだし』
『彼が嬉しそうにしていたのなら、上手く行っているのでは？』
『確かにユウ君は反応してくれたけど……。なんだか他の男の人にジロジロ見られる頻度が上がった気がして、わたしはあんまり嬉しくないの』
　恋は女を綺麗にするという話がある。今のアカネは異性に見られることを意識して身だしなみを整えているため、以前よりも容姿に磨きがかかっているようだ。
　……私は例の計画に協力すると約束したが、実の所、その成就を心から願っているわけではない。
　この放っておいたらどこへ突っ走るか分からない暴走娘をどうにか誘導して、どこかに軟着陸させたいというのが本音だ。
『順調に進めば「散々挑発しやがって。清楚なフリしながら実は誘ってたんだろ？」「違っ……私、そんなつもりじゃ……！」みたいな感じになるはずなのに、微塵もそういう気配が無いわ』
『ユウはそういう発言をするキャラではありませんよ』
『雰囲気よ雰囲気』
　こんな計画を提案した私のせいではあるが、それが上手く行くと信じて素直に実行してしまう彼女も大概である。
　エロ本を読み過ぎて現実とエロ本の世界を混同しているのかもしれない。

私の契約者はどうしてこうなってしまったのか。何もかも催眠怪人が悪い。
『こういう気の長い方法じゃなくて、一発で解決できる魔法とか無いの？』
『具体的に聞いてください』
私がそう言うと、彼女は何故か得意げな様子で話を続けた。
『この前読んだ本に「セックスしないと出られない部屋」っていうものがあったわ』
聞いているだけで頭がおかしくなりそうなワードが飛び出してきた。
『扉を封鎖する魔法は存在しますが、何ですかその限定的すぎる条件は……』
『そういう部屋にわたしとユウ君が閉じ込められて、わたしが全力で拒否すれば、彼は泣く泣くレイプしてくれるんじゃないかなって』
なんという恐ろしい計画だろう。だが、アカネとユウの二人を閉じ込められる部屋を用意するのは非常に困難だ。
『あなたもユウも『転移』が使えるでしょう。もしそれを封じたとしても、あなたは『変身』すれば厚さ１０ｍの鋼板でも容易に突破できますし、ユウは『霊体化』で壁抜けができます』
『そこを魔法でなんとかできない？』
『無茶を言わないでください。私もあなたも結界魔法の適性は高くないのですよ』
『そう……』
部屋に閉じ込めるのが無理と聞いた彼女は残念そうな表情をしている。アカネ的には泣く泣くレイプでもＯＫなんでしょうか……。
『なら……惚れ薬とか、そっち系の魔法はどうかしら』
いよいよなりふり構わなくなってきた。このままではユウの貞操が危ない。ただ、その手段もやはり実現困難だ。
『魔法の惚れ薬や、『魅了』の魔法は存在します。アカネには扱えない魔法ですが、薬であれば入手できるかもしれません』
『それじゃあ……』

『私はそういう伝手を持っていませんが、ユウであればきっと調達できるでしょう』
『……いや、ユウ君にもらった薬をユウ君に飲ませるのは無理じゃない？』
『まあ、無理でしょうね。仮に薬を盛ることに成功したとしても、ユウは治療魔法使いなので異変に気付いて自己治療してしまいそうです』
彼は何故か隠密や斥候としての優れた能力を持っているが、本業は治療分野であると話していた。
あの年齢であそこまでの魔法を修めるには、並々ならぬ努力と才能が要るはずだ。一体、どのような人生を送って来たのだろう。
『むむむ……』
『何か思いついたらまた言ってください。相談ぐらいならいくらでも乗ってあげますから』
計画は成就しそうにないが、こうして悪だくみをしている時のアカネはなんだか楽しそうだ。これはこれでストレス解消になっているのかもしれない。
こころなしか、以前より表情が明るくなった気もする。
このまま穏便に進んで、どこかで諦めてまともな道に戻ってくれれば良いのですが。

★☆★☆★

「今日の夕飯はイカのお好み焼きと、イカのわたのホイル焼きです」
「わーい。イカおこのみ大好き」
ユウの手料理を前にして、子供のように喜ぶアカネ。
そういうお子様な所もしっかり見られているんですよ、という指摘は控える。
彼女は料理は苦手だが、食後の後片付けや食器洗いはアカネの担当なので、何もかも彼に任せきりというわけではないからだ。洗い物とか掃除とかは好きなんですよね彼女。
「おいしい。……そうそう、今日はユウ君に聞きたいことがあるの」

「何だい？」
「ユウ君はわたしの好きな食べ物を知っているけど、わたしはユウ君の好きな食べ物を知らないじゃない？だから、教えて欲しいなーって」
アカネは知人らに彼の趣味趣向について尋ねて回ったらしいが、碌な情報が得られなかったと聞いている。
なので、直接聞いてみることにしたらしい。
好きな食べ物が何かという簡単な質問を受けたユウは、何故か、話したくない事を聞かれたような気配を一瞬だけ覗かせた。
違和感を覚えるも、彼はすぐに普段通りの友好的な雰囲気に戻ってしまった。……私の見間違いだったのだろうか。
「……カレーとか、シチューとか、ポトフとか。具材を色々入れられる煮物料理が好きだよ」
「へえー、そうなの。カレーならわたしでも美味しく作れるわよ」
「あはは……。今度一緒に作ろうか」
アカネの料理下手を知るユウは苦笑いをしている。
包丁の扱いは上手でも、味付けと火加減のセンスが無いんですよね……。魔物を焼き殺す事に関しては抜群のセンスがあるのに。
「えーと次は……ユウ君って学園の休憩時間ではいつも本を読んでいるわよね。どういうジャンルの本が好きなのかしら」
質問を受けたユウは、少しだけ考え込むような仕草をした後に口を開いた。
「実は、普通の本に偽装して魔法関係の参考書を読んでいるんだ。『カサンドラ』を作るのはかなり大変だったからね……。ただ、いつも勉強ばかりってわけでもなくて、娯楽小説も読むよ。好きなジャンルは特にないけど、人の心の移り変わりを丁寧に描いた作品とかが好みかな」
「ほうほう」
二人の様子を見ながら、あの広域魔法監視網の仕様を思い返す。
空間に作用する魔法なので、特定の対象を取らない。そのため、ほとんどの占術耐性を貫通するという恐ろしい性質を持つ。

それぞれのノードが発する探知魔法が微弱すぎて逆探知が困難であり、魔法陣に施された高度な隠蔽処理と併せて発見されるリスクを抑えている。
仮に発見されたとしても、複数のノードが連携して機能するという仕様なので、単体で見ればよく分からない魔法を発する魔法陣でしかない。
いくつかのノードが破壊されたとしても、全体の稼働率が一定以上であれば問題無く機能する。ノードが完全に破壊されなければ遠隔で修復も可能。
こんなものを「作れると思ったから作った」「知的好奇心が抑えられなかった」なんて理由で構築する彼は何者なんでしょう。
『リリィ、次はあなたの出番よ。近所のおばさんみたいな感じで彼の異性のタイプを聞いてみて！』
『誰がおばさんですか。まったく……しょうがないですね』
アカネから協力要請が来た。
まあ、私としてもこういう健全な方面のアプローチであれば嫌ではない。
「ユウ、私からも質問です。ずばり、あなたの好きな女性のタイプはどのようなものなのでしょうか」
私がそう聞くと、彼はチラリとアカネの表情を見た。
彼女は懸命に気の無いフリをしているが、ソワソワしていることをまるで隠せていない。
完全にバレてますね……。そういう嘘がつけない所もあなたの美点ではあるのですが。
ユウは少しの間だけ目を閉じ、フ、と笑みを浮かべてからその問いに答えた。
「こうと決めたら意地でも曲げない意志の強さがあって、それでいて見ていてどこか危なっかしい、支えてあげたくなるような所がある人かな」
「結構具体的ですね」
「あとは、そうだな……。何かやりたい事があって、そのために情熱を

燃やせる人とか」
「カエデみたいな？」
「確かに、坂本さんはこの条件に結構当てはまっているね」
穏やかなユウとは対照的に、アカネはむむむと悩まし気な表情をしている。
彼は、甘えるよりも甘やかしたい、献身的なタイプらしい。
なるほど……。そうであれば、アカネとの相性は良さそうだ。
『リリィ、大変よ。彼のタイプにわたしが全然当てはまってない気がする』
『え、そうですか？』
『そうじゃない？』
アカネが妙な事を言い出した。
『あなたは熱中する趣味などは持っていないようですが、頑固なところも危なっかしいところもあるでしょう』
『……そうなの？』
『そうですよ。精霊リリウムの誇りにかけて断言します』
『そんなことを断言されても嬉しくない……』
アカネの表面的な部分しか知らない人物であれば、先程ユウが挙げた要素は彼女に当てはまらないと感じるだろう。
だが、彼女と魂の契約を結び、親しく接してきた私は、そうではないことを知っている。
『確かにそれらの要素は欠点とも取れる部分ですが、人の好みは千差万別です。あなたはありのままのあなたで良いのですよ』
『ううん。そう、なのかな……』

★☆★☆★

夕食を終え、アカネが洗い物をしている時にユウが話し掛けて来た。
普段であればアカネを含めた3人での会話になるので、こうして1対1での会話は珍しい。

「リリウムさん。天峰さんには秘密の話をしたいんだけど、『対話』の魔法で話をしてもいいかな？」
「はい、構いませんよ」
　小声での内緒話ではなく、魔法を用いた会話となるといよいよ穏やかではない。何か問題でも起きたのだろうか。
『まずは現状認識の共有から。……天峰さんは、『リベレーター』との戦いを苦痛に思っている。義務感と責任感でなんとか持ちこたえているけど、それだけでは抑えきれない過剰なストレスを抱えている。リリウムさんから見ても、この認識は合っているかな』
『……ええ。間違いないです』
　私もユウも彼女の負担を減らそうとしているが、一般人である彼女に命懸けの戦いを強いていることに変わりはない。
　このまま我慢を続けさせれば、いつか取り返しのつかないタイミングで爆発してしまうかもしれない。
　それでも、彼女の代わりは居ないのだ。私にできるのは、彼女が慣れるのを待つことだけだった。
　いつもと同じ状況であれば。
　いつもと同じ、私と契約を結ぶしかない、より末期的な状況であれば。
　契約者の少女は、喪失の痛みを抱えながら死に物狂いで戦ってくれたはずなのだが。
『それなら、もう一つ確認させてほしい。リリウムさんは、契約者である天峰アカネの味方だよね？』
『……？どういう意味の質問ですか？』
『言葉通りの意味だよ』
　彼はなにやら意味深な確認をしてきた。何故そのような当たり前のことを聞くのだろう。
『はい。私は彼女の味方です』
『ありがとう。あなたが決して彼女の不利になる行いをしないと信じるよ。だから、……この信頼を裏切らないでほしいな』
『まるで、私がこれからアカネの不利益になることをするかのような

物言いですね。少々不愉快です』
　私の気持ちを表明するために、むっとした表情を作って見せたが、彼は全く動じずに話を続けた。
『ごめん。別に大したことじゃないんだ。これから何か判断に迷うことがあったら、”天峰さんの利益になるか”を一番に考えてほしいってだけだからさ』
　彼に私を疑っている様子はない。本当にただの確認がしたかっただけのようだ。
『それで、ここまでもったいぶって確認しなければならなかった本題は何なのでしょうか？』
『今度の休みに、僕の協力者の人達と、あとは知り合いに話を聞きに行こうと思っているんだ。聞く内容は、”どうしてあなたは戦いに身を投じたのか”』
『戦う理由……ですか』
　今のアカネが持っていないものだ。人が理不尽に苦しみながらも、それでも前を向く原動力となる大義、あるいは覚悟といったもの。
『本当は天峰さんを連れて行きたかったんだけど、彼女は正体を隠さなければならない。だから、代わりにリリウムさんが一緒に来て、聞いた内容を彼女に伝えてあげてほしい』
『それぐらいならお安い御用です』
　話を聞いて、それを伝えるだけ。たったそれだけで現状の改善に繋がるかは分からないが、私一人では何もできなかったのも事実だ。
　この男は冷静で視野が広く、まるで未来を見通すかのように采配を振るう。そんな彼が有効だと判断した。それだけでも、私が彼の策に乗る十分な理由足りえた。
『よし。じゃあ今度の土曜は朝から出かけるから、当日はよろしくね』
『はい』
　少しの間アカネと別行動することになるが、彼女の『変身』は私が遠くに居ても問題なく扱える。いざとなれば『転移』で合流も可能だ。
　彼に協力者が居ることは口頭で説明されていたものの、正体を隠さなければならない都合で直接顔を合わせることはなかった。

この年齢に見合わず優秀で、謎が多すぎる人物の背景に迫れると思うと、少しだけワクワクするような気分になれた。

「えっ!?リリィとユウ君が休日デート!?」

「何故そうなるのですか……」

「あっはっは」

０７　精霊さんは話を聞く　１

「それじゃあ、行ってくるね。夕方はいつも通り出撃するから、それまでには戻るよ」
「はーい」
　土曜日の朝、朝食を食べてすぐの時間。ユウは出かける前に、アカネの今日の予定を確認しているようだ。
「天峰さんは、今日は坂本さんと遊びに行くんだっけ？」
「ええ。一緒に買い物と、あとはカラオケにも行く予定」
「そうか。それは良かった」
　アカネが友達と遊びに行くと聞いただけで、何故かユウは嬉しそうにしている。こういう時の彼の感情の動きはいまいち理由が分からない。
「天峰さん。出かけるときは、人気のないところに行かない。ナンパされても絶対についていかないように。知らない人に貰った食べ物は口にしちゃいけない。モデルのスカウトとか言われても耳を貸さないこと。宗教勧誘や変なセミナーにしつこく誘われても無視して。歩いている時に近くに車が止まったらすぐに車から離れるように。様子がおかしい人が居たら距離を取ること。それから……」
「も、もういいから。心配してくれるのは嬉しいけど、そこまで言われるほどじゃないわよ」
　かなり本気で心配している様子のユウに、アカネは嬉しさ半分迷惑半分といった表情だ。
　彼女は小さい子供ではないのだから、幼児に言って聞かせるような注意はやりすぎだと思うのですが。

☆

　ユウが『転移』の魔法を発動すると同時に私の視界が切り替わった。
　私の依代である、銀の台座に水晶をはめこんだブローチは、彼の服の胸ポケットの中にある。そのため、彼の周辺に限れば実体化せずと

も自由に移動できる。
『転移』した場所は……床に座標指定補助の魔法陣が設置された部屋。壁や天井が白一色で統一されたこの部屋は、どうやら病院の一室のようだ。
『今日は、まあ、色んな人に話を聞きに行くわけだけど。それと一緒にお仕事とか情報交換もしていくから少し長くなるよ』
『承知しました』
彼はそう言うと、慣れた様子でドアを開けて廊下をスタスタと歩いて行った。
途中で受付に寄り、入場用の書類を提出してからさらに進んでいく。
『ずいぶん慣れている様子ですが、ここは……？』
『教会』が運営に関わっている病院。魔物の被害に遭った人や、魔法での治療が必要な人が送られてくる場所だよ』
『教会』。私が眠りについている間も、あの歴史ある組織は健在だったようだ。
治療魔法使いの彼が、そういう施設に来たという事は……。
やがて、彼は一つの病室に辿り着いた。間にカーテンの仕切りがあり、複数の患者を同時に収容できる大部屋。
そこでは、修道服を着た一人の女性が彼の到着を待っていた。
「おはようございます、センセイ。しばらくぶりですねー」
「おはようございます、リナさん。元気そうで何よりです」
くすんだ金髪に、灰色がかった碧い瞳。ウィンプルは被っておらず、背中のあたりまで伸ばした髪を一本結びでまとめている。
流暢な日本語を話しているが、その顔立ちは白人のものだ。彼女はどこか眠たげな目を嬉しそうに細めて、ユウのことをセンセイと呼んだ。
「積もる話はありますが、まずは患者の方々の治療が先です。こちらをどうぞ」
そう言うと彼女は、この部屋に収容されている患者のカルテをユウに手渡した。

「苗床化による重度の体質変化が6名、追加で欠損有りが1名ですか」
「はい。『中身』の摘出と解毒処置は別の方が実施済みで、現在は薬で眠らせてあります」
「では、症状が軽い方から順番に『復元』を行っていきますね」
ユウは病室にある一つのベッドに歩み寄ると、そこで寝ている患者の身体にかけられた布を取り払った。
手首に点滴を取り付けられたその女性は、全身に凌辱の痕跡を色濃く残している。特に目立つのは下腹部から性器にかけての状態で、幾度も魔物を出産したことが一目で分かるような有様だ。
『リリウムさん。これから少し時間がかかる魔法を使うから、その間は話し掛けないでくれるかな』
『はい、承知しました』
私の返事を聞いたユウは、粘土の塊のような物を取り出してから手で千切り、それに白い粉を混ぜてから患者の腹の上に乗せた。
続いて、黒い渦のような物が入っている厳重に密閉された小瓶をベッドに置く。
触媒の準備を終えた彼は、一度深呼吸をしてから魔法の詠唱を始めた。
『『魔法自動化』設定開始。魔法指定、『時間遡行』。遡行時間指定、１０秒。対象指定、人間一名。触媒指定、『ニュートロニウム』３０ｇ。発動条件指定、『復元』の失敗時。設定完了。『魔法自動化』起動」
『『復元』の各工程開始。対象の魂に接続……ＯＫ。魂と肉体の同期を無効化……ＯＫ。魂の損傷履歴を参照。編集開始――」
私が見ている前で、ユウは魔法を詠唱し続けている。しかし、患者の身体には一切の変化が起きていない。
それは異常な光景だった。魔法の詠唱には多大な集中力を要し、これだけの長時間継続するだけでも容易なことではないためだ。
そのまましばらくの間、見かけ上は何も起きないまま時間が経ち、彼が編集を開始してからおおよそ5分後にようやく変化の時が訪れた。
「――編集完了。魂と肉体の整合性確認を実施……ＯＫ。再度整合性

確認を実施……ＯＫ。魂側の優先度を最大に、肉体側の優先度を最低に固定。魂と肉体の同期を有効化――『復元』」
ユウが詠唱を終えると、患者の身体に劇的な変化が現れた。
全身に刻まれた凌辱の痕跡が、時を巻き戻すかのように消えていく。見た目では分からないが、おそらくは内臓も治療されているのだろう。また、その変化と同時に粘土のような物体の質量が少し減ったようだ。
ベッドに寝かされている女性は健康的な肉体を取り戻し、つい先程まで哀れな犠牲者そのものの姿だったことが嘘のようだ。
「バイタルチェックを実施……ＯＫ。魂と肉体の優先度を標準に変更。魂への接続を解除。『魔法自動化』停止。……全行程完了」
使用せずに残った触媒を回収し、患者の身体を隠すために布をかけることで彼の施術は完了した。
ユウは少し疲れた雰囲気で、大きく息をついている。
「お疲れ様です。センセイの治療は、まるで魔法のようですねー」
「魔法ですからね」
患者の様子を見て軽口を言った二人は、顔を見合わせてくすりと笑った。
……私は知っている。治療魔法というのはそこまで万能な物ではない。
自然治癒力を高める魔法や解毒魔法等は一般に普及しているが、重度の肉体の変質は魔法では治療できないはずだ。
私が知らない間に何か変化があったのだろうか。あの、私が見たことの無い魔法について後でユウに聞かなければ。
そのまま彼は、病室に居る患者を順番に治療していった。
最後の一人である四肢の一部を欠損した患者を治療する際に、何やら怪しげなクスリを自身に注射していたのが少々気になりはしたが、彼は１０分近い長時間詠唱を行いその患者の治療も成功させていた。
切断された部位をくっつけるのならまだしも、完全に喪失した部位を再生するのはやはり尋常ではない。欠損した部位の再生は、希少な『エリクシル』でもなければ不可能なはずなのですが。

☆

「はぁ……。今日もなんとか医療ミス無しで乗り切れた。サンキュー神様」

施術を終えたユウは、病院内にある小さな休憩スペースに移動し、椅子に腰かけてマジックポーションを飲んでいる。

リナと呼ばれていた女性は、治療の後に報告書を提出しに行ったのでこの場には居ない。

ずっと聞くのを我慢していた疑問を解消するチャンスだ。

『ユウ。あの『復元』という魔法は何なのですか？近年新しく作り出された魔法なのでしょうか』

「そうだね。実は僕が考えた魔法なんだ」

『えっ』

「……あと、この部屋は防諜がしっかりされているから実体化しても大丈夫だよ」

「あっ、はい」

彼に促されるがままに実体化して椅子に腰かける。

今何かとんでもないことを言わなかったかこの男は。

「……初めは、『エリクシル』がどのように作用しているのか疑問に思う所からだった。あの究極の治療薬は、魂が残っていれば死者すら蘇らせて、人間が失った内臓や四肢を再生することもできる」

「ふむ。疑問とは？」

「怪我で腕が1本取れちゃった人が『エリクシル』を使えば腕が一本生えてくるけど、腕に怪我をしていない人や、生まれつき腕が無い人が『エリクシル』を使っても新しい腕が生えてこないのは何でなんだろうなって」

「ええ……？」

『エリクシル』は治療薬であって、人間を別の生き物に進化させるような薬ではない。別の場所の怪我を治そうとして腕が3本になるとか嫌すぎますよ。

「だから、まあ……健康な状態の肉体の情報がどこかに保存されていて、『エリクシル』はそこを参照して治療を行っているんだろうなって思ったんだ」
「なるほど」
「それで、多分魂にその情報が格納されているんだろうなって当たりをつけて、地道に解析していったらなんとなく情報の格納場所が分かるようになって、ついでに魂の状態を編集する方法も分かって、治療魔法として活用できるようになったんだ」
「ええ……？」
「うちの家系が魂に関連する魔法に一家言あったのが大きかったね。そうでなければ取っ掛かりが無くて無理だったはず」
　なんだか頭が痛くなってきた。つまりこれも「作れると思ったから作った」「知的好奇心が抑えられなかった」の一種なんでしょうか。
「えーと、あの粘土のような触媒は何なのでしょうか。白い粉末は『生命の素』ですよね？」
「白い粉は『生命の素』だね。魂関連の魔法触媒。粘土っぽいやつはバイオプリンターのインク」
「……バイオプリンター？」
「ちょっと倫理観の緩い錬金術師の一派が、人間を印刷できるバイオプリンターを作ろう！ってプロジェクトを推進してて、僕も魂関連の専門家として少しだけ参加してたんだ。コストを度外視すれば人体の複製を印刷できる所までは行ったんだけど、どうしても魂の複製ができなくてプロジェクトは頓挫した。それで、インクが余ったから安く引き取ってきて、『お肉』系の触媒として有効活用しているんだ」
「ええ……？」
　さらっと言いましたが結構ヤバい事してますね彼。知的好奇心からか、報酬金目当てだったのか、それとも印刷したい人でも居たのでしょうか……？
「次は……そういえば、『復元』の前に『時間遡行』を待機状態で発動していましたよね。あれにはどのような理由があるのでしょうか」
　『時間遡行』は『転移』と同じぐらい発動が難しい高度な魔法だ。わ

ざわざ用意するという事はそれ相応の事情があるはず。
私がそれを聞くと、彼は露骨に目を逸らした。……嫌な予感がする。
「……『復元』はね、うっかりミスで変な所を編集した状態で発動すると、その……対象が名状しがたい形状になる可能性があってね。そういう事が無いように入念に確認はしているけど、僕も人間だしミスはする。だから、ミスした時に無かったことにするために待機させてる」
「……安全に配慮された素晴らしい手順ですね！」
この話題を続けるのが怖くなってきた。でも、まだ確認したい事は残っている。
「最後の患者を治療する前に、あなたが自分に注射していたアレは何ですか？」
「あれは、まあ、元気が出るおクスリだよ。疲労がポンと取れて集中力が増すんだ」
「……どう考えてもアウトなクスリですよね!?」
私がツッコミを入れると、ユウは乾いた笑みを口元に浮かべて誤魔化すように弁明をしだした。
「いやーその、失敗して『時間遡行』を使う事になると『ニュートロニウム』を消費しちゃうからね。あれはかなり値段が高いから可能な限り失敗したくないんだ。クスリの配合も、ちゃんと僕の体質に合わせて調整してあるし、終わった後は中和剤を投与してるからへーきだって」
「ええ……？」
結局彼は、注射した薬剤がアウトなクスリであることは否定しなかった。
今回のやり取りで少しユウの事を理解できた。
彼は超一流の治療魔法使いで、ちょっと倫理観の緩い男だ。

☆

「お疲れ様でしたー。患者さん達はこの後、記憶封印処理を受けた後にそれぞれの日常に戻ることができます。これもみんなセンセイのおかげですよー」
　書類の提出を終えた修道服の女性が合流し、私たち3人は席について向かい合った。
「それでは、まずは自己紹介からですねー。私は上里リナと申します。『教会』で魔物狩りをしています」
「初めまして。私は精霊リリウムです」
　ぺこりとお辞儀を交わして挨拶をする。彼女の視線には、何かを探るような色が含まれているようだ。
「後の予定もあるという事なので、早速ですが本題ですねー」
「ええ。……リナさんは、何で『教会』で魔物狩りをしているんですか？正直に言って給料も福利厚生も悪い職場ですよね」
　ユウがその質問をすると、リナは目を閉じて過去に想いを巡らせた。
「私、孤児なんですよ。両親の顔も名前も知りません。戦えるだけの魔力があったから『教会』の運営する養護施設に引き取られて、なんとなく育って、なんとなく中学を卒業して、なんとなく『教会』の魔物狩りになったんです」
　彼女は淡々と語り続ける。
「別に、強制されたわけではありません。私に戦いの才能があるなら、そうした方が誰かの役に立てるんじゃないかと思って志願しました。身体を動かすのは好きでしたし。初めの頃は、なんとなくの善意で戦えていたんです」
「……でも、ただひたすらに魔物を狩り続けていたら、急に怖くなってしまったんです。もしかしたら、私が頑張る事には何の意味も無くて、このまま誰も見ていない所で戦いを続けていたら、いつか暗い闇の底で孤独に終わりを迎えることになるんじゃないかって」
「一度疑念を抱くと、だんだん身体が思うように動かなくなっていきました。それでも、私は戦い以外の生きる道を知らなかったので、そ

のまま魔物狩りを続けたんです」
「戦場に雑念を持ち込んだ私は、当然のように任務に失敗しました。いつかの私が想像した通りに、暗い所でひとりぼっちになって……」
「その後すぐに『教会』の救援部隊に救助されて、今私達が居るこの病院に運び込まれました。そうして、センセイに出会ったんです」
　リナは顔を上げると、ユウの方を向いて微笑みを浮かべた。
「あの時……あの時のセンセイが、私の手を握って、何て言っていたか覚えていますか？」
「……必死で励ましたことは覚えているけど、内容は忘れました」
「ふふ、なら私が思い出させてあげます。……私の手を握りながら、”まるで天使のようだ”って褒めてくれたんですよ」
　彼女は得意げな顔をして過去を語り、それを聞いたユウは何故かびくりと身体を硬直させた。
「私の、ごつごつしていて傷だらけの、女性らしくない手を握って褒めてくれたんです。”天使とは、美しい花をまき散らす者ではなく、苦悩する者のために戦う者である”。立派な看護師さんの言葉だそうですね」
「そ、そういえばそんな事も言いましたね」
　彼の動揺の色が濃くなると、彼女はますます嬉しそうな表情になった。
「その他にも、”貴女のような立派な行いをする人を僕は尊敬している”とか、”こんなに頑張った人が誰にも顧みられないのは間違っている”とか、”魔物狩りは辞めていいけど、幸せになる事は諦めないでほしい”とか、とにかく必死に励ましてくれましたよね。ふふふ」
「あー、あー、……すみません。恥ずかしいので忘れてくれませんか？」
「絶っっっ対に嫌です。たとえ地獄に落ちたって忘れてなんてあげません」
　ニコニコと笑う彼女に視線を向けられて、耳を塞ぐような仕草をしたユウは、羞恥の感情を顔に浮かべて居心地悪そうにしている。
　……この男がここまで動揺している所は初めて見た。彼をイジれ

るちょっとした弱みを握ってしまったかもしれない。
「センセイとお話することで、私は自分の視野が狭くなっていた事を自覚できたんです。戦う以外にも生きる道はありますし、私が目を向けようとしなかっただけで、私の頑張りを認めてくれる人は何人も居ました」
「それに、センセイはこうも言っていました。”本当のヒーローは、誰かのピンチに駆けつけられる人じゃない。誰も見ていない所で、悲劇の芽を事前に摘み取れる人なんだ”と」
「損な話ですよね。でも、それを聞いてようやく気付けたんです。私がこうして大人になれたのは、私が見ていない所でヒーローが頑張ってくれたおかげかもしれない。私が必死に戦う事で、知らない誰かのヒーローになれるかもしれない」
「だから、もう少しだけ頑張ってみようと思ったんです。疲れたら休んで、元気になったらまた頑張る。それぐらいの距離感で魔物狩りを続けていこうって……」
「長くなりましたが、これが私の戦う理由です。……いかがでしたか？センセイ」
「ありがとうございます、リナさん。貴女の話を聞けて良かった」
「ふふ。ちょっと恥ずかしいですが、センセイのお役に立てたのなら嬉しいです」
　そうして、彼女の語りは終わった。しばしの間、場が沈黙に包まれる。
「……ふぅ。沢山お話して喉が疲れちゃいましたが、もう一つ聞きたい事があるんですよね？」
「ええ」
「もう一つ？」
　私の聞いていた予定では、質問は一つのはずだったが。
「ああ、リリウムさんには話してなかったね。もう一つだけ、僕からの個人的な質問をしているんだ」
「『愛情、あるいは優しさとは何か』。これを、小さな子供に教えるならどう伝えるかですね。私はこれでもシスターですから、こういうのは

得意分野ですよー」
そう言うと、リナは懐から付箋だらけの小さな本を取り出した。
あれはまさか……。
「リナさん。聖書に付箋を貼るのはなんだかすごくカッコ悪い気がします」
「いいんですよー。昔読んだ時は意味不明な本でしたが、年取ってから読んだら分かりました。これは人生の参考書で、人が人らしく生きていくコツが書いてあるんです」
やはり聖書だった。彼女はペラペラとページを捲り、目当ての記述がある部分を開いた。
「コリントの信徒への手紙一、第13章。センセイは、どの部分が一番好きですか？」
”自分の利益を求めない”」
ユウはその本の中身を読まずに即答した。彼は聖書の内容を知っているようだ。
「センセイらしいですねー。私は、”愛は情深い”という部分が好きです」
彼女は胸に手を当てて、何かを堪えるような呼吸をした。
「人が悲しみに暮れている時に、諦めずに手を差し伸べ続けること。それが、私の信じる愛情の形です」
「……ありがとうございます。リナさんの答えは、しっかりと受け止めました」
「どういたしまして。たまにはこうしてシスターらしいことをするのも悪くないですねー」

☆

「センセイ、私の手を握ってくれませんか？」
「はい、どうぞ」
二人は右手で握手をして、それぞれの左手を重ねるように添えた。
「……ふふ、ふ……。私は、世界一の幸せ者です」

「リナさんは、いつも大げさな事を言いますよね」
「そうでしょうかー？」
「そうですよ」
　暫しの間、沈黙が続く。
「……実は、『教会』からセンセイを説得するように指示されているんです」
「……」
「センセイは、治療の道に専念する気は無いですか？」
「今はちょっと忙しくて。それに、僕が居なくても『復元』の使い方は公表してあるでしょう」
「ネズミの治療に成功した者は居ますが、皆口を揃えて”あれを人間に使いたくない”と言っています」
「それはまあ、そうでしょうねえ……」
　彼は口元に引きつった笑いを浮かべ、小声で”僕だってそうだよ”とつぶやいた。
　その後、時計の方をちらりと見た。
「そろそろ時間なので、手を離してください」
「もう、少しだけ……」
「……」
「……広品市での騒ぎが起きてから、世界中で魔物の発生頻度が上がっています。『教会』の人達は皆頑張っていますが、いつか限界を迎えるかもしれません」
「……そうですか」
「センセイ。私に治療が必要になったら、センセイが必ず治しに来てくれると約束できますか？」
「約束します。だから離してください」
「ふふふ。……嘘つき。”アイツは息をするように嘘を吐く”と柊さんが言っていた通りですね」
「あの人は……。というか、その感じだと僕がどう答えても離す気が無いんですかね」
「そんなことないですよー。……ほら」

リナは、本当に名残惜しそうにゆっくりと手を離した。
彼女は、大切な宝物を無くしてしまった子供のような表情をしてから、すぐに笑顔を作ろうとした。
しかし、溢れる想いを抑えきれなかったようで、口元だけの不格好な笑みになってしまった。
「センセイ。私達、また会えますよね？」
「僕とリナさんの両方が無事で居られれば」
「それなら、私はセンセイの無事をカミサマに祈っています」
「僕も、リナさんが無事で居られる事を願っていますよ」

☆

魔物狩りのシスターに別れを告げてから、彼は次の質問相手の場所に移動を始めた。
移動中、先程のやり取りで浮かんだ疑問点を確認する。
『ユウ。あなたの所属組織は『教会』なのですか？』
『そうだ』
『では、あなたを説得するように指示されている、というのは一体……？』
『……それについては、今日の挨拶回りが終わったら話す』
彼はそれだけ言って黙ってしまった。
堂々とした態度で、隠し事を取り繕う様子すらない。
『もう一つ別件を聞きます。あのリナという女性は、あなたにとってどういう人物なのですか？』
ユウは一瞬の迷いもなく即答した。
『初対面の時は、かわいそうな患者。元気になってからは、少し危なっかしい同僚。今は、僕の尊敬する友人の一人だよ』

☆

私は、センセイが無事で居てくれれば他に何もいらないのに。
どうして、ただ一つのささやかな願いすら叶わないのですか。

０８＿精霊さんは話を聞く＿２

彼は『転移』で屋外の人目につきにくい場所へ移動してから、迷いの無い足取りでどんどん進んでいく。

今回の『転移』でアカネとの物理的な距離が短くなった事を感じた。おそらくここは、広品市内なのだろう。

到着した場所は……警察署？

彼は建物内に入ると、受付にある椅子に行儀悪く腰かけている、金髪をツンツンと逆立てた見るからに軽薄そうな男に声をかけた。

「長谷川さん。どうも、元気にしていますか？」

「来やがったな水瀬……。テメーのせいでこちとら商売あがったりだぞ」

浅黒い肌で、柄物のシャツと擦り切れたジーンズを身に着けた彼は不機嫌そうな目つきをしてユウを睨みつけた。

「あれ、満員御礼で商売大？盛だって聞いたんですけど」

「それが問題なんだっつってんだろ！強面のおっさんどもがゾロゾロと押しかけてきたら、店の評判ガタ落ちで既存顧客が逃げるわ！」

「あー、あはは……。そうなっちゃいましたか」

「あのおっかないねーちゃんと交渉して、オレの方から出向くようにしたからなんとか店は無事だったがよ……。どう落とし前付ける気だ。ええ？」

「すいません。今度何か差し入れするので許してください」

「言ったな？じゃあ、イイ女を店に連れてこい。普段は真面目そーな面してるくせに性欲を持て余しているむっつりちゃんで、ムチムチでスケベな身体つきをしている女だ。血や硝煙の匂いがしたり、片手で首の骨をへし折ってきそうな女は論外だ。分かってるな？」

「僕は師匠みたいに鼻が良くないので、むっつりとそうでない人の違いなんて判別できませんよ。というか、警察署の受付でよくそういう発言ができますね……」

長谷川と呼ばれた男はやや不機嫌そうな様子だが、なんだかんだでユウと仲良く話をしている。

「……わーったよ。じゃあこっそりオハナシできる部屋に案内するから付いてこい」
「お願いします」
男の先導に従い、建物内の奥の部屋へ進んだ。

☆

「ここだ。カツ丼はねえが、秘密のオハナシには最適な部屋だろ？後であのねーちゃんも来ることになってる」
彼が案内した部屋は、机と椅子と小さな窓だけがある、いわゆる取調室と呼ばれる部屋だった。
「『探査』……うん、問題無いかな。リリウムさん、出てきていいよ」
『はい』
ふわりとその場に立ち、男と向き合う。
彼は、無遠慮な目つきで私の全身を舐めまわすように見てきた。
「惜しいな……。素晴らしい素質を感じる。ロリでなければ最高だったんだが」
「師匠は何でちょっと見ただけで分かるんですか……」
「経験と勘だ。オメーもオレぐらい場数を踏めば分かるようになるかもな」
二人は私を置き去りにして何かの話をしている。素質……？何のことでしょう。
私が視線を強めると、ユウは何かを誤魔化すようにそっぽを向いて、男はニヤリと笑って見せた。
「オレは長谷川マサキってもんだ。マッサージ店の店主をやっている」
「はじめまして。私は精霊リリウムです」
ぺこりとお辞儀をすると、ユウが口をはさんできた。
「ついでに言うと、僕のマッサージの師匠で、治療分野を専門とする魔法使いで、今は警察に協力している人でもある」
「オレぁ、公僕連中に関わる気なんざさらさら無かったんだがな？」

この人物が、ユウが以前話していた協力者の一人で、アカネを骨抜きにするマッサージを教えた者らしい。
見た目は完全にチャラい男だが、ユウが師と呼ぶ人物なのだ。見かけによらず、意外としっかりとした人なのかもしれない。
「それで、最近の警察の様子はどうなんです？負傷者の状態や、士気が心配なんですが」
ユウがそう問うと、彼はガリガリと頭を掻いて、吐き捨てるように話し出した。
「ろくでもない状態だな。犯罪発生件数が史上最多を更新していて、それを対処する警官どもも生傷が絶えねえ。それだけならまだマシなんだが、『リベレーター』の連中に運悪く出くわしたらもう最悪だ」
彼はうんざりとした表情を隠そうともしていない。
「魔物に襲われる様子を無線で実況生中継する羽目になった不運な警官が居たらしくてな。それを聞いた連中は、顔面蒼白になって「こんな仕事をするために警察官になったつもりは無い」っつって転属願いや辞表を出したり、無断で失踪したりしているらしい。まともな反応だ。オレが警官だったら同じことをする」
「警察は、極力『リベレーター』との接触を避ける方針で動いていると聞いているんですが……」
「上の連中はそのつもりで指示を出しているかもな。だが、負傷による人員交代が頻繁に発生していて、その穴埋めに各地域から応援をかき集めている状況だ。現場が混乱するのも無理はないと思うぜ？」
二人は示し合わせたように、同時にため息をついた。
「怪我をした警官の中には「これで現場を離れられる」って喜ぶようなヤツすら居る。まあ、全員が全員そうってわけでもないのが救いだな。すぐに現場復帰したがる負けん気が強いヤツも居て、そういうのは『怪我がすぐに治る不思議な病室』に優先的に入れている」
「あれ、『浄化』だけじゃなくて、『治療』もやっているんですか？」
「人員が減り過ぎてこの街の治安が悪くなるとオレも困るからな。ったく、こういうお医者さんじみた仕事はアニキに押し付けて来たつもりなんだが」

この人物は、不満を抱きながらも警察の稼働率向上に貢献しているようだ。
アカネが戦った後の後始末は警察が行っている。私達の活動を間接的に支援していると言えるだろう。
「大体分かりました。まだまだ余裕はありそうですね」
「ハッ。このままの状況が続けばいつか全面的に士気崩壊する日が来るぞ。それでいいのかよ？」
「そうなる前に決着が着きますよ。多分」
「そーかい。そうなる事を願っとくよ」
話が一区切りついたところで、ユウが次の話を切り出した。
「では、次は師匠へのインタビューですね。師匠はどうして、この騒ぎが起きても広品市から離れなかったんですか？」
「店の運営が順調で、リピーターもたくさん居るからよぉ。ヤバそうな状況になるまでは様子見しようとしただけだ」
「なるほど」
「言っとくが、勝ち目が無いと思ったらオレはすぐに逃げるからな？あの『精霊憑き』が負けたら、公僕のお手伝いなんざ放り出してケツまいて逃げるぞ」
「今の働きでも十分に助かっていますから、これ以上は望みませんよ」
「オメーがそういう事言うのは筋違いだと思うがねぇ。オレは家業をアニキに押し付けてきた身分だが、オメーは跡取りなんだろ？こんな所で油を売っていて良いのかよ？」
「あー……。まったく良くはないですね。そこはなるべく考えないようにしています」
「チッ。大した親不孝者だな？おい……」
「返す言葉もございません」
彼に指摘を受けたユウは申し訳なさそうにしている。
そういえば私は、ユウがどういう経緯でこの街に居るのか聞いたことがない。これも、後で確認するべきことだろう。
「では次に、愛情についてですけど……。師匠は真面目に考えてきてくれましたか？」

「そんなもん、オレがどう答えるかなんて分かりきっているだろ？」
「分かってはいますけど、一応……」
『教会』のシスターにしたものと同じ質問のようだが、なにやら不穏な空気が漂ってきた。
「愛っつったらそりゃ、エロい事に決まってんだろ。高まる鼓動、迸る汗、荒くなる呼吸。お互いに限界まで高まった所で、最高に気持ち良くなって、それを分かち合うこと！これに勝るものはこの世に無いぜ」
「師匠ならきっとそう言うと思っていました」
情熱的に性愛について語って見せた男に、ユウは困ったような表情をしている。
見た目や言動からそんな気はしていたが、やはり、人並み以上に性的な物事に関心が強い人物らしい。
「なんだよ、師の言うことに不満があるのか？」
「できれば別の表現も教えてほしいです」
「真面目にか？」
「真面目にです」
「……ハァ、しゃーねえなぁ。なら、別の言い方をしてやろう」
ユウに要望を受けた男は、少しの間目を閉じてから、静かな口調で語りだした。
「犬を飼ったことがあるか？こういう抽象的な問いに関しては、人間よりも犬の方がよほど賢い。あのいじらしい生き物は、飼い主が楽しそうにしていれば楽しそうにするし、悲しそうにしていれば悲しそうにする。近くに寄り添って、共感すること。そういうのが愛情であり、優しさってもんだろ」
マサキは何かを懐かしむような目をしながら、ごく自然体でその問いに答えてみせた。
「師匠……。ありがとうございます。そっちを先に出してくれればもっと良かったんですが」
「オメーはもうちっと師を敬え」
「僕は師匠のことをそれなりに尊敬しています」

「やめい。男に好かれたって嬉しくなんぞないわ」
「いや、その返しは理不尽じゃないですか？」
「覚えとけ、世の中ってのは理不尽で出来ているんだよ」

☆

「オレはこの後、警察相手に出張整体サービスをする予定だ。ここにいれば『神無月』の犬が来るから、オメーはしばらくのんびりしてろ」
話が終わり、マサキはこの場を立ち去ろうとしている。
彼は、ユウの目を真っすぐ見つめながら口を開いた。
「水瀬。率直に聞くが……、この戦い、勝てると思うか？」
「勝てますよ。もし負けそうだったとしても、僕が勝てるようにしてみせます」
「ガキの分際で言うじゃねーか。さすがは名家のお坊ちゃまだな」
彼はニヤリと笑うと、おどけたような口調で続きを言った。
「オメーにはまだまだ教えきれていない技術がたくさんある。叶えたい夢があるんだろ？暇ができたらみっちり教え込んでやるから、それまでくたばるんじゃねーぞ」
「師匠……。はい、僕は僕のロマンを実現してみせます……！」
二人はがっしりと握手をして、お互いの健闘を祈った。

☆

「ユウ。先程話していた、あなたの夢とは何なのですか？」
彼は、おおよそ欲というものを表に出そうとしない性格だ。そんな人物が持つ夢とはどのような物なのだろうか。
「あー、あー、あれはその……。個人的な趣味の話です。なので秘密です」
何故か敬語で返された。
「あなたにはいつもお世話になっていますから、私にできることがあればお手伝いがしたいのですが……」

「……リリウムさんに相手をして貰えれば、すごく楽しいことになるだろうな。いや、冷静になれ僕。今はそれどころじゃない」
「???」
彼は額に手を当てて、妄念を振り払うように頭を振り、それっきり黙ってしまった。

☆

オレが趣味で磨いた技を、価値のあるものだと信じて受け継いでくれる奴が居る。
誰かに教える気なんざさらさら無かったんだがな。意外とどうして、悪い気はしなかった。
オメーが死んだらオレの教えが無駄になる。だから、死ぬんじゃないぞ。弟子一号。

０９＿精霊さんは話を聞く＿３

「私は神田ミオと言う者だ。刑事部鑑識課所属の巡査部長で、『神無月』の構成員でもある」
「初めまして。私は精霊リリウムです」
　黒髪をひっつめ髪にして、くたびれ気味な警察官の制服を着た目つきの鋭い女性と、毎度の流れで挨拶を行う。
　『神無月』というのは、ご当地退魔組織であると先程ユウに説明を受けている。
「それで、早速ですが最近の警察の調子はどうです？皆さん元気で働けていますか？」
「分かってて聞いているだろう貴様……。ただでさえ忙しいのに、毎日毎日大量の戦闘員の拘束や、魔物の死体を焼却処分する仕事までさせられて、ほとんど全員の目が死んでいるぞ」
　彼女にギロリと睨まれるも、ユウは涼し気な表情で受け流している。この人物が、ユウが出撃前に連絡を入れている警察内部の協力者らしい。
「犯罪者の数が多すぎて、留置場がどこもかしこも一杯になってしまってな……。最近は、警察内部で『戦闘員ガチャ』とかいう妙な娯楽が流行っているんだ。スーツを剥ぐと、たまにヤクザの親分や指名手配犯が入っているからそれをＳＳＲと呼ぶんだ。面白いだろう？」
「あのー。神田さん。大丈夫ですか？」
「魔物の焼却処分も、運んで焼くだけと言えば簡単だがな。異形の生物の死体を多くの者が目にするんだ。一応緘口令は出されているが、人の口に戸は立てられん。これではもはや神秘の秘匿も何もあったものではない」
「あー……。まあそれはそうなりますよね」
「しかも、私が『精霊憑き』と連絡が取れる立場に居ることが周囲に知れ渡ってしまって、魔法のような力を使うコスプレ少女や『リベレーター』の連中と私が同類であるかのように見られている。今ではすっかり魔法業界の代表者扱いだ。私は『神無月』では役職の無い平の構

成員だというのに……」
「うわ。同僚に身バレするのはきついですね」
「ああ、とてもきついぞ。もう少し上手く立ち回れていれば……なんて思いで日々枕を濡らすぐらいきつい」
彼女は闇のオーラを纏いながらフフフフ……と暗い笑みを漏らしている。
「だが、暗いニュースばかりでもない。この緊急事態を受けて、広品警察の標準装備にスタングレネードが加わった。さらに『神無月』に追加の予算が入り、機動隊の一部に魔力付与した武装を配備することになった。これからは、警察もやられてばかりではないぞ」
彼女の淀んだ瞳に、ほんの少しだけ生気が宿った。
魔法使いではない人間が魔法武器を用いても大した戦力にはならないだろうが、警察が魔物と戦えるようになればアカネの負担も少しは減るだろう。
と、考えていたところでユウが口をはさんだ。
「待ってください。スタングレネードはいいんですが、魔力付与した武装を配備するって……その機動隊で何をするんですか？」
「む？それはもちろん、『リベレーター』戦闘員や低位の魔物との戦闘だが……」
「それは……。警察を戦わせることについては、少し慎重に考えた方が良いと思いますよ」
彼は、感情の読み取れない表情をして話を続けた。
「現時点で、警察は『リベレーター』の攻撃対象になっていません。理由は明らかです。〝脅威にすら思われていないから〟。ですが、警察が魔物と戦えるようになれば話は変わってきます」
「というと？」
「機動隊が目障りだと思った怪人が出張ってきて、逃げることもできずに全滅する、というのがマシな方です。最悪の場合は、警察組織そのものが邪魔だと判断されて警察署が攻撃されるかもしれません。そうなったらもうおしまいです。『精霊憑き』の彼女がどれだけ頑張っても、おそらく守り切れないでしょう」

悲観的な予測を告げられたミオは、頭に手を当てて頭痛を堪えるような仕草をした。
「奴らが本当にそんなことをすると思うか？」
「さて、連中の考える事は僕にはよく分かりません。ただ、警察は割と危ない方だと思いますよ。奴らは水道や電気、物流などのインフラ関係を破壊することはないでしょうが、警察を”消えても問題の無い組織”程度に思っている可能性はあるかと」
「そうか……」
「そもそも、その気になれば簡単に人間社会を崩壊させられる連中が、闇に潜んで勢力拡大に努めているというのが不自然なんです。人間を洗脳する能力を持つ怪人が複数居るんですから、この国の政治中枢や警察、自衛隊の上層部を支配しようとするのが普通でしょう」
ユウは、特に気負うこともなく淡々と話をしている。
……彼は、穏やかな表情の裏でいつもこのような事を考えているのだろうか。
「はー……、今後は少しはマシになると思ったんだがなあ……。分かった、懸念は伝えておく。それで、どうせ貴様のことだから『リベレーター』の動きが慎重な理由に心当たりがあるんだろう？」
「根拠のない仮説ですけどね。多分、ハッタリが効いているんじゃないかなと思っています。騒ぎが大きくなれば、『精霊憑き』相当の戦力がもっとたくさん増援として来るかもしれない。だから、今のうちに戦力を拡充しなければならない、とか」
「あれだけの戦力を持ちながら、ありもしない影に怯えているのか。もしそうだとしたら、『リベレーター』の指導者はとんだ臆病者だな」
「臆病かどうかは知りませんが、奴らがずっと今のままでいてくれると思わない方がいいです。このまま放置すれば、いつか必ず自重を捨てて暴れだす日が来るでしょう」
ミオは、眉間に皺を寄せてううむと唸った。
「大体、何なんだあいつらは。怪人に戦闘員？あんな特撮に出て来るような連中がどこから湧いてきたんだ」
それは私も同意見だ。

怪人という強大な魔物は、私をして初めて見る種類の魔物だ。
そして、戦闘員。より詳細に言えばあの、全身タイツの形状をした魔物。
着用した人間に憑依し、身体能力の強化、瘴気による悪影響の遮断、魔物に味方と認識される効果、魔物が持つ『異界物理法則』の適用といった恩恵をもたらすが、精神汚染により思考が魔物に近いものに変わってしまう。
魔物は本能的により強い魔物に従う。善良な市民に無理矢理スーツを着せれば、それだけで即席の兵隊の出来上がりだ。
このおぞましいほど効率的な魔物が、偶然発生したとは到底思えない。
「今の所分かっているのは、撃破した怪人の残骸や戦闘員のスーツから、『ラクリマ』由来の成分に近い物が検出されたという事だけですね」
「それは私も報告を読んだ。だが……」
ラクリマ。
ラテン語で『涙』を意味するその言葉は、魔法使いにとっては古きからある災いを指す。
ラクリマはおおよそ５０年に一度の周期で地球の存在する物質界に接近し、”地球上のどこか”に黒い雫を落とす。
その雫は、接触したありとあらゆるものを魔物に変質させる力を持つ。そして、黒い雫によって発生した魔物は”繁殖”を最優先目標として活動する。
ラクリマが出現する際に、空に黒い穴が開き、そこから涙を流しているように見えること。黒い雫が落ちた地域が悲劇と涙で覆われること。これらの要素が名前の由来とされている。
目的や正体は不明。地球上を眷属で満たし、物質界に顕現することが目的の邪神というのが有力説だ。
「だが、前回の『ラクリマ』は１５年前だ。時期が合わない。それに、『ラクリマ』によって発生する魔物は怪人とは全く異なるだろう」
そうだ。私はラクリマの対処のために眠りから覚め、契約者と共に

戦った経験が何度もある。
直近では６５年前の事例だが、怪人はこれまで戦ったことのあるいずれの魔物とも異なる性質を持つ。
あの戦いの後、契約者の少女はどうなったのだろう。戦いを終え、幸せな人生を歩めたのだろうか。
もし生きていたとしても、とっくにしわしわのおばあちゃんになっているはず。別れた後も、私の事を覚えていてくれたかな。
……いけない。今は感傷に浸るよりも、現在の契約者であるアカネのことを考えよう。
「１５年前の『ラクリマ』は広品市に出現したと聞いています。神田さんは当時の事を覚えていますか？」
「当時の私は学生だぞ。まあ、両親が青い顔でバタバタしている様子は見たがな」
彼女は顎に手を当てて思い出を振り返り、１５年前の様子を語りだした。
「これは私が『神無月』に入った後に知ったことだが、『黒い雫』はこの街の海岸のあたりに落ちたらしい。市街地に落ちるよりマシとはいえ、元は人間だった魔物が相応の数発生してしまった」
ミオは少しの間だけ目を閉じ、怒りのような感情を滲ませながら話を続けた。
「『ラクリマ』由来の魔物は生身の魔法使いでは手に負えない強さを持つ。未曾有の事態に『神無月』は大混乱に陥り、『神降ろし』の出動が遅れた。そこに野良の『精霊憑き』が現れて、事態解決のため奮闘するも戦死。それでも、半数以上の魔物は『精霊憑き』が撃破してくれていた。遅れて到着した『神降ろし』が残敵を撃破し、戦闘は終了した」
この街には、私以外の精霊が来たこともあるらしい。
今の事態を把握しているなら、アカネを助けるために出てきてくれても良いと思うのですが……。
もしかしたら、丁度いい契約者が見つからないのかもしれません。私がアカネを取っちゃいましたからね。

「最終的な被害は死者・行方不明者合わせて１００名ほど。街中に『黒い雫』が落ちたと考えれば奇跡的に少ない数だ。『精霊憑き』が現れなければ、もう二桁多い犠牲が出てもおかしくはなかっただろう」
「神田さんは当事者でもないのに、ずいぶんと詳しいんですね」
「この件については私も思うところがあるんだ。……『精霊憑き』がほんの少しだけでも臆病で、市民を見捨てて退く事を選べていれば。あるいは、『神降ろし』がもっと早く現場に駆け付けられていれば。あの英雄は死なずに済んだのではないかとな」
「……そうですね」
　二人はしんみりとした空気で顔を見合わせた。
「話を戻します。今の広品市には『ラクリマ』由来の魔物は出現していませんが、怪人や戦闘員から『黒い雫』に似た成分が検出されています」
「ああ」
「そして、原因は不明ですが世界的に魔物の発生頻度が上がっています。これは、『ラクリマ』の出現する時期と同様の現象です」
「そうだな」
「さらに、怪人や戦闘員どもは『闇の王』というものを崇めています。これは『リベレーター』の総帥と思われる存在ですが、未だ正体は不明です」
「私も、取り調べでそういう情報が出たというのは聞いたが……。いやちょっと待て」
　彼女は、より深くなった眉間の皺に右手で触れながら、とんでもなく嫌そうな声を出した。
「まさか、『闇の王』が『ラクリマ』のことを指していて、地上に顕現するまで秒読み段階にあるとか言うんじゃないだろうな」
「さて、どうでしょうか」
「裏でそういう事態が進行していたとしたら、事前に兆候が掴めるものなのか？」
「さあ？僕には分からないので、『星詠み』の占星術師にでも聞いてみたらどうです」

「『ラクリマ』が顕現した前例はあるか？」
「歴史上の出現例では、全て早期撃退に成功しています。よって前例はありません」
「怪人すら対処できないのに、こんなもん手に負えるかバカモノ」
「ははっ。僕に言ったってしょうがないですよ」

☆

情報交換が終わり、次の話題に移る。
「それでは、インタビューのお時間です。神田さんは、何でこんな状況でも逃げずに居るんですか？」
「警察官が市民の平和を守るのは当然のことだろう」
「えーと、それで？」
「それだけだが、何か文句でもあるのか？」
「ええ……」
あまりにも簡潔な答えにユウは困惑している。
その様子を見たミオは、その答えの補足を口に出した。
「もう少し具体的に言えば、奴らが好き勝手に暴れ回るのが気に食わないからだ。敵が強大で、勝ち目が薄いから逃げる？そんなことをしてしまえば、私は私でなくなってしまう」
「なるほど、プライドの問題ですか」
「貴様は、プライドなど犬にでも食わせてしまえと思っていそうだな」
「そんなことないですよ。自己肯定感も自己効力感も、健全な精神を保つために必要な物ですから」
「フン、どうだかな」
彼の答えにミオは不満そうな顔をした。
確かに、私から見てもユウは大らかな性格をしているように思う。
「では次に、愛情や優しさについてですね。神田さん的にしっくり来る答えはありましたか？」
「ああ。最近はそういう感情に向き合う機会が多くてな。私にも、そ

ういう曖昧なものが見えるようになってきたぞ」
　彼女はどんよりとした闇のオーラを背に纏い、感情を抑圧した平坦な声でその答えを語った。
「愛だの優しさだの言うものは、そうだな、我慢することじゃないか？上司にセクハラされようが、同僚に白い目で見られようが、ちょっと良い仲だった人に距離を取られようが、街中が犯罪者で溢れようが、市民に無能扱いされようが、空から邪神がひょっこり出てこようが、己の不満をぐっっっと堪えて、街が平和でありますように、という心を忘れずに奉仕することだ。どうだ？私はとても愛に溢れた人間だと思わないか水瀬」
「神田さん……。本当にお疲れ様です。ハンカチ使いますか？」
「いらん。これは心の汗だ」

☆

「今日は相談に乗ってくださってありがとうございました。それでは……」
「待て、私からもいくつか話がある」
　帰る様子を見せたユウを、ミオが引き留めた。
「貴様から……、そうだな、『神無月』や警察に頼みたい事は無いか？」
「一応あるにはありますが、実現性が無いので……」
「構わん。何でもいいから話せ」
「では、どちらの組織からでもいいので政府に働きかけて、広品市に夜間外出禁止令を出せませんか？怪人や戦闘員は昼でも関係なく動きますが、魔物は日光を嫌う傾向があるので」
　ユウの要望を聞いて、彼女は渋い顔をした。
「無理だろうな。現時点の被害規模は国家としての緊急事態には程遠い。『神無月』もそこまで発言力のある組織ではない」
「追加予算が出たって言ってましたよね」
「事業仕分けされそうになっていた時期よりはマシだが、今でも赤貧状態なのに変わりはないんだ」

「ああ、あの噂本当だったんだ……」
　どうやら、この国のご当地退魔組織はあまり力のある組織ではないらしい。
「まあ、言うだけならタダだ。私の方から上に意見を出そう。次だ。最近白い仮面を付けた黒づくめの不審者が、夜の街で魔物を殺して回っているという目撃情報がある。貴様に心当たりはあるか？」
「……さあ、分かりませんね」
「……そうか。分からないなら仕方ないな」
　白い仮面の不審者と言えば、戦闘時のユウの外見と一致する。
　ミオは嘘を付かれていることを分かった上で彼の返答を受け入れたようだ。
　確かに、今のこの街に滞在していて、悪の組織と敵対していて、魔物を殺して回れるほどの力量の持ち主となれば彼以外の候補が存在しませんからね……。
　というか、ユウは夜中にそんなことをしていたのですか。本気で隠れたユウは『カサンドラ』でも補足するのが困難なので、今まで気づきませんでしたよ。
「最後だ。『精霊憑き』は貴様と同じぐらいの年頃の外見をしているらしいな。……出現以来、一日も休むことなく毎日悪の組織と戦っていて本当に大丈夫なのか？」
「彼女は……。少なくとも、僕に弱音を吐いた事はありませんよ。少々責任感が強すぎるきらいがあるので、なるべく気に掛けるようにしています」
　アカネは、戦う姿をリベレーター戦闘員に見られている。
　そして、制圧した戦闘員の取り調べを行う警察にも間接的に姿を知られている。
　直接会話したことが無くても、このように気にかけてくれる人は居るのですね。
「貴様もだぞ。日頃の無理が祟って肝心な時に力が出ないなんぞ笑い話にもならん。今のペースで問題無いのか？」
「僕は……。僕は、無理は、していませんから」

「……そうか」
いつもと同じ、穏やかな表情をした彼の目をミオはじっと見つめると、大きくため息を付いた。
その後、彼女は姿勢をピンと正し、キリリとした表情を作ってから口を開いた。
「私からは以上だ。……この街の平和は我々の双肩にかかっている。武運を祈る」
「ありがとうございます。神田さんも、いつぞやのように無茶はしないでくださいね？」
「……分かっているさ」

☆

「ふう……。なんというか、びっくりするほど良い人だなって思うよ」
「……そうですね」
強力な認識阻害能力を持つ『精霊憑き』でも、見ている人は見ているのだと改めて認識できた。
「ところで、『神降ろし』というのは？」
「各国が保有する常設の特級戦力。今はちょっと時期が悪くて動けないんだけど、リリウムさんも存在は知っているよね」
「そういうものがあるのは知っていますが、直接見た記憶はありません」
私が出る状況というのは、基本的に通常の戦力ではどうにもならなくなった場合なので、現地の勢力と接触することはあまり無い。
今回も、ユウが居なければ私とアカネの二人だけで『リベレーター』と戦っていただろう。
「それにしても『ラクリマ』の本体ですか。確かに、敵の言動や状況からそのような兆候は読み取れますね」
「本体については、リリウムさんでも分からないのかな？」
「申し訳ないですが、私でも未経験の部分ですね。でも、彼女は歴代の契約者の中でも最高クラスの資質を持っています。彼女と一緒であ

れば、どんな敵にも打ち勝つことができると信じています」
……精神面の不安と性癖に目を瞑れば。
「……そうだね。僕も、彼女が最強だと信じているよ」

☆

助けを求める子どもが居るのに、何故大人達は手を差し伸べられないのだろうな。
貴様には、大人の無能を罵る権利があるだろう。何故そうしない。
何故、それが当然のことだと諦めたような目ができるんだ。

１０＿精霊さんは話を聞く＿４

警察署を出て、彼が次に向かった場所は……あれ？この景色は見覚えがあるような。

『次の人は話がしたいって言ったら、ウチに来てくれることになったんだ。時間的にはそろそろ来るはず』

『なるほど』

ここは彼が一人暮らしをしているマンションのすぐ近くのようだ。

視線を向けてみれば、アカネが父親と二人暮らしをしているマンションも見える。

そのまましばらく待っていると、大型バイクが近くに止まり、運転手の女性が話し掛けて来た。

彼女はフルフェイスのヘルメットと革のライダースーツを身にまとっている。

「ユウ。駐車場はどこだ」

「こっちに来客用の駐車スペースがありますよ。先輩」

バイクから降り、ヘルメットを外すと彼女の素顔が露になる。

狼を思わせる凛々しい風貌で、黒髪のショートカットが印象的な人物だ。

二人は親し気な雰囲気で並んで歩き、バイクを駐車スペースに置くとそのままユウの自宅に向かった。

☆

「先輩は麦茶でいいですか？」

「なんでもいい」

「じゃあ麦茶で」

ユウの先導に従って彼女は席に着いた。

その様子を見て、私もふわりと実体化する。

彼女は前触れもなく現れた私の姿に驚くことも無く、こちらの目を

じっと見つめて来た。
麦茶を持ってきたユウが席に着き、その流れで会話が始まる。
「私は柊キョウコと言う。『教会』で魔物狩りをしている」
「初めまして。私は精霊リリウムです」
挨拶を済ませると、彼女はからかうような表情をしてユウに話し掛けた。
「話には聞いていたが、精霊か……。良かったじゃないか。お前は昔から、はぐれ精霊に一目で良いから会ってみたいと話していただろう」
「……ええ。こんなご時世でなければもっと嬉しかったんですが」
彼は少しだけ言葉に詰まった後、いつも通りの態度で返事をした。
ユウが、私のような土地に縛られない精霊を昔から探していた……？
何故？
「あの、初耳なんですけど」
「いやまあ、会って何かをしたいとかそういう話じゃないからね。危機的状況に精霊がやってきて助けてくれるなんて、物語みたいでロマンがあるから間近で見てみたかったんだ」
「なるほど？」
微妙に納得のいかない答えを返された。
彼にもそういうドラマチックな展開に憧れる一面があるということなのでしょうか。
「それで、話を戻しまして。先輩、最近『教会』の方で何か動きはありますか？」
「お前の方に影響がある話は特に無いな。『神降ろし』の儀式場を守るために、『教会』と『神無月』が合同で出雲市の某所に防御陣地を構築しているのと……あとは、『教会』の戦力で怪人を撃破する作戦案について話が来たぐらいだ」
「へえ、何か勝算でも見つかったんですか？」
ユウがそう聞くと、彼女は肩をすくめてお手上げだというジェスチャーをした。

「いや、物量で攻める単純な力押しだよ。瘴気を遮断する『聖域』を構築し、そこに怪人をおびき寄せる。怪人に秒殺されない水準の戦力を５０人ほど集めて、少しずつ削れば撃破できる可能性はあるという試算だ」
「穴だらけな作戦案ですね」
「そうだな。お前はどこが問題だと思う？」
　ユウはふむ、と考える仕草をしてから、さほど時間を空けずに口を開いた。
「まず戦力を集める段階で無理がありますね。怪人と戦えるような精鋭は国内に５０人も居ないと思うので、他国の防衛戦力から引き抜いてくる必要が出てきます」
「そうだな」
「で、物量で攻めるという作戦の性質上、作戦参加者の損耗率はかなり高くなると予想されます。よほどの事情が無ければ、他国の『教会』支部は精鋭戦力を損失するリスクを飲んだりはしないでしょう。そもそも、国内の戦力も『人類の未来の為に死ね』と言われて素直に招集に応じるか怪しいところがあります」
「だろうな」
「仮に戦力を集められたとしても、作戦の途中で怪人が逃走を選んだり、あるいは敵の増援が来たりすればその時点で破綻します。我々は無駄に戦力を失うだけに終わるでしょう」
「そうなるな」
「あとは、怪人を単体でおびき寄せる方法も難しい部分です。普通の状況であれば、配下の魔物を大勢連れて侵攻してくるはずなので」
　二人は分かり切ったことを確認するように淡々と話をしている。
　確かに、怪人という魔物は生身の魔法使いが戦うには荷が重い存在だ。
「だからまあ、よほどの事が無ければそんな作戦は実施されない。そういう意味では気が楽だな」
　キョウコはふう、と息をついた。
「なあユウ。『リベレーター』は『神降ろし』が動けないことを知った

上で決起したと思うか？」
「いや、偶然じゃないですかね？奴らが本気で『神降ろし』を危険視しているなら、適当に怪人を数体送って儀式場を破壊しているでしょう」
「なるほど。お前はそう見ているのか」
彼女は静かな表情でユウの目をじっと見つめている。
見つめられた彼は居心地悪そうに目を逸らし、それを見たキョウコはフッと笑った。
「そういうわけで、国内の『教会』支部は出雲市の防衛を優先し、そこも突破されればこの国を一時的に放棄する事も考えるという状況だ。近隣諸国の特級戦力である『紅龍』や『スネグーラチカ』は稼働状態にあるから、そちらの防衛線はそうそう破られることはないだろうしな」
広品市の現状からそうなんじゃないかなとは思っていましたが、やはりアカネが負けたら後が無いのですね。
そして、それを聞かされたユウの様子は……。
彼は国の存亡の危機であると言われたにも関わらず、分かり切ったことであるかのように平然としていた。

☆

「では、先輩へのインタビューの時間ですね」
「私が魔物狩りをしている理由か。今更話さなくても、お前はもう知っているだろう？」
「先輩の口から直接聞いたことはありませんし、リリウムさんに聞いてもらうためですから」
毎度の流れで『戦う理由』についての話が始まった。
改めて思いますが、ユウには”プライベートの話を初対面の私に聞かせる”という無理な要望を聞いてくれる知人が何人も居るんですよね。
私と彼は知りあって間もないですが、理由は……なんとなく分かる

気がします。
「最初は……とにかく魔物が殺したかったんだ。目的なんて大層な物は無く、ただ、八つ当たりがしたかった。『教会』に入ればついでに報酬も出るし、偵察部隊の支援も受けられて都合が良い。理由はそれだけだった」
　そこまで話して、彼女はユウの顔をじっと見た。
「本当にそれだけだったんだが……。私が危険度の高い任務を受け続けていると、奇妙な噂が広まったんだ。『柊キョウコは人々の平穏を守るために戦う献身的な人物だ』などという根も葉もない噂がな。こんなひどいデマが一体どこから出て来たんだろうな？」
「経理のおばちゃんとかじゃないですかね？直接会った事が無くて、帳簿上だけで見ていればそういう評価になるかもしれませんよ」
「……まあいい。私は周りにどう見られようが興味は無かった。だから、その噂を肯定も否定もせずにいつも通りに振舞っていた。そうしたら知らない内に噂に尾ひれや背びれがくっついていってだな。噂の中の私は『意外と優しくて面倒見が良い人物』ということになっていた」
　彼女はどこか温かみを感じる雰囲気で、当時の様子を語った。
「そんな噂が流れても、やはり私にはどうでもよかった。だが、普段の私を知らない『教会』の新人が噂を信じて話し掛けてきてしまったんだ。噂を否定するのも面倒だから適当にあしらったが……それが良くなかった」
「根も葉もない噂に実例ができてしまったんですよね」
「……そうだ。あの件をきっかけにして絡んでくる人の数が増えていった。私は誰かに頼られる事が多くなっても、やはり面倒だから適当にあしらっていた。そんな事を続けている内に、『周囲に無関心な私』と『面倒見が良い私』のどちらが本当の自分なのか分からなくなってしまってだな。仲間のために『良い人のフリ』を続けるのも悪くはないと思ってしまった。これが、今の私が魔物狩りを続けている理由だ」
　そう言い終わると、彼女はテーブルに置かれた麦茶を飲んだ。

「お前が必要だと言うから、こうして恥ずかしい自分語りをしているんだぞ。何か言うことは無いのか？」
「今日は無理な要望を聞いてくださって本当にありがとうございます。先輩にはいつも感謝していますよ」
「……今の発言の嘘の割合は……。まあいい。お前は無駄な事はしないからな」
調子の良いことを言うユウの様子を見て、彼女は何かを察したようだ。
二人はずいぶんと付き合いが長いようなので、私には見えない何かが見えるのかもしれない。
「では次です。愛情や優しさについて。後輩への面倒見が良い先輩なら、子どもに物を教えるぐらい簡単ですよね？」
「こういう決めつけてはならないモノに一つの答えを出すというのは、あまり健全ではないぞ。あくまでも一つの意見として受け取れ」
「分かっていますよ」
〝愛とは何か〟というテーマの質問に対し、彼女はユウに忠告を行った。
確かに、これが愛だ、などという決めつけは不健全な印象がある。
ユウについて行って色々な人の意見を聞いた後でも、私には彼の意図が分からない。
「愛情というのは……。言葉でも、態度でも良い。あなたの存在が必要だと伝えて、相手の居場所になることだ。大抵の人間は、他者からの承認無しで生きていくことはできない。だから、心の栄養を分けてやるのが愛情であり、優しさだ」
「……そうですね。子どもに伝わるかは分かりませんが、老若男女問わずに適用できる良い解釈だと思います」
「そうか。ところでお前は『マズローの欲求段階説』という理論を知っているか？」
「知っていますよ。『衣食足りて礼節を知る』みたいな話ですよね」
「……なんだ、知っているのか」
知識を披露しようとしたキョウコは出鼻を挫かれてややしょんぼ

りとした雰囲気になったが、気を取り直して話を続けた。
「人間の欲求には段階があって、下位の欲求を満たすか諦めるかしないと上位の欲求を抱くことは難しい、という理論だ。下から『生理的欲求』『安全の欲求』『社会的欲求』『承認の欲求』『自己実現の欲求』『自己超越の欲求』という順番になっている」
「……何で急にその理論の話を？」
「私が言いたいのは、〝隣人愛〟とはどの段階にある人間が持つ欲求なのかということだ」
　キョウコの問いに対し、ユウは少し考えてから答えを返した。
「〝隣人愛〟なら、元々献身的な欲求を持つ人物であれば『自己実現』、そうでなければ『自己超越』が該当すると思います」
「そうだろうな。私もそう思う。……この考え方は、今のお前の悩み事にも適用できるんじゃないか？」
　悩みについて言及されたユウは、口をへの字に曲げてあからさまに嫌そうな表情をした。
「勝手に人の悩み事を決めつけてそれに助言しようとするなんて、いくらなんでもおせっかいすぎやしませんか？」
「お前が碌に理由も言わずに〝戦う理由を教えて欲しい〟などと言うから、当てずっぽうで話すしかなかったんだ。正確な助言が欲しいならもっと詳細に状況を説明しろ」
「僕は先輩の気づかいはお腹いっぱいなので、そういう欲求は別の人に向けてあげてください」
　おせっかいを焼こうとするキョウコと、嫌がるユウの間で漫才のような攻防が始まった。
　この二人はなんというか……ずいぶんと気安い関係のようだ。
　嫌がる様子を素直に見せるのも、普段のユウからは想像し難い部分だ。彼はこういう年相応の表情も持っているのですね。

☆

　キョウコはポケットから何かを取り出し、ユウに向かって放り投げ

た。
彼は片手でそれをキャッチし、手に収まったソレを確認する。
手に収まるサイズの半透明の容器に液体が入っていて、上部には着火機構がある。一般的に普及しているガスライターのようだ。
「急になんですか先輩」
「今日は話をしてやっただろう。礼だと思って火を付けてくれ」
彼女は小さな紙箱を開封し、煙草を一本取り出してユウの方に差し出した。
「未成年が一人暮らししている部屋で煙草を吸おうとするなんて、とんでもない先輩ですね……。というか、禁煙したんじゃなかったんですか？」
「また吸いたくなったんだ」
「……まあいいですけど」
彼は微妙に嫌そうな顔をしながら、ライターに火を灯して差し出された煙草に着火する。
それを見たキョウコはにんまりと笑うと、煙草に口を付けて煙を吸った。
「フッ、実に愉快だな」
「僕は楽しくないです。あーもう換気扇回しますよ」
彼は席を立ち、キッチンにある換気扇のスイッチを押した。
キョウコは手元の携帯灰皿に灰を落としながら煙草を満喫している。
「……これをやりたいと思った時には、私はもう禁煙していたんだ。だから、実現する機会は無いと思ったんだがな。世の中は何が起きるか分からないものだ」
「僕も、先輩に部屋を煙草臭くされる日がくるとは思っていませんでした」
刺々しいユウの発言に、彼女はフフフと小さく笑った。しばらくの間、沈黙が続く。

「分かっていたのなら、話してくれても良かったんだぞ？」

穏やかな声色で発せられた言葉に、ユウはギシリという軋みを錯覚するような動きで硬直した。

「……先輩、それだけじゃ何の話か分からないですよ」

彼は、硬直した表情のまま常と変わらぬ声色でキョウコをたしなめた。

確かに、彼女の発言からは主語が抜けている。何が言いたいのか私にも分からない。

そんな発言に、彼が何故動揺しているのかも分からない。

「そんなに怯えたような顔をしないでくれ。私は、ただ……」

「……」

「……私には何もできないかもしれない。だが、話せば楽になるんじゃないか？」

二人の間で重苦しい沈黙が続く。

沈黙を破ったのはユウだった。

「……先輩が何を言っているのか、僕には分かりません」

「そうか」

「……でも、先輩が僕に優しくしてくれる事には、いつも感謝しています」

「……そうか」

☆

バイクに乗ったキョウコを見送り、ユウは自室に戻って来た。

「あの……、先程の最後の話は何だったのですか？」

「……」

彼は目を閉じ、右手を額に当てて何かを考えている。

私の声は聞こえているはずだが、応える余裕が無いのだろうか。

「ユウ？大丈夫ですか？」

「……リリウムさん。うん。僕は大丈夫だよ」
彼は姿勢を変えずに目を閉じたまま、声だけを取り繕って返事をした。
普段の冷静な様子とかけ離れたその姿は少々不気味ですらある。
あっ、これは大丈夫じゃないやつですね。
「あの……」
「いやまあ、少しすれば落ち着くから本当に大丈夫だよ？」
「そうですか？」
私が見ている前で、ユウは動揺を抑えるように深く息をついている。
そのまま彼はじっと何かを思案し続け、やがて考えがまとまったのか、うん、と頷いた。
そして、私には聞き取れない小さな声で、おそらくは自分に言い聞かせるために何かを呟いた。
「そうだ。こんな事があっても何も影響しないし、何の足しにもならないし、何も問題にならない。先輩に何ができるわけでもない。それに、……僕が救われたような気分になっても、何の意味も無いんだ」

☆

お前は私と初めて会った時から、どこか遠くを見つめていたな。
どんな気持ちだったんだろうな。悩みを打ち明けられる仲間は居たのか？
私では、お前の居場所になれないか？

11　精霊さんは話を聞く　5

動揺から立ち直ったユウに次の人で最後だ、と告げられ『転移』で移動した先は古びた民家だった。
床や壁の状態から年季が入っていることが一目で分かる。掃除が行き届いていないのか、うっすらと埃が積もっている所もあるようだ。
彼は段ボール箱があちこちに積まれた廊下をギシギシと音を鳴らしながら歩き、その物件の居間と思われる部屋に入った。
部屋の中も物が山積みになっており、乱雑なメモが書きなぐられた書類、ケースに収められた魔力を感じる素材、何かを計測している見慣れぬ計器など、様々な物が机の上に散乱していた。
壁際にある暖炉では、複雑な紋様が刻まれた釜が火にかけられて、ぐつぐつと音を立てている。
ユウは、その部屋の隅でパソコンに向かって操作を続けている小柄な女性に声をかけた。
「ナツミさーん。進捗どうですか？」
「……来たなバカ。ついさっき『邪眼』の対策装備が仕上がった所だよ」
彼女は作業の手を止めて、機嫌が悪そうな声で返事をしながらユウの方を向いた。
「今日はお客さんと一緒に行くって連絡したのに、その格好のまんまなんですね」
「いーだろ別に。話をするだけなんだし」
「まあ、ナツミさんが良いなら僕は構いませんが……」
彼女はTシャツにスウェットという、そのまま外出するには少々抵抗のある服装をしている。
伸ばしているというよりは伸びてしまったという雰囲気のボサボサの黒髪セミロングで、目の周りには隈が色濃く表れているようだ。
私はあまり礼儀作法を気にする方ではありませんが、そういう格好で来客を受け入れても平気な方なんでしょうか。

「ところで、さっきから計器が反応しているんだけど、もしかしてもうそこに居るのか？」
「居ますよ。リリウムさんどうぞ」
「どうも」
　ふわりとその場に実体化すると、彼女は「うひゃい」と声を上げてびくりと身体を震わせた。
「……ナツミさん。何も恥ずかしい事はしていないんですから、もっと堂々としてくださいよ」
「ううるさいな。分かっててもびっくりするんだよ」
　ナツミは姿勢を整えてからこちらに向き直り、自己紹介をしてきた。
「ボクは岩崎ナツミ……です。職業は……職業はなんだっけ？」
「自営業、個人事業主、フリーランス、お好きなのをどうぞ」
「……じゃあ自営業で。ボクは自営業の錬金術師をしています」
「初めまして。私は精霊リリウムです」
　ぎこちない様子の挨拶に合わせてこちらもお辞儀をする。
　彼女は年若いながら独立して事業を営んでいる人物らしい。
　そして、錬金術師。古くから連綿と技術を伝え続ける魔道具職人。
彼女が以前ユウが話していた協力者なのだろう。
「それじゃあまずは、用件の方からですね。試験の準備はできていますか？」
「できている。オマエの方はどうなんだ？」
「僕はいつでも準備万端ですよ」
「……ふん」
　ナツミはユウの方に睨むような目を向けた後、近くに置いてあったブレスレットを手に取り、魔法陣が描かれた机の近くに移動した。
　魔法陣の中心には土で作られた小さな人形があり、彼女はその人形に接する部分にブレスレットを置いた。
「障壁強度設定……よし。計器も準備よし。いつでもこい」
「はい。それでは……『疑似呪術：石化の邪眼』」
　ユウの手元から魔力で疑似的に再現された呪術が放たれ、人形に命

中した。
ナツミは険しい目つきをしながら近くにあるディスプレイを注視し、何かのデータを入力している。
「……次はギリギリ防ぎきれる強度に設定する。その次はギリギリ防ぎきれない強度だ。いけるな？」
「はい」
そうして、二人は呪術耐性を付与されたブレスレットの試験を進めていった。

☆

試験が終わり、ナツミがデータを見ながらうんうんと唸っている様子を横目に彼に話し掛ける。
「あなたは疑似呪術なんていうマイナーな魔法を扱えるのですね」
「……まあね。治療分野と重なる部分のある技術だから、何かの役に立つかと思って勉強したんだ」
疑似呪術というのは魔力で疑似的に呪術の効果を再現する魔法だ。
あくまでも疑似的なものであり、効率が悪く本物の呪術には遠く及ばない威力しか出せないため、このような実験室でのみ役に立つ類の技術である。
「これまで用意してきた装備品も全てこの実験室で作られた物なのですか？」
「そうだよ。リリウムさんが来る前から色々調べたりしながらナツミさんと一緒に作って来たんだ」
「そうなんですか」
改めて思う。アカネは私の契約者としてはとてつもなく運の良い人物だ。
私でも見たことの無い未知の呪術がすでに解析されていて、対策が用意できている。おまけに、それを治療する魔法を扱える人物がバックアップについている。
アカネが独力で対処するなら、発動を阻止するか、気合で避けるか

耐えるしかない。その場合は今よりも苦戦を強いられていたことは間違いないだろう。
「……よし！全部問題なし！できたぞバカ！」
データを確認し終わったナツミは顔を上げると、ユウに向かってブレスレットを放り投げた。
彼は危なげなくそれをキャッチする。
「いやー、いつもありがとうございますナツミさん。他に何か急ぎの要件とかってありましたっけ？」
「予算の底が見えて来た。今計画している分は足りるけど、追加で何かをする余裕がない」
深刻な声で告げられた内容に、ユウはあっけらかんとした表情で答えた。
「今計画している分が用意できるなら多分大丈夫ですよ」
「多分って何だよ。オマエには何が見えているんだ？」
「『リベレーター』にも色々と都合があって、そう簡単に怪人が増やせないことはなんとなく分かっていますから。まあ、どうしても予算が足りなくなったら僕が何とかしますよ」
「何とかするって……何か当てがあるのか？」
「昔のナツミさんの真似をするとか」
「～～っ！だからっ！何でオマエがそういうことをしなければならないんだよっ！」
「落ち着けってボクっ娘」
「ボクっ娘言うなあ！」
いきり立つナツミを、ユウは笑って誤魔化そうとしている。
……そういえば、彼らの活動資金やアカネのバイト代は誰が用意しているのでしょうか。
普通に考えれば、ユウの所属する組織が出しているはずですが。
「ぜえ……ぜえ……」
「日頃の運動不足ですね。たまには外に出て陽の光を浴びないと体調を崩しますよ」
「……自分の事を棚に上げて、よくそんな事が言えるなバカ」

「僕は無理はしていませんから。ナツミさんのおかげです」
「分かった。オマエはバカだから無理という言葉の意味が分からないんだな？ボクが優しく教えてやるからそこに正座しろ」
「すいません。今は忙しいので、ミーティングが必要であればカレンダーに予定を入れてもらえますか？」
「真面目に答えるなー！」
　彼は先程からものすごい勢いで罵倒されているが、二人は仲が悪いというわけではなく、じゃれあっているような雰囲気を感じる。
　ユウの側から煽るような発言が出て、それに噛みつくナツミという形で漫才をしているようだ。
「はいはい。では、急ぎの用事が無いなら次の話に行きますよ。ナツミさんは話す内容を考えてくれましたか？」
「考えてはきた。でも、ボクにはオマエが何をしたいのかが分からない」
「そんなに深刻に考えずに、適当に頭に浮かんだ内容で良いんですよ。正しい答えなんて無いんですから」
　話題が私が付いてきた理由の方に移った。集中して聞く姿勢を作る。
「ナツミさんは、どうして僕に協力してくれているんでしたっけ？」
「……オマエがバカだからだよ」
「リリウムさんにも通じるように話してくれませんか？」
「オマエが！バカで！一緒に逃げようって言っても付いてきてくれなくて！仕方ないから付き合ってやってるんだろこの……バカ！」
　彼に食って掛かるナツミ。
　つまり、彼女はユウのために頑張っている、ということだろう。
　それこそ、身だしなみを二の次にするぐらいには。
「そうですか。ナツミさんはそれを理由にできる人なんですね」
　しかし、それを聞いたユウは、色の見えない表情で彼女の想いを受け流した。
　ナツミはもっと何かを言いたそうな顔をしたが、上手く言葉にできなかったのか、そのまま黙ってしまった。

「では……。ナツミさんは、愛情や優しさというものが、どういう形をしていると思っていますか？」
「……」
「ナツミさん？」
「……今言う。言うから待って」
　彼女はしばらく躊躇う仕草をした後、ゆっくりと口を開いた。
「昔、〝大切な人と一緒に地獄に落ちる覚悟こそが本物の愛だ〟っていうセリフを見たことがあるんだ。相手がどんな道を選んでも、その選択を肯定して、一緒に居続けるのが美しいって」
　愛情の一つの形を語ったナツミは、でも、と話を続ける。
「でも、ボクは……。大切な人が道を間違えそうになっていたら、無理やりにでも止めてあげるのが優しさだと思う。そうする事で、嫌われたり、道を違える事があったとしても……それでも、黙って付き従うよりもずっと良いとボクは思った」
「……そうですか」
「なあ、何でこんな事をしているんだ？ボクはオマエみたいに察しが良くないから、黙っていたら分からないんだ。少しぐらい、教えてくれたっていいじゃないかっ……！」
　ナツミに詰め寄られたユウは、相変わらず静かな表情で淡々と返事をした。
「僕は、僕自身の利益の為に戦っていますよ」
「……意味が分からない。そんなに身を削って、何もかもを差し出して、それで利益？」
「ええ。僕はこうするのが最善だと信じて行動しています」
「なんでだよ。オマエは大した魔法使いだけど、そこまでする義理は無いだろ？オマエが投げ出したって、他の誰かがなんとかしてくれると思わないのか？」
「……きっと、みんなそう思っているんでしょうね」
　だから今、こうなっているんだ、と彼は言い放った。
「他に何か用件は残っていませんか？無ければこれで失礼しますが」

「……ボクは、オマエのそういう独善的で勝手に自己完結する所がキライだ」
「そうですか。それで？」
「それだけだよバカ」
　ナツミは不満げな表情で、罵倒の言葉を口に出した。
「僕は、ナツミさんの遠慮なくずけずけと物を言う所には好感を持っていますよ」
「何で今そういう返しをするんだよ。バカなんじゃないか？」
「それでは、本日は色々とありがとうございました。失礼します」
「おい、無視するなよ。……おい!?」

☆

『転移』を使いユウの自室に戻って来た。
　彼はベッドに腰かけると、額に手を当てて俯いてしまった。
「あの、体調が悪いのですか？」
「いや、体調はいつも通りだよ。ただ、ちょっと予想外の事が続いたせいで心が不安定になっているみたいだ」
　そのまま彼は、心を落ち着かせるために数回深呼吸をしてから顔を上げた。
「……よし、それじゃあ皆の意見も集まったことだし、作戦会議をしようか」
　彼は動揺から立ち直り、いつも通りの調子を取り繕った。
　私は彼の正面に立ち、じっと目線を合わせる。
「リリウムさん？」
「アカネに伝える方法も考える必要はありますが、その前に。ユウ、あなたには聞きたいことがたくさんあります。答えてくれますよね？」
　視線を強めるも、私の行動は想定内だったのか特に動揺は見られない。
「もちろん。僕もリリウムさんに相談したい事があるんだ。だから、僕の立場と今の状況について話をしようか」

☆

バカ。薬中。気狂いボランティア。何考えているのか分からない宇宙人。

もうボクにはオマエしか残っていないことを分かっているのか？

分かってないんだろうな。だから、ボクに遺書を預けるなんてことができるんだろうな。ばか。

12_魔法少女は休日を過ごす

今日は土曜日。わたしは、カエデと一緒に市内にある洋服店に来ていた。

目的は、外出用のおしゃれな私服の購入。

ユウ君と会う時はいつも制服か部屋着だから今のところは着る機会は無いけど、デートをする時のためにそれらしい服が一つは欲しい。

「よーし。じゃあ、あたしが良さげな服をじゃんじゃん持ってくるから、アカネはどんどん試着していってね」

「ええ。頼りにしているわ」

カエデは大勢の人の趣味趣向を調べているので、いわゆる男受けするファッションについても詳しい。

最初はリリィに頼ろうかとも思ったけど、リリィってあのワンピース以外を着ている所を見たことが無いし、少し話した感じだとセンスが古いというか……。とにかく、頼りにはならなさそうだった。

そうしてわたしは、カエデが選ぶわたしに似合いそうな服を次々に試着していった。

「まずはこれ。ベージュのワンピース！アカネのキャラなら似合うでしょー」

着てみた。

「どう？」

「似合ってはいるんだけどさ……。胸が大きすぎて清楚イメージが負けているというか。どうしても下品になるというか。その巨乳をあたしにちょっと分けてくれない？」

「無茶言わないでよ」

似合ってはいるらしい。購入を保留して次の服を着る。

「ゆったりめのボタンシャツとジーンズ。かっこいい系のファッションだけど……。うん。思ったより似合うし、まとまりも良い感じ！」

「そう？こういうのもおしゃれなのかしら」

「いやー、アカネってかっこいい系もいけるんだねえ。まあ水瀬の好みかどうかは知らんけど」
　そこはしょうがない。ジーンズは家にあるからシャツだけ買い物かごに入れ、次の服を着る。
「白のブラウスに紺のロングスカート。これは……」
「これは？」
「こいつは……やべー威力が出てるぞオイ。すれ違っただけで童貞を殺せそう」
　カエデは変な顔をして物騒な事をつぶやいた。よく分からないけど、良い感じらしいので買い物かごに入れて次の服を着る。
　……ユウ君って童貞なのかしら。
「タンクトップにホットパンツ。そしてデニムジャケット！パンクなコーデがいかがでしょうか？」
「ちょ、ちょっとこれ胸の谷間が見えてるんだけど？」
「こういうのも似合う人には似合うのよ。んー……でも髪型が絶望的に合わない。三つ編みやめない？」
「やだ。わたしは三つ編み好きなの」
　三つ編みをやめたとしても、これはちょっと攻めすぎだと思う。次の服を着る。
「ワイシャツにタイトスカートに黒タイツ。さらに伊達メガネを加えてバランスが良い。アカネ先生風味！」
「これってデートっぽい服装なのかしら……。あと、お尻がきついんだけど」
「結構大きめのサイズ持ってきたのにきついかー。まあ、これはこれで尻がぱっつぱつになっててエロいわよ」
　ヒールのついた靴とか動きにくいファッションはわたしは苦手だ。これはやめておく。
　そんなこんなでわたしはカエデと一緒に服を選び、良さそうな物を購入してから店を出た。
　カエデは何やら感慨深げにしている。

「いやー、楽しかったわ。にしても、あんなに真剣に服を選ぶアカネは初めて見た気がするねえ」
「今日はありがと。でも、なんでそんなにニヤニヤしてるの？」
　わたしがそう聞くと、彼女はからかうような声でその質問に答えた。
「気になる男子が居るって聞いた時は半信半疑だったけど、今日の様子を見て本気だって分かったからさあ。アカネにもついに春がきたようで、あたしは嬉しいよ」
「何よその言い方……。今までのわたしがおしゃれにも異性にも興味がなかったみたいじゃない」
　カエデはわたしのことを何だと思っているのか。少し真剣に問いたださなければならないかもしれない。
「いや、だってさ？アカネって去年の海水浴に学校指定の水着で来たじゃない。そりゃあ泳ぐのに支障は無いけど、遊びにいく時用の普通の水着を持ってないのはうわーって思ったわよ」
「うぐっ」
　痛い所を突かれてしまった。確かに、そんなことをしていればおしゃれに興味が無いと思われても仕方ない部分はある。
　でも、これにはわたしにも言い分がある。
「その……服のサイズがね？去年着ていた服がきつくなっちゃうことがあって。うちは裕福でもないし、一年で着れなくなる服を買うのはお金がもったいないから、必要じゃなければあんまり買わないようにしているの」
「あー、だから今回も少し大きめのサイズを選んでたのね。というか、それだけ大きくてまだ成長中って……。あたしにもちょっと分けろください」
「無茶言わないでよ。もう」
　たった今得た新しい情報を凄まじい速度で手帳に書き込むカエデ。
　あいかわらず奔放な彼女の姿を見て、わたしはふっと笑った。

☆

二人でカラオケボックスに入り、マイクを握って歌を歌う。
カエデが同じ曲で点数勝負を仕掛けて来たので、正面から受けて立った。
……。
ふっ、カエデごときがわたしに勝とうなんて１００年早いわ。
「また負けたー。ちくしょー、この機械壊れてるんじゃないの？」
「負け惜しみは見苦しいわよ」
飲み物に口を付けると、カエデも釣られたように茶色っぽい色をしたドリンクを飲んだ。
彼女はドリンクバーを頼むと探求心が抑えられなくなるようで、何度痛い目に遭っても未知の味を求めて挑戦を続けている。
今回はそれなりに美味しいものができたようなので、残す心配は無さそうだ。
ふと、カエデが話し掛けて来た。
「アカネはさー、水瀬のどういう所が好きになったの？」
「えっと……？」
「好きになったんならそれなりの出来事とか積み重ねがあったんでしょ？大親友のあたしに聞かせなさいよ」
彼女はからかうような軽い口調だが、その視線には真剣な雰囲気が含まれているようだ。
「……。普通に恥ずかしいからあんまり言いたくない」
「ほーん？アカネはこういうの恥ずかしがる方なんだ。嬉々として惚気話されるかと思った」
「確かに、話したい気持ちもあるけど。……どうしても聞きたい？」
「どうしても。好きな所の一つも挙げられない男にアカネをやることはできんぞー」
カエデは、妙なキャラ付けの発言をしながら譲らない姿勢を示した。
ユウ君が好きな理由。
彼と触れ合った時間で、わたしが何を感じたのか。

……。
……。
……。
しまった。魔法関係の出来事を除くと、話せることがだいぶ少なくなってしまう。
と、とりあえずすぐに浮かんだものを……！
「ええと、水瀬君は……距離感を測るのが上手い、気がする。近くに来て欲しいなって時には近くに居て、一人になりたい時はさっと離れてくれる感じ」
「ほほう。気遣いができるタイプはポイント高いね」
カエデは早速手帳を開いてペンを動かしている。
他に何か、何か浮かぶものは……。
「あとは……お父さんに雰囲気が似ている、ような……」
わたしは頭の中に浮かんだそれを、深く考える事なくそのまま口に出した。
それを聞いたカエデは、ペンを動かす手を止めて全身をピタリと硬直させる。
「……。えっ？」
「……あっごめん今の無しで!?」
気になる異性の話をしている時に”お父さんに似ている”は流石にありえない発言だった。
わたしは急いで否定したが、カエデはススッと後ずさり距離を取る。
「やっぱりファザコンじゃないか……やっぱりファザコンじゃないか！」
「ファ、ファザコン違うし」
「うひい！近寄るなあファザコンが感染る～」
「感染んないわよ!?」
わたわたと慌てるわたしを見て彼女はくすっと笑い、普通の姿勢に戻った。
「まあ、その。アカネにとって最上級の誉め言葉がそれだったってこ

となんでしょ？」
「そう、なのかも？」
「自分でも分かってないんかーい」
　わたしはわたしの心が出力したものを言葉にしただけで、わたしの心がその答えを出した理屈は分からない。
　恋は理屈じゃないって言うし、そういうもの、なのかな？
「なんかわたしの方だけ話しているのが不公平な気がしてきたわ。カエデの方はどうなの？好きなタイプとか、気になる人とか居ないの？」
「あたし？あたしはそういうのよく分かんないかなー。良い人だなって思う事はあっても、素敵な人だなって思う事が無い感じ。そもそも、クラスでも女子として扱われていない感じだし」
「分かっているならもうちょっと自重しなさいよ」
「今からおとなしいフリをしても意味無いから。あたしのことは誰にも止められねーんだ」
　彼女は女子と言うよりカエデという生き物として扱われている節がある。
　まあ、全て彼女がやらかしてきた事が原因なので、自業自得ではあるのだけど。
「むん。歌いたくなってきた。次はあたしの番で良い？」
「どうぞ」
「あいよー」

☆

「いやー歌った歌った。余は満足じゃ」
「どういうキャラなのよ。もう」
　カラオケボックスから出て、洋服の入った紙袋を手に下げ帰路につく。
「アカネはこの後バイトなんだっけ？」
「……ええ。荷物もあるから一度家に帰ってからね」

アルバイト。
わたしは、放課後の時間に忙しくなる理由を周囲にそう説明していた。
土曜日である今日も、もちろん『バイト』の予定は入っている。
「時間はそんなに長くないみたいだけどさ、毎日シフト入れるのはきつくない？」
「確かに、疲れるなって思うことはあるわ。でも、我慢できないほどじゃないから」
「頑張るねえ。大丈夫？無理してない？」
「無理は……してないわよ。うん」
わたしはきっと、無理はしていない。
疲れるなって、投げ出したいなって思う事があっても、その気持ちを抑え込んで、何でもないように振舞えている。
だからきっと、無理はしていない。
本当に限界なら、こうして取り繕うこともできていないはずだから。
「んー。……まあ、アカネが大丈夫だって言うなら信じるけどさ。きつくなったらちゃんと周囲に相談しなよ？」
「わたしだって子どもじゃないんだから、それぐらい分かってるわよ」
「分かってるならいいけど。アカネはやせ我慢の達人だから、ちゃんと言わないと周りに伝わらないからね」
それだけ言って、カエデは立ち止まった。
「じゃ、あたしはこっちだから。またねー」
「ええ、また」

一人でぽつぽつと歩いていると、ふと頭に浮かぶものがあった。
どうして、お父さんとユウ君が似ていると感じたのか。その理由が何なのか。
ユウ君は、わたしに対して罪悪感を抱いている……気がする。
頑張って隠そうとしても、その視線に含まれる感情はとても見覚えがあるものだった。

そして、苦しみを抱えながらも、気付かれないように必死で隠してわたしに優しくしようとする所もそっくりだ。
お父さんは、未だにお母さんのことを忘れられずにいる。
行方不明になってから15年近く経つのに、再婚の検討もしないで当時のアルバムを見てニヤニヤしてるのはちょっと一途すぎると思う。
ちょっと控えめな所はあるけど、かっこいいし優しいし家庭的なんだから、再婚しようとすればすぐにできたはず。
そりゃあわたしだって、知らない人をお母さんとして受け入れたり、弟や妹ができるのには困惑すると思うけど、お父さんも自分の幸せを求めてもいいのに。
わたしのお母さん。お父さんとは広品学園で出会ったって話してたっけ。
まっすぐな正義感と優しさを持つ、とても意志が強い人だったらしい。それでいて美人でスタイルも良いんだから、クラスではモテモテだったとか。
お父さんはわたしが寂しくならないように、お母さんとの思い出を何度も何度も語ってくれた。
お父さんは、お母さんが居なくなってしまったことに苦しんでいる。そして、わたしを『父親と母親が居る家庭』で育てられなかったことに罪悪感を抱いている。
でも、ユウ君は何が苦しくて、何に罪悪感を抱いているのだろう。
彼の感情の中身は分からないけど……その様子を思い浮かべると、わたしの中に得体の知れない衝動が沸き立つのだ。
これが、きっと、恋なんだろう。

今日は土曜日。わたしは、カエデと一緒にお出かけをした。
とても楽しかった。カエデも楽しそうだった。街を見ても平和そのものだった。
わたしがこれから悪の組織と戦わなければならないことが、悪い夢なんじゃないかってぐらい平和だった。

分かっている。これが悪夢じゃなくて現実だってことぐらい分かっている。
意識を向ければ、リリィとの確かな繋がりがそこにある。
『変身』のやり方も、魔法の使い方も、武器を手に取って戦う方法も身体が覚えている。
でも、この世界に魔法があるなら。魔法使いが、居るのなら。
白いひげを蓄えた偉大な賢者が、鍔の広いとんがり帽子を被った魔女が、不思議な呪文で悪い奴らをやっつけてくれればいいのに。　わたしの中に、そんな願望があるのも紛れも無い事実だった。
わたしは街の平和を守るために戦っている。
だから、人々が平和に暮らしていることや、カエデがいつも通り元気でいることに喜ぶべきだ。
わたしが苦しんでいることに気付かないで、お気楽な学生で居られることがズルいなんて、間違った感情だ。
間違っている。こんな、どうしようもない逆恨みのような感情は抱くべきではない。
こういう時の正しい感情は。あるべき振る舞いは。
お母さんなら、どう思ったんだろう――――？

13―精霊さんは意見を求める

私に強い視線を向けられながら、ユウは淡々と語りだした。
「まずは、僕の肩書からかな。広品学園2―A所属の学生で、『教会』の見習いをしている」
「見習い？」
「一応は学生が本業だから。正式に所属しないまま、バイトみたいな形で仕事を請けているんだ。治療とか、魔物狩りとか、珍しいのだと『転移』を使った運び屋とか」
彼の力量は見習いと呼べる領域のものではないと思うが、この時代の『教会』の雇用形態がそうなっていると言うならそうなのだろう。
では、確認を後回しにしていた例の件はどういうことなのだろうか。
「あなたは『教会』の指揮下で動いているのですか？」
「あー、いや、実は……。独断で行動しているのを見逃されている状態、というのが一番適切な表現かな」
「???」
彼は少しだけ後ろめたさを滲ませながら、よくわからない発言をした。
「いや、先程も『教会』の施設に出入りしていましたし、治療の仕事もやっていましたよね？それが、見逃されている状態？」
「うん。『リベレーター』の出現を一番最初に報告したのが僕で、勝手に動向を調べて調査結果を出し続けることでなしくずしに担当者に収まった感じ。独断専行もいいとこだから、正式に認められたわけじゃないけどさ」
「えーと……？」
「やりすぎて処罰の対象になるかと思ったけど、今のところは放任されてる。うちの支部長が頭の柔らかい人で助かったよ」
やはり、よく分からない。分からないなら聞くしかない。
「あなたは、『教会』の指示からではなく独断で動いている」

「そうだね」
「何故そうなっているのですか？」
「何故って……。僕がそうするのが最善だと判断して、『教会』もそれを消極的に受け入れたからだよ。正式に承認されない理由は、『教会』が未成年の見習いを死地に向かわせるほど非人道的な組織ではないからというのが一番適切な表現だと思う」
正式に、承認されていない？
ということは。
「先程、予算が枯渇しそうだという話をしていましたよね。『教会』から資金は出ているのですか？」
「今は出てない。経費については帳簿をつけてるから、状況が落ち着いたら請求できる分は請求する予定だよ」
指示を出されていない。
資金の提供を受けていない。
事件を解決するために独自で動いている。
つまり……。
「あなたは、偶然この地に居たために事件に巻き込まれた子どもなのですか？」
「……その表現は微妙に受け入れ難いけど、客観的な事実の一つではあると思う」
彼は、嫌そうな表情をしながら渋々とその事実を認めた。
……。
……。
……。
このスペックで巻き込まれた子ども???
いや、しかし、それなら彼の知人たちの態度にも説明がつく。
「何故黙っていたのですか？」
「聞かれなかったから。そんなに重要なことでもないだろう」
「他の人員は？」
「『教会』の所属でこの件の対処に出ているのは僕だけだよ。『神無月』の方は神田さん以外にも数名の人員が居るみたいだけど、前線に出る

役割の人は居ないね」
「あなたは未成年でしょう。保護者は何と言っているのですか？」
「家族は……。危険なことはやめて実家に帰ってこいって言われたけど無視したよ。生活費は自力で稼いでいるからそこは問題無いし、今のところは強硬手段を取る様子もない」
「何でアカネにバイト代なんて出しているんですか？」
「喫茶店バイトをできなくしたのは事実だし……。それに、『カサンドラ』の維持費とかその他の経費と比べれば彼女のバイト代なんて大した額じゃないよ」
彼は淡々と私の質問に答えていく。
家族のことを話す時に少しだけ揺らぎを感じたが、それでもはっきりと言い切った。
「僕の立場についてはそんな感じで。続けて各組織の動向だけど……」
そう言ってから、ユウは広品市を取り巻く現状について説明を続けた。
『教会』は世界的な魔物の活性化の対処で、広品市に戦力を割く余力が無い。
たとえ余力があったとしても、特級戦力と肩を並べて戦える人材は居ない。
足手纏いになったり捕縛されて情報を抜かれるリスクを考えれば、中途半端な戦力を増援として出す意味が無い。
『神無月』は元々武闘派の組織ではない。
細々とした情報工作や警察との連携で市民の被害を抑えているが、事件を解決する力は持っていない。
時間を稼げば『神降ろし』の増援が期待できるが、『リベレーター』が戦力を拡大し続けていることを考えれば持久戦を選ぶべきではない。
警察は全力で対処に当たっているが、治安の悪化を抑えることしかできていない。
彼らは魔法業界については門外漢であり、どれだけ血を流しても大

勢に影響を与えることはない。
「だから、『リベレーター』を打倒するためには天峰さんとリリウムさんの力だけが頼りなんだ。いやあ、まったくもってどうしようもない状況だよ。あっはっは」
彼は、まったく楽しくなさそうな目をしながら口元だけで乾いた笑みを作った。
明かされた情報には想定内の物も想定外の物もある。
頭痛を感じながらそれらの情報を整理し、話を続けた。
「それで、何故今になって状況を明かしたのですか？」
「……あれ？情報を共有していなかった事に怒らないんだ？」
私の態度が意外だったのか、彼は目を丸くして聞き返してきた。
確かに、場合によっては裏切りとも取れる行為かもしれない。それでも、私の答えは決まっている。
「私は、あなたが人々の平穏を守るために身を粉にして働いている事を知っています。アカネが無事に帰ってこれるように、必死に知恵を絞っている事を知っています。だから、そんなあなたがアカネを戦わせているという事実から、そうせざるを得ない状況だという事は分かっていました」
情報収集、先行偵察、作戦立案、出撃時の補佐、出撃後のケア、物資調達、各組織との連絡などなど。
この巻き込まれた子どもを自称する不審な高位魔法使いが居るおかげでどれだけ楽ができていることか。
いつも通りであれば、契約者と私のコンビで全部やっていましたからね。もちろんバイト代なんて出ませんし。
「リリウムさんはちょっと人が良すぎると思う。僕みたいなうさんくさい人間を簡単に信用するなんて」
「誰に頼まれたわけでもないのに、自主的に正義の味方をやっているあなたほどではありませんよ」
「……だめだ、言い返せない」
私が当然の指摘をすると、彼は”そういえばそうだった”とでも言いたげな顔をした。

「それで、あなたの今日の行動の意図は教えてくれるのですか？」
「それはもちろん」
ユウがわざわざ私を連れて、協力者達と話をした理由は何なのか。
「まず一つは、僕の知り合いの人達にそれぞれの事情を聞くため。初めにリリウムさんに言った通りの理由だよ」
アカネは、自分の身を危険に晒してまで戦う理由を持っていない。
そんな彼女の背中を押す手がかりを求めて、彼は皆の意見を聞いた。
「二つ目は、リリウムさんに現状について正確に把握してもらうため。僕の仕事の”引継ぎ”が必要になった場合に備えて、顔合わせだけでもしておきたかったというのも理由になるかな」
確かに、ユウに口頭で説明を受けるよりも、各方面の関係者に直接話を聞いた方が理解しやすい部分はあるだろう。
そして”引継ぎ”。
……あまり考えたくはないが、彼はそうなる可能性も想定して動いている。
「三つ目。これが最後だけど、現状を把握したリリウムさんに相談したいことがあったんだ」
「私に？」
「そう。今の天峰さんの心に一番近い所に居るあなたに。本当は彼女の父親か坂本さんに相談するべきなんだろうけど、今の状況ではそれができないから」
私に相談したいこと。他でもない、アカネの本音に一番近い所に居る私に。
「天峰さんに、自分の事を好きになって貰うにはどうすれば良いんだろうね？」
彼は憂いを帯びた声で、その相談内容を語った。
「自分の事を、好きに？」
「うん。今の彼女は少し不安定な所があるから、それをどうにかでき

ないかなと思って」
「確かにアカネには少々危なっかしい所がありますが、そこまで言うほどですか？」
誰にだって性格の偏りはある。
アカネはレイプして欲しいなんて言い出しちゃう子ですが、彼が問題視するほどなのでしょうか。
「僕は一応クラスメイトとして一年ちょっとの付き合いがあるから、なんとなく分かるんだ。それに……”街の平和を守るために一緒に戦って欲しい”なんて言われて承諾してしまうような人間が、本当に自分の事を大切にしていると思うかい？」
「それは……」
あの時のアカネは、目の前に居る少年の誘導に流されて戦うことを受け入れた。
喧嘩もしたことのない少女が血と暴力の世界に足を踏み入れて、表面上は平静を保っている。
物わかりの良い契約者と思って見過ごしていましたが……本当にそれだけだったのでしょうか？
「天峰さんがありのままの自分を認められるようになって、自分自身が心の底から望むことに気づけたら。そうすれば、それはきっと彼女の”戦う理由”になるんじゃないかと思ったんだ」
「あなたが『優しさとは何か』というテーマで意見を集めていた理由もそれに関係するのですか？」
「そうだね。天峰さんはどういう事をされたら喜ぶのか分からなくって。こんな事は本人に直接聞いた方が良い気もするけど、本人が正しく自己分析できるとは限らないし」
優しさの形は人それぞれであり、ある人が嬉しく感じる行為でも、他の人は傷つくかもしれない。
そういう、他者を尊重することの難しさを彼は理解しているようだ。
どうすれば、アカネが自分自身を肯定できるようになるのか。
私達にできることは何か。

……。
私の手元には、その作戦を実行するための手札が揃っている。
「一つだけ方法が浮かびました」
「おお、さすがリリウムさん。して、内容は？」
「ナイショです」
「……ええー？」
多分上手く行くと思う。思うけど……ちょっと自信が無い。
それに、私達にはまだできることがある。
「ユウ。私は今日、あなたの知人達の意見を聞きました。私の立場ではなかなか得ることができない貴重な体験だったと思います。皆の意見を聞いていたら、私も意見表明をしたくなりました。聞いてくれますか？」
「リリウムさんの意見を？それはもちろん大丈夫……どころか、是非聞きたいぐらいだよ」
私の急な提案を、彼は少し戸惑いながらも受け入れた。
よし、少し恥ずかしいですが、私も自分語りをするとしましょう。
「私が戦う理由は、魔物と戦い人々を守ることが精霊の使命だから、というのが一つ目の理由です。ですが、それだけではありません。私にも個人的な望みはあるんですよ」
瞼を下ろし、少しだけ過去に想いを馳せる。
「私は……、かつての契約者達が懸命に戦ってきたことを覚えています。初めましてから始まって、戦いが終われば眠りにつく。そのような短い付き合いでも、彼女達の想いを覚えています。みんなみんな、時の流れの向こう側に行ってしまっても……それでも、彼女達の頑張りを、人の輝きを覚えています」
勇敢な人。臆病な人。熱血な人。冷静な人。しっかりした人。そそっかしい人。
時の流れは平等で、みんなみんな居なくなってしまった。
それでも。
「過去があって、現在がある。昔の人々の頑張りによって今が作られているのです。私は、過去の契約者達の想いを無駄にしたくない。懸

命に続けられてきた人の営みを守りたい。これが、私の戦う理由です」
「……そっか。リリウムさんにもちゃんと理由があるんだな」
「ええ。当代の契約者であるアカネのことも、ユウ、あなたのことも覚えていますよ」
「偉大なる精霊様に名前を覚えていただけるとは、とても光栄なことでございますね」
「ふふっ、おだてても何も出ませんよ」
　ちょっとした漫才を挟み、次の話に進む。
「『愛や優しさの形』については、私は寛容である事だと思います。相手が未熟だったり、多少おかしなところがあったりしても、意見を聞いて、個人として尊重し、信じる事。こちらの意見を無理矢理押し付けることは絶対にしない。私の考える優しさの形はそのような物ですね」
「きっと、リリウムさんがそういう在り方だから天峰さんもあなたのことを信頼したんだと思うよ」
「そうでしょうか？」
「うん。相手の立場になって物事を考えるのは、当たり前のようでもすごく難しいことだから。僕も、リリウムさんの考え方はとても好ましい物だと思う」
「……。もしかして口説いているんですか？」
「いやいやまさか」
「そこは冗談でも肯定するべき場面ですよ」
「そうなの？」
「そうなんです」
　まあ、この考え方にはいくらかの処世術も含まれているのですが。
　私は契約者を選べませんからね……。
　脅威が迫る中で資質のある者を探し、飛び込み営業をして契約を取り、戦いの場へ導く。
　初対面の相手の信頼を得るには、広い心が必要だった。
「さて……それではユウ、次はあなたの番です」

「え？」
「私は、私の意見を言いました。あなたの意見も聞かせてくれませんか？」
　困惑するユウに、にっこりと笑顔を向ける。
　〝逃げる事は許さない〟という強い意志を込めて。
「参考になる意見はもう十分集まったんじゃない？」
「私があなたのことを知りたいんです。あなたの持つ意見……いいえ、信念を。ダメでしょうか？」
「僕はちゃんとした答えを考えてきていないんだけど」
「あやふやな物でもいいんです。どうか、聞かせてくれませんか？」
「……。リリウムさんがそこまで言うなら」
　よし、やはりこういう場面では素直に頼むのが一番ですね。
　この、私にとってあまりにも都合の良い人物が、大切にしている価値観は何なのか。
　巻き込まれた子どもを自称する不審人物が、何を思って危険に身を晒しているのか。
　ユウはしばらく考え込んだ後、静かな声で語りだした。

「僕は……なんだろうね。そう、嫌いなものがあるんだ」
　ぽつぽつと、手探りで感情を探るように。
「根性論とか、同調圧力とか……中でもとびっきり嫌なものがあって」
　しとしとと、水気を帯びた。
「どうして、魔物は人を襲うんだろう。どうして、魔法使い達にはこの事態を解決する力が無いんだろう。どうして、天峰さんは『精霊憑き』になったんだろう。どうして、彼女に戦いを強いなければならないのだろう。そんな、答えの出ない理不尽な問いがたまらなく嫌で」
　ふつふつと、泡立つように。
「降り積もった疑問が頭の中を埋め尽くすと、胸の内に感情がこみ上げてきて」
　どろどろと、泥濘のような。
「心の内にある昏い感情。それを意識すれば……理不尽に抗う、戦う

力が湧いて来るんだ」
それは紛れもなく、憎悪であった。
「……ごめん。僕は皆みたいに前向きな感情で戦っているわけじゃないんだ」
ユウは顔を上げて私に謝罪をしてきた。
「……いえ。あなたの想いは確かに受け取りました」
「……。ありがとう」
ユウがいかなる経緯を経て運命を呪うようになったのかは分からない。
この少年が、これだけ深刻な憎悪をいつから抱き始めたのかも分からない。
それでも、私を信じて明かしてくれたその感情は紛れもない本物だった。
友好的な態度の裏に秘めた感情。これもまた、彼を構成する要素の一つだ。
「次は、優しさについてか。人に優しくするのってすごく難しいと思う」
「そうなのですか？」
「そうでなければ皆に相談したりしないよ。僕が考える中で理想に近い物はさっきリリウムさんが出しちゃったし……。ネタ被りはよろしくないよなあ」
先程とはうってかわって気楽な様子で考え込むユウ。
それにしても、私の出した答えが彼の理想に近い物ですか。
そうですかー。
……。
ふふ。
「リリウムさん？何か楽しい事でもあった？」
「いえ、何でもないです」
私の口角が僅かに上がったことに気付かれてしまった。
考え事に集中しているように見えても、私の方に少しだけ意識を向

けていたようだ。
私の返事を聞いた後、彼は目を閉じて思索に耽る。そして。
「……なんとか一つだけ思い浮かんだよ」
ユウはどこか遠い所に視線を向けている。
私は姿勢を正し、話を促した。

「昔、僕がもっと小さい時に……何もかもが嫌になって、雨が降る公園で一人で泣いていたことがあったんだ」
「そうしたら、みすぼらしい服装のおじいさんが近くに来て「ボウズ、大丈夫か」って聞いてきた。多分ホームレスの人だったと思う」
「僕は何もかもがどうでもよくなっていたから、泣き続けるだけで返事をしなかった」
「おじいさんは僕のことをじっと見た後、近くにある自動販売機で……何か、温かい飲み物を買ってきた」
「その飲み物を僕の近くに置いた後、おじいさんは「ボウズ、話をする気は無いか」と聞いてきた」
「僕はおじいさんのことなんてどうでもよかったから、やっぱり泣き続けるだけで返事をしなかった」
「おじいさんは僕の返事を暫く待った後、飲み物を置いたまま、何も言わずに去っていった」
彼はふう、と息をついた。
「この話はこれでおしまい。僕は悩みを打ち明けなかったし、おじいさんとはそれっきり会うことも無かった。問題は何も解決しなかった。でも、理由は分からないけど……この思い出が、どうしても忘れられないんだ」
大切な思い出を、信念を形作るきっかけとなった出来事をユウは語る。
「多分、僕の事を尊重してくれたのが嬉しかったんだと思う。そっと手を差し伸べるだけで、強引に手を取ろうとはしなかった。あの時あの人に出会えた僕は、きっと運が良い人間なんだろうね」
そして、彼が出した答えは。

「自分に余裕が無くても、見ず知らずの相手でも、手の届く所に困っている人が居るなら無理の無い範囲で親切にする。そういう、見返りを求めないささやかな施しが愛や優しさなのだと僕は信じている」

ユウの結論を聞いて、腑に落ちるものがあった。

今日出会った人々は皆、彼の頼みに快く応じ、無事に再会することを祈っていた。

彼が知人に恵まれているのは、おそらく〝無理の無い範囲で親切にしてきた〟からなのだろう。

だが、『手の届く所』や『無理の無い範囲』といった要素は個人の能力によって大幅に変動しうる。

私は頭に浮かんだ懸念をそのまま口にした。

「あなたが夜の街で魔物を殺して回っているという話をミオがしていましたよね。それも『無理の無い範囲で親切にする』に含まれているのですか？」

「……そうだね。僕が少し頑張れば助かる人が居るんだ。まあ、あくまでも『無理の無い範囲』に限るけど」

ユウは独力で『転移』の行使が可能な高位魔法使いで、『カサンドラ』により市内の全域を把握し、戦いの心得もある。

そう、彼には〝助けを求める人が見える〟。そして、〝どこに居ても手が届く〟。届いてしまう。

見えなければ、存在しないものとして無視することができた。手が届かなければ、力不足で涙するだけで居られた。

彼はその優秀さ故に『戦う』か『見殺しにする』の選択権を得てしまっている。

一人の人間にできることには限りがあるというのに。

「ユウ、あなたは本当に無理をしていないのですか？」

「本当だ。何を一番優先するべきかは分かっている。そこの所は弁えているからリリウムさんは安心して良いよ」

「そうではなく……、あなたは本当に平気で居られるのですか？」

「……リリウムさんには、天峰さんの方に意識を向けて欲しいと思っ

ているよ」
「……っ！」
私に対して弱音を吐く気は無い。それが言外に滲ませた彼の返答だった。
……私はユウの拒絶を尊重する。だから、これ以上踏み込むことはしない。
まだ、一つだけ聞いていないことがあった。
彼の立ち位置について、核心に迫る質問が残っている。
「最後に、私から質問です。――あなたは、アカネの味方ですか？」
答えが分かり切っているはずのその質問を受けて、ユウは即答しなかった。
彼は息を吐いて、感情の読み取れない表情で淡々と返答をする。
「僕は〝ルミナスレッドの味方〟だよ、リリウムさん」
……やはり、そうなるのですね。
この返答は、彼の立場、性格、信念から推測した通りのものだ。
「私としては、そこまで厳密に区切る必要は無いと思うのですが」
「僕は気にするんだ」
「細かい事を気にする男は嫌われるそうですよ？」
「もう嫌われているんじゃないかな。ははっ」
私が茶々を入れると、彼は少し疲れたような表情で苦笑した。
「リリウムさんの立場なら、契約を結ぶ事と味方であることは矛盾しない。でも、僕はそうじゃないんだ。本当に天峰さん個人を大切にしているなら、戦いの場から遠ざけようとするはず。僕は結局、彼女の善意に付け込んで利用している人間に過ぎない」
「あなたも、望んでそうしているわけではないでしょう？」
「……。それでも、僕の感情と客観的事実は分けて考える必要がある。僕は、誰に優しくするかを選んだんだよ」
そう、それは客観的な事実だ。
彼は人々の平和を守る魔法使いとして、アカネに協力を要請した。
争いごととは無縁の少女に、人々を守る戦士であることを求めた。
でも。それでも。

アカネはあなたのことを、”いつも冷静で頼りがいがあって、顔も知らない誰かの為に戦うことができる心優しい人”と評価していましたよ。

「では、アカネを元気にするための作戦は私に任せてください」

「何で僕に内容を教えてくれないんですかね？」

「今日まで情報を共有してこなかった事への意趣返しと思ってください」

「……それを言われるとぐうの音も出ないな」

作戦に必要な準備を頭の中で整理する。

これから私は少しばかり大変な作業をするのだ。

アカネ。

私は、あなたの心の在り方を信じていますよ。